

仙台市文化財調査報告書第202集

# 下ノ内浦遺跡

— 第5次発掘調査報告書 —

1995年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第202集

# 下ノ内浦遺跡

— 第5次発掘調査報告書 —

1995年3月

仙台市教育委員会



第6c層断面 (III区西壁H-1 グリット)



第6c層全景 (IV区、北より)

## 序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、誠に感謝にたえません。

現在、仙台市内には約700箇所の遺跡が知られており、太白区に所在する下ノ内浦遺跡もその一つです。この遺跡の周辺には、富沢遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、元袋遺跡などがあり、一体として、その総合的に捉える必要がある遺跡と認識しております。これらは、いずれも郡山低地と称される中にあり、自然堤防と後背湿地上に住居跡や水田跡などを残す遺跡です。

今回この遺跡内で共同住宅を建設することになり発掘調査を実施しましたが、古代・中世を中心とする水田跡などが発見され、当書で詳しく報告いたしております。

このような発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料ですので、今後の仙台市における街づくりや学校教育などの中に、充分活かしていきたいと考えております。

この報告書が広く皆様にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にご協力くださいました株式会社大京ならびに周辺町内の皆様に対し、心より感謝申し上げます。今後とも関係各位のご指導、ご協力をお願い致します。

平成7年3月31日

仙台市教育委員会

教育長 坪 山 繁

## 例 言

1. 本報告書は共同住宅建設に伴う下ノ内浦遺跡第5次発掘調査報告書である。
2. 本報告にかかる発掘調査・整理作業及び報告書刊行に要した費用は、申請者株式会社大京が負担した。
3. 本報告書の編集は斎野裕彦と協議をしながら、神成浩志が行った。
4. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

第1章～第5章、第7章、第8章	神成浩志
第6章	古環境研究所
5. 石器の材質の鑑定は仙台市科学館 佐々木 隆氏にお願いした。
6. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

## 凡 例

1. 本書の土色については、「新版標準土色帖」(小山、竹原：1973)によった。
2. 本書中の北(N)は、すべて真北である。
3. 本書の第1図の地形図は国土地理院発行の「仙台南東部」「仙台南西部」1/25,000を使用した。
4. 本書の第2図、第55図は仙台都市計画図(昭和60年)1/2500をトレースし、縮小した。
5. 本文中使用の「灰白色火山灰」(庄子、山田：1982)の降下年代は、現在10世紀前半頃と考えられている(白鳥：1980)。
6. 本書で使用した遺物略号は以下のとおりで、それぞれ種類別に番号を付した。また、小溝状遺構群、水田跡、品跡は検出層位を混同させないために検出層をつけて遺構名とした。

S B : 深穴住居跡	SD : 溝跡	SK : 土坑	P : ピット・柱穴
-------------	---------	---------	------------
7. 小溝状遺構群には各小溝毎に小溝①、小溝②……と番号をつけた。
8. 水田跡の疊群はNO.1、NO.2……と表現し、水田跡の区画は区画1、区画2……と表現した。
9. 基本層位と遺構堆積土の層位が混同しないように、基本層位は第1層、第2層……と表現し、遺構堆積土の層位は1層、2層……と表現した。ただし、基本層位断面図においては遺構堆積土の層位に#をつけて区別した。
10. 本書の出土遺物の登録に際しては次のとおりである。

A : 繩文土器	B : 弥生土器	C : 土師器 (ロクロ未使用)
D : 土師器 (ロクロ使用)	E : 赤焼土器	F : 独窓器
G : 石器・石製品	H : 金銀製品	I : 陶器
11. 遺物観察表内の計測値では、土器については残存範囲がおよそ1/3以下の場合はその復元値をカッコで示した。また復元値が不明な場合は-を付した。
12. 遺構及び遺物の実測図に表現したスクリーントーンのうち図中に内容を示したもの以外のものは以下の内容を示している。



土師器の黒色処理



水田跡または畠跡の耕作土



検出層以下の基本層

13. 遺構の土層観察用のベルトを設けられない場合、遺構断面図を調査区段の断面図を使用し、検出層以下の層にはスクリーントーンで表現した。

# 本文目次

## 序

### 例言、凡例

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査要項	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
3	これまでの調査成果	4
第3章	調査方法と概要	6
1	調査方法	6
2	調査経過	7
第4章	基本層序	8
第5章	検出遺構と出土遺物	15
1	第3層までの出土遺物	15
2	第4層	15
3	第5a層	18
4	第5b①層	18
5	第5b②層	30
6	第6a・b層	34
7	第6c層	44
8	第7a層	56
9	第7b層	72
10	第8層	72
11	第9層以下の出土遺物	74
第6章	プラント・オバール分析	77
第7章	これまでの調査との関連	86
1	第5次調査と以前の調査区との関連	86
2	周辺の遺跡との関連	92
第8章	まとめ	98
参考・引用文献		100

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第32図 S D 6 溝跡平面図	50
第2図 下ノ内浦遺跡・調査区位置図	5	第33図 S D 7 a 溝跡平面図	51
第3図 調査区配置図	6	第34図 S D 7 b 溝跡平面図	51
第4図 基本層序模式図	8	第35図 S D 6・7 a・7 b 溝跡断面図	52
第5図 調査区南壁断面図	11	第36図 第6 c 層島跡、S D 6・7 a 溝跡	
第6図 調査区東壁・西壁断面図	13	出土遺物	53
第7図 第2層出土遺物	15	第37図 S B 4 建物跡出土遺物	57
第8図 第4層水田跡全体図	16	第38図 第7 a 層上面遺構全体図	58
第9図 第4層水田跡出土遺物	17	第39図 S B 3 建物跡平面図・断面図	58
第10図 第5 b ①層上面遺構全体図	19	S B 4 建物跡平面図	59
第11図 第5 b ①層水田跡出土遺物	20	第40図 S D 8 溝跡平面図	61
第12図 S D 1 a・1 b・2・3 溝跡断面図	21	第41図 S D 9 溝跡平面図・断面図	62
第13図 S K 1～5 土坑平面図・断面図	23	第42図 S D 10 溝跡平面図・断面図	63
第14図 S K 6～10 土坑平面図・断面図	24	第43図 S D 11 溝跡平面図・断面図	64
第15図 第5 b ①層上面遺構出土遺物	26	第44図 S K 11・12・13 上坑平面図・断面図	66
第16図 第5 b ①層小溝状遺構群断面図	27	第45図 第7 a 層小溝状遺構群断面図	68
第17図 第5 b ①層出土遺物	28	第46図 第7 a 層小溝状遺構群平面図	69
第18図 第5 b ②層上面遺構全体図	31	第47図 第7 a 層小溝状遺構群平面図	69
第19図 第5 b ②層水田跡出土遺物	32	第48図 第7 a 層小溝状遺構群(小溝⑨)	
第20図 第5 b ②層水田跡畦畔・S D 4 溝跡		耕作痕断面図	70
断面図	33	第49図 第8 層出土遺物	73
第21図 第6 a 層上面遺構全体図	36	第50図 第11層～第15層出土遺物	75
第22図 第6 a 層水田跡出土遺物	37	第51図 第4次・第5次調査区合成図	
第23図 第6 a 層水田跡畦畔・S D 5 溝跡断面図	37	(第6 a 層)	87
第24図 S B 1 建物跡平面図・断面図	39	第52図 第4次・第5次調査区合成図	
第25図 S B 2 建物跡平面図・断面図	40	(第6 c 層)	89
第26図 第6 a 層小溝状遺構群断面図	42	第53図 第4次・第5次調査区合成図	
第27図 第6 a・b 層出土遺物	43	(第7 a 層)	90
第28図 第6 c 層上面遺構全体図	46	第54図 第4次・第5次調査区合成図	
第29図 第6 c 層島跡断面図	47	(第7 a 層)	91
第30図 第6 c 層島跡断面図(調査区西壁)	48	第55図 下ノ内浦遺跡周辺の遺跡分布図	95
第31図 第6 c 層島跡配置図	48		

## 挿表目次

第1表 遺跡地表名	3	第6表 第6 c 層晶跡検討調査	49
第2表 第4層水田跡堆積計測表	17	第7表 基本層出土遺物数量表	76
第3表 第5 b ①層水田跡堆積計測表	20	第8表 遺構出土遺物数量表	76
第4表 第5 b ②層水田跡堆積計測表	32	第9表 遺構変遷表	99
第5表 第6 a 層水田跡堆積計測表	35		

## 写真目次

写真1 調査区南壁断面 (III区、I-1グリット、北より)	104	写真20 SK 6 土坑完掘全景 (南より)	109
写真2 調査区南壁断面 (III区、I-3グリット、北より)	104	写真21 SK 7 土坑完掘全景 (南より)	109
写真3 調査区南壁断面 (IV区、I-8グリット、北より)	104	写真22 SK 8 土坑完掘全景 (西より)	109
写真4 調査区東壁断面 (IV区、E-8グリット、西より)	105	写真23 SK 9 土坑完掘全景 (北より)	109
写真5 調査区東壁断面 (IV区、G-8グリット、西より)	105	写真24 SK 10 土坑完掘全景 (北より)	109
写真6 調査区西壁断面 (III区、I-1グリット、東より)	105	写真25 第5 b ①層小溝状遺構群 (小溝⑧) 土器出土状況 (南より)	109
写真7 第4層水田跡全景 (III区、東より)	106	写真26 SD 3 溝跡完掘全景 (北東より)	110
写真8 第5 b ①層水田跡全景 (III区、東より)	106	写真27 第5 b ①層小溝状遺構完掘全景 (南より)	110
写真9 第5 b ①層水田跡堆積検出状況 (III区、西より)	106	写真28 SD 4 溝跡完掘全景 (北より)	110
写真10 第5 b ①層上面検出遺構完掘全景 (IV区、北より)	107	写真29 第5 b ②層水田跡全景 (III区、東より)	111
写真11 SD 1 a + b 溝跡完掘全景 (北より)	107	写真30 第5 b ②層水田跡全景 (IV区、北より)	111
写真12 SD 2 溝跡完掘全景 (北より)	107	写真31 第6 a 層水田跡全景 (III区、東より)	112
写真13 SK 1 土坑完掘全景 (南より)	108	写真32 第6 a 層上面検出遺構完掘全景 (IV区、北より)	112
写真14 SK 2 土坑完掘全景 (東より)	108	写真33 SD 5 溝跡完掘全景 (南より)	113
写真15 SK 3 土坑完掘全景 (南より)	108	写真34 SD 1 + 4 + 5 溝跡断面 (南壁、北より)	113
写真16 SK 4 土坑完掘全景 (南より)	108	写真35 SD 5 溝跡断面 (南より)	113
写真17 SK 5 土坑完掘全景 (南より)	108	写真36 SB 1 建物跡全景 (北より)	113
写真18 SK 5 土坑炭化物堆積状況 (南より)	108	写真37 SB 1 建物跡柱穴断面 (SB 1 - P 5、東より)	113
写真19 SK 5 土坑断面 (南より)	108	写真38 SB 2 建物跡全景 (北より)	113
		写真39 SB 2 建物跡柱穴断面 (SB 2 - P 4、東より)	113
		写真40 第6 a 層小溝状遺構群確認状況 (A群、北より)	114

写真41 第6a層小溝状遺構群完掘全景	写真60 第7a層小溝状遺構群全景
(A群、北より) ..... 114	(IV区南半部、東より) ..... 120
写真42 第6c層当跡検出状況 (III区、東より) 114	写真61 第7a層小溝状遺構群耕作痕断面
写真43 第6c層品跡完掘全景 (III区、東より) 115	(小溝③、南より) ..... 120
写真44 第6c層品跡・SD6溝跡全景	写真62 第7a層小溝状遺構耕作痕検出状況
(IV区、北より) ..... 115	(小溝③、東より) ..... 121
写真45 第6c層品跡全景 (III区、北より) ..... 116	写真63 第7a層上面小溝状遺構群耕作痕検出状況
写真46 第6c層品跡全景 (IV区、北より) ..... 116	(小溝③、西より) ..... 121
写真47 第6c層品跡断面	写真64 SK11土坑完掘全景 (北西より) ..... 121
(西壁、II-1グリット南側、東より) 116	写真65 SK12土坑完掘全景 (西より) ..... 121
写真48 第6c層品跡断面	写真66 SK13土坑完掘全景 (西より) ..... 121
(西壁H-1グリット南側、東より) ..... 116	写真67 SK12+13土坑断面 (西より) ..... 121
写真49 第6c層品跡・SD7溝跡全景	写真68 SD8溝跡完掘全景 (北東より) ..... 122
(IV区、北より) ..... 117	写真69 SD8溝跡断面 (南西より) ..... 122
写真50 SD7a溝跡断面 (南より) ..... 117	写真70 SD9溝跡・小溝状遺構断面 (西より) 122
写真51 第6c層品跡・土師器坏出土状況	写真71 SD9溝跡断面 (南より) ..... 122
(南壁断面、I-7グリット、北より) 117	写真72 SD9溝跡完掘全景 (南より) ..... 122
写真52 SD6溝跡・土師器坏出土状況	写真73 SD9+10溝跡完掘全景 (南より) ..... 123
(北より) 117	写真74 SD10溝跡断面 (南より) ..... 123
写真53 第7a層上面検出遺構完掘全景	写真75 SD11溝跡完掘全景 (南西より) ..... 123
(III区、東より) 118	写真76 SD11溝跡断面
写真54 第7a層上面検出遺構完掘全景	(南壁1-8グリット、北より) ..... 123
(IV区、北より) 118	写真77 下層調査区断面 (北より) ..... 124
写真55 SB4建物跡全景 (南より) ..... 119	写真78 下層調査区 (西より) ..... 124
写真56 SB4建物跡柱穴断面	写真79 第7a層上面作業風景 (IV区、北より) 124
(SB4-P4、東より) ..... 119	写真80 出土遺物 (1) ..... 125
写真57 SB3建物跡全景 (北東より) ..... 119	写真81 出土遺物 (2) ..... 126
写真58 SB4建物跡・須恵器蓋出土状況	写真82 出土遺物 (3) ..... 127
(SB4-P5、西より) ..... 119	
写真59 第7a層小溝状遺構群全景	
(IV区北半部、北より) ..... 120	

# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経過

平成5年6月14日、株式会社大京より仙台市教育委員会に共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。申請地は下ノ内浦遺跡地内であり、共同住宅建設計画では地下構造物が入り、遺跡の破壊が予想された。このため、申請者の株式会社大京と仙台市教育委員会は協議し、記録保存のための発掘調査を平成6年4月より実施することにした。

## 2 調査要項

遺跡名 下ノ内浦遺跡（宮城県遺跡登録番号01368 仙台市文化財登録番号C-301）

所在地 仙台市太白区長町南四丁目32-1

調査目的 共同住宅建設に伴う事前調査

調査面積 550m<sup>2</sup>

調査期間 平成6年4月18日～9月26日

整理期間 平成7年1月5日～3月24日

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査第二係

調査担当職員 斎野裕彦、神成浩志、渡部 紀

整理担当職員 斎野裕彦、神成浩志

調査参加者 赤間 哲、阿部敬子、阿部みはる、阿部八重子、砂金正男、石部すえ子、泉 美恵子、伊藤房江、大山由紀子、神坂勝太郎、菊地恵子、日下啓子、小林悦子、小松千代子、桜井芳子、佐藤清治、佐藤利子、佐藤智生、佐藤直成、島崎なつ子、島津レチ子、庄子弘子、菅谷裕子、鈴木かつ子、高橋勝恵、永野泰治、沼田綾子、早川裕子、原田由美子、日野きみ子、松本和美、水野信子、横岸わくり、宮城富子、宮崎 都、横尾由記子、吉田浩子

整理参加者 赤間 哲、石部すえ子、日下啓子、小林悦子、島津レチ子、菅谷裕子、

高橋勝恵、原田由美子、横尾由記子

調査協力 株式会社大京

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

下ノ内浦遺跡は、仙台市西部の太白区長町南に所在し、JR長町駅の南西約1.5km、地下鉄宮沢駅の北東約0.5kmのところにある。従来、水田地帯であったが、昭和48年以降の土地区画整理によって整地され、現在は住宅地となっている。

周辺は広瀬川と名取川にはさまれている地域で、郡山低地と呼ばれており、河川に沿った自然堤防とその背後の後背湿地からなっている。この自然堤防を形成した河川の1つが名取川の支流である笊川で、富沢地区と大野田地区を流れている。下ノ内浦遺跡はおもにこの笊川の左岸の自然堤防上に立地しており、標高は10~12mである。今回の調査区は自然堤防と後背湿地の境界付近にあたる。

### 2 歴史的環境

下ノ内浦遺跡周辺には数多くの遺跡があり、古くは旧石器時代から各時代の遺構・遺物が重層的に発見されている。下ノ内浦遺跡においても、縄文時代（早期）から近世までの遺構・遺物が発見されているが、今回の調査では主に古墳時代から平安時代まで畠跡や水田跡を中心とする遺構が発見された。そこで、古墳時代から平安時代の近隣の遺跡の状況について述べておきたい。

下ノ内浦遺跡の北側には、主に水田跡が発見されている富沢遺跡が所在している。富沢遺跡の水田跡は弥生時代から現代まで承続的に続いており、一部に奈良・平安時代の条里型地割も認められている。西側から南側では、古墳時代から平安時代までの時期の住居跡・建物跡・小溝状遺構群などが発見されている遺跡が多い。畠跡と考えられている小溝状遺構群の発見された遺跡として、西に広がる山口遺跡、南の笊川沿いに広がる六反田遺跡や下ノ内浦跡、さらにその南に位置する伊古田遺跡などがある。また、住居跡や建物跡は、古墳時代では伊古田遺跡、下ノ内浦跡、六反田遺跡などにあり、奈良・平安時代では山口遺跡、下ノ内浦跡、六反田遺跡にある。東側では、笊川南岸の元袋遺跡で奈良・平安時代の住居跡や建物跡が発見されている。また、古墳も周囲に多く分布しており、南側には広く古墳が点在している大野田古墳群があり、北方丘陵麓には裏町古墳、兜塚古墳、一塚古墳、二塚古墳、教塚古墳などがある。また、古墳時代終末期になると大年寺山周辺の斜面には横穴墓が群をなすようになる。このような歴史的環境のなかで、南方の古墳群と北に広がる水田跡との間に位置し、自然堤防と後背湿地の境界付近にあたる下ノ内浦遺跡の土地利用の状況の究明が大きな課題となってくる。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	下ノ内遺跡	自然 岩 防	縄文～平安	16	北原散跡	自然崩・後背高地	奈良～平安
2	富沢遺跡	後 背 地	石器～近世	17	長町笛木遺跡	自然 岩 防	古 墓
3	泉崎沼遺跡	自然保険・後背崩地	縄文～近世	18	長町駒込沼遺跡	自然 岩 防	奈良～平安
4	山口遺跡	自然保険・後背崩地	縄文～中世	19	銚子川人遺跡	後 背 岩 地	縄文・奈良～平安
5	郡山遺跡	自然 岩 防	奈良～奈良	20	銚子川散跡	自然保険・後背高地	縄文・奈良～平安
6	六反田遺跡	自然 岩 防	縄文～近世	21	二神寺古墳群	丘 古 墓	填
7	下ノ内遺跡	自然 岩 防	縄文～平安	22	三神寺遺跡	丘 縄文～平安	
8	伊吉田遺跡	自然 岩 防	縄文・古墳～平安	23	土平内遺跡	丘 縄文・奈良～平安	
9	元宿遺跡	自然 岩 防	奈良～近世	24	上手内遺跡	丘 陥斜面 奈良～平安？	
10	大野田遺跡	自然 岩 防	縄文～中世	25	金山空堀	丘 陥斜面 古 墓	
11	三ノ内遺跡	自然保険・後背高地	縄文～近世	26	吉古横	後 背 高 地 古 墓	
12	日置散跡	自然 岩 防	縄文・奈良～中世	27	吉沢清水遺跡	自然 岩 防	奈良～平安
13	美和六丁目遺跡	自然 岩 防	奈良～平安	28	の場遺跡	自然 岩 防	奈良～平安
14	長町南遺跡	自然 岩 防	奈良～平安	29	鶴来遺跡	自然 岩 防	吉備・平安
15	新田遺跡	自然 岩 防	奈良～平安	30	武荷遺跡	自然 岩 防	縄文・奈良～平安

### 3 これまでの調査成果

下ノ内浦遺跡は仙台市教育委員会によって4度にわたる調査が行われている(第2図)。以下、その概要を述べる。

**第1次調査** みやぎ生活共同組合の倉庫建設に先立ち、昭和57(1982)年7月から9月にかけて調査が実施された。I区では平安時代以降の土坑・ピット、平安時代以前の河川跡が検出され、土師器・須恵器・陶磁器が出土している。II区では、奈良時代の竪穴住居跡・溝跡・掘立柱建物跡、平安時代以降の溝跡・掘立柱建物跡・土坑、時期不明の溝跡・土坑・竪穴造構・ピット・河川跡が検出されている。出土遺物は、石器、縄文土器、土師器(塩釜式、国分寺下層式、表杉ノ入式)、須恵器、赤焼土器、土鍤がある。

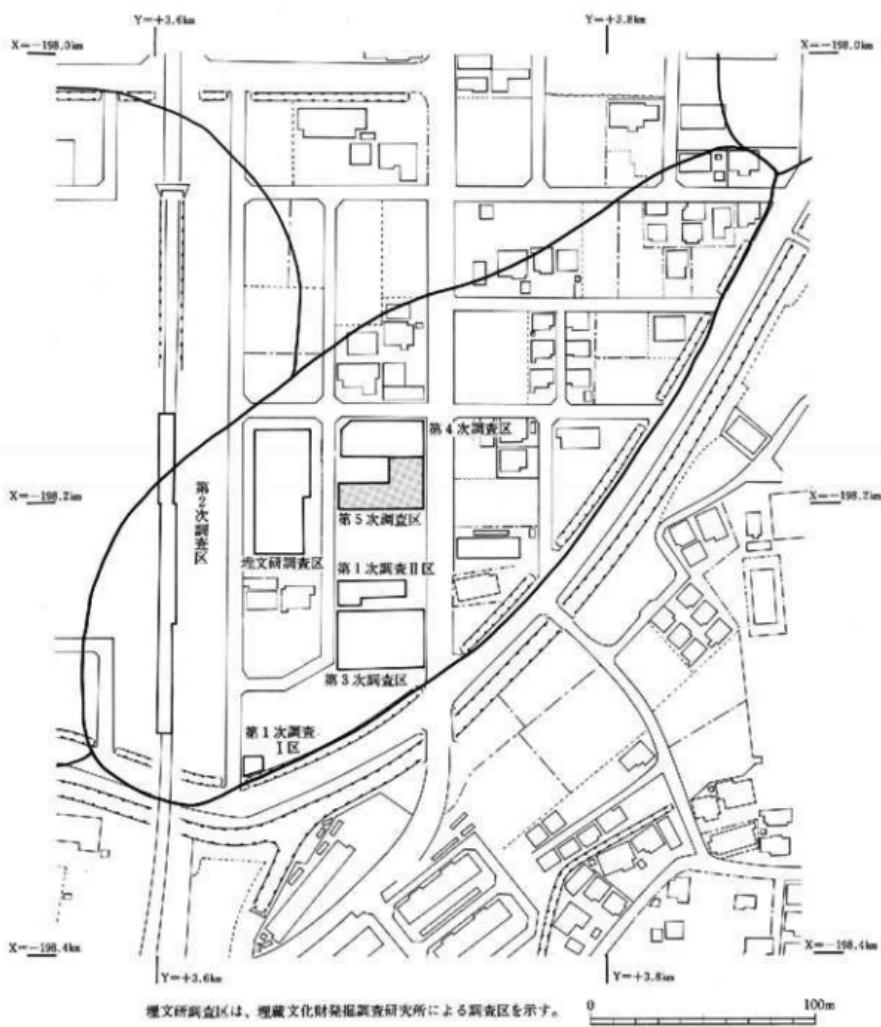
**第2次調査** 仙台市高速鉄道南北線の建設に先立ち、昭和58(1983)年4月から12月にかけてと昭和59(1984)年4月から12月にかけての2か年にわたる調査が実施された。検出遺構は平安時代の水田跡・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱列・溝跡・小溝状遺構群・河川跡、奈良時代の竪穴住居跡、弥生時代の竪穴造構・土坑・溝跡・ピット、縄文時代後期の配石造構・土坑・埋設土器、縄文時代早期の竪穴造構・土坑がある。遺物には、石器、縄文土器(日計式・大木5b式・南境式)、弥生土器(十三塚式・天王山式)、土師器(国分寺下層式・表杉ノ入式)、須恵器などがある。

**第3次調査** みやぎ生活共同組合の店舗建設に先立ち、昭和62(1987)年4月から10月にかけて調査が実施された。検出遺構は近世頃の掘立柱建物跡、平安時代の藏骨器・火葬施設、奈良時代の竪穴住居跡、奈良～弥生時代の溝跡、縄文時代後期の遺物包含層、縄文時代早期の陥し穴とみられる土坑がある。遺物は石器、石製品、土製品、土偶、縄文土器(日計式・南境式)、弥生土器(天王山式など)、土師器(国分寺下層式・表杉ノ入式)、須恵器、中世陶器などがある。

**第4次調査** 共同住宅建設に先立ち、平成3(1991)年8月から12月にかけて及び平成4(1992)年3月から7月にかけての2か年にわたる調査が実施された。検出遺構は平安時代の溝跡・土坑・小溝状遺構群・古墳～奈良時代の墓跡・溝跡・古墳時代の竪穴住居跡・溝跡・弥生時代の遺物包含層などがある。特に古墳～奈良時代の墓跡は天地返しの耕作痕のほかに墓の歯跡が明確に検出されている。遺物は石器、石製品、縄文土器(後期)、弥生土器(十三塚式・天王山式)、土師器(栗田式・国分寺下層式・表杉ノ入式)、須恵器、中世陶器などがある。今回の調査区である第5次調査区は、この第4次調査区の南側に隣接する区域である。

このほかに民間発掘会社による調査がある。共同住宅建設に先立ち、埋蔵文化財発掘調査研究所下ノ内浦遺跡調査団によって昭和62(1987)年3月から8月にかけて調査が実施された。平安時代から縄文時代の遺構あるいは遺物が検出されている。特に弥生時代の遺物包含層から

多くの弥生土器や石器が出土している。

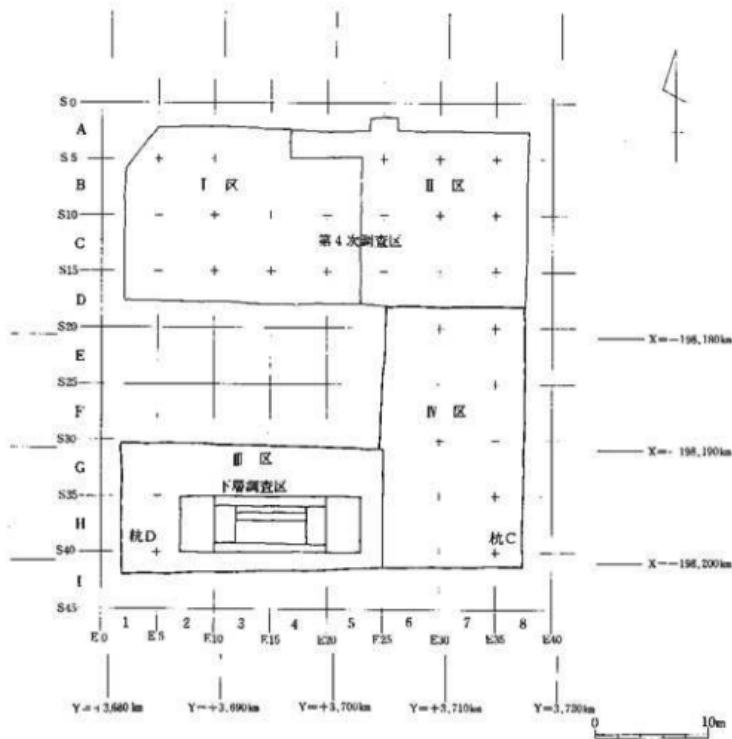


第2図 下ノ内浦遺跡・調査区位置図

## 第3章 調査方法と概要

### 1 調査方法

調査区は共同住宅設計図に合わせ、東西35.5m、南北38.5mのL字形に設定した。第4次調査区と隣接することから、混乱がおきないようにするために、調査区をIII区とIV区という名前をつけ2区に分けて調査を実施することにした。また、第4次調査との関連を容易に比較できるように、第4次調査区で任意に設定した基準点(S0・E0)を第5次調査においても踏襲しグリットを設定した。グリットは5m方眼で、東に1、2、3…、南にA、B、C…と番号をつけ、それを組みあわせたものをグリットの名称とした。第5次調査区内における平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握した。その数値は次の通りである。



第3図 調査区配図図

ある。

杭C : X = -198199.268m, Y = +3714.244m

杭D : X = -198199.319m, Y = +3684.244m

グリットの南北軸はほぼ真北方向 (N - 0°5'55" - E) となっている。

調査は、盛土及び第1層下面までを重機で除去し、以下を人力で掘り下げた。調査区内には、土層観察及び排水用の側溝を設けた。第9層上面までは調査区全面の精査を実施し、第9層以下は $16 \times 5$  m の下層調査区を設け掘り下げた（最下層面は $6 \times 2$  m）。図化にあたっては、原則として1/20で実測し、一部1/40、1/10で実測した。写真は、35mm版白黒・リバーサルで撮影した。

## 2 調査経過

調査の対象となっている敷地のうち地下構造物の入る部分が本来の調査区となるが、その調査区のうち北側の約200mが平成3年から4年にかけて調査が行われた箇所（第4次調査区）の一部となっている。そこで今回の調査は第4次調査区を除いた箇所を調査区として設定した。

調査は平成6年4月18日から開始した。重機で第1層を除去した後、III区において第2層を掘り込むことから始まり、第2層中で第4層水田跡の畦畔を確認した。同様な手順で層ごとに掘り下げ、6月上旬までは第5b①層上面及び第5b②層上面で水田跡など検出した。6月下旬には、第6a層上面で水田跡などの遺構の調査を終了し、第6a層を掘り下げにはいったが、第6a層と第6b層は平・断面ともに見分けにくいために第6a層と第6b層と一緒に掘りこむ結果となった。7月上旬には第6c層畠跡が確認され、第6c層畠跡の調査に入った。第6c層畠跡は調査区の全面に広がるが、IV区の西側では畠跡の歯跡が確認されなかった。再度精査を実施したところ、溝跡3条の切り合いが判明した。8月上旬に、第7a層上面において、掘立柱建物跡・溝跡・小溝状遺構群などの遺構群を検出した。8月下旬に先行して第8層の調査に入り、第8層上面で遺構の確認を行ったが、遺構は検出されなかった。また、第4次調査区の成果より第8層中での弥生土器の出土を予想したが、数量が極端に少ないと判明した。9月中旬には第8層の掘りこみが終了し、第9層上面の遺構精査を実施した。第9層上面では、不整形の落ち込みが確認されたが、第4次調査区同様に人為的な遺構とは認定できなかった。その後、III区において、第10層以下の試掘区を設定し、層ごとに掘り下げた。第4次調査区で砂礫層（20b層）としている層まで掘り下げた（標高7.8m）が、途中で遺物をわずかに出土したのみで、遺構は検出されなかった。よって、下層調査区の拡張はせず、調査区壁面の精査・実測をし、9月26日にすべての調査を終了した。

## 第4章 基本層序

今回の調査で確認された基本的な層序は、第1a層から第19層までの30層である。第4図にその模式図を示した。第1層から第11b層までは、第5次調査区の北側にある第4次調査区において確認された基本層序に従って分層した。基本層を大別すると、第1a層から第10b層までは粘土層が多く、11層が砂質シルト、13層から16層までが粘土層、17層以下が砂層が主体となっている。現地表は約40cmほど盛土がされている。以下、各層の概略を述べる。

**第1a層** 旧表土。10Y R5/2灰黄褐色シルト。層厚15cm前後で、下面の凹凸は少ない。調査区の南東部に分布する。

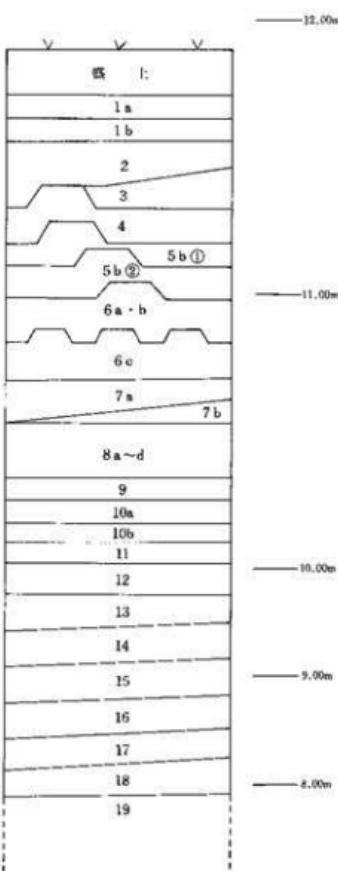
**第1b層** 現代の水田耕作土。10Y R4/1褐灰色粘土質シルト。層厚15cm前後で、下面の凹凸は少ない。調査区の南半部に分布する。下面に酸化鉄が集積する。

**第2層** 10Y R5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚10cm前後で、下面の凹凸は比較的ある。酸化鉄を全体的に多く含む。

**第3層** 10Y R4/2灰黄褐色粘土質シルト。層厚は5cm以下で、下面の凹凸は比較的少ない。層中にはマンガン粒、酸化鉄を少量含む。調査区南西部の一部にのみ分布する。

**第4層** 10Y R3/2黒褐色粘土。層厚は3~25cmで、10cm前後が多い。下面是凹凸があり、層中にはマンガン粒、酸化鉄が多く含まれる。調査区III区のほぼ全域とIV区の南端部に分布する。

**第5a層** 10Y R4/2灰黄褐色シルト。層厚は2~10cmで、5cm前後が多い。下面是凹凸があり、層中にはマンガン粒、酸化鉄をやや多く含む。調査区III区の東半部とIV区の北端部に分布する。



第4図 基本層序模式図

**第5 b ①層** 10Y R4/3にぶい黄褐色シルト質粘土。第4次調査において第5 b 層が分層できることが示唆されていたが、第5次調査区において2層に分層できたので、第5 b ①層と第5 b ②層と呼ぶことにした。第5 b ①層の層厚は4～13cmで、8cm前後が多い。下面是凹凸があり、層中にはマンガン粒、酸化鉄が多く含まれる。調査区の全域で分布している。

**第5 b ②層** 10Y R4/4褐色シルト質粘土。層厚は全体的に第5 b ②層より薄く2～10cmで、6cm前後が多い。下面是凹凸があり、層中には、灰白色火山灰のブロックを部分的に含み、マンガン粒、酸化鉄を多く含む。調査区の全域で分布している。

**第6 a・b層** 10Y R3/2黒褐色粘土。第4次調査において第6 a 層（10Y R3/3 暗褐色シルト質粘土）と第6 b 層（10Y R2/2 黒褐色粘土）と明確に分層されていたが、第5次調査区では、部分的に分層できる箇所があるものの全体的には分層できなかったので、第6 a 層と第6 b 層の2つの層が存在しているという意味で第6 a・b層と呼ぶこととした。第5次調査区において分層できる箇所においては、層の上部が10Y R3/3 暗褐色粘土質シルト、下部が10Y R3/2黒褐色粘土である。分層できない箇所では、全体の色調として10Y R3/2 黒褐色となる。層厚は4～23cmで、15cm前後が多い。下面是ゆるやかな凹凸があり、層中にはマンガン粒、酸化鉄が多く含まれる。調査区の全域で分布している。

**第6 c層** 10Y R3/4暗褐色シルト。層厚は5～25cmで、15cm前後が多い。下面是凹凸は顕著で、層中には10Y R4/3にぶい黄褐色シルト（第7 a 層の土色と類似する）の小ブロックを含むところもある。また、SD 6・7 a・7 b溝跡付近では砂粒を多く含む。調査区の全域で分布している。

**第7 a層** 10Y R4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は2～10cmで、全体的にIII区の方が薄く5cm前後のところが多く、分布しない箇所もある。IV区に分布する第7 a 層はIII区に比べると厚く、10cm前後のところが多い。

**第7 b層** 10Y R3/4暗褐色粘土質シルト。層厚は1～5cmで、非常に薄い。下面是凹凸があり、層中には酸化鉄が少量含まれる。第7 b 層の分布は部分的で、III区の南西部とIV区の北端部しか分布していない。

**第8 a層** 10Y R2/2黒褐色粘土。層厚は10～33cmで、南にいくほど厚くなる傾向をもつ。ただし、III区の西側及び南側の調査区壁面では分層できなかったため第8 a・b層とした。下面是凹凸はゆるやかで、調査区の全域に分布する。

**第8 b層** 10Y R2/3黒褐色粘土。層厚は2～12cmで、南にいくほど薄くなる傾向をもつ。下面是凹凸はほとんどなく、IV区を中心で分布する。

**第8 c層** 10Y R3/3暗褐色シルト質粘土。層厚は4～25cmで、IV区の中央部で20cm前後となり厚くなるが、下面是凹凸はゆるやかである。ほぼ全域で分布がみられるが、調査区南端部では

分布しない。

第8d層 10Y R2/3黒褐色シルト質粘土。層厚は2~8cmで、下面の凹凸はほとんどない。IV区の北端部のみに分布する。

第9層 10Y R5/6黄褐色シルト。層厚は2~18cmで、10cm以下の箇所が多い。III区の東側で分布しない箇所があるが、ほぼ調査区の全域で分布する。

第10a層 10Y R3/1黒褐色粘土。層厚は15cm前後で、分布する範囲全域でほぼ同じ厚さである。下面の凹凸はゆるやかで、III区の全域とIV区の西側で分布する。

第10b層 10Y R2/1黒色粘土。層厚は15cm前後で、分布する範囲全域でほぼ同じ厚さである。下面の凹凸はゆるやかで、IV区の東側で分布する。

第11a層以下的基本層位は下層調査区のみの観察である。

第11a層 10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルト。酸化鉄を全体的に少量含む。層厚は20cm前後で、下面の凹凸はほとんどない。

第11b層 10Y R4/4褐色砂質シルト。酸化鉄を全体的に少量含む。層厚は20cm前後で、下面の凹凸はほとんどない。

第12層 10Y R4/1褐灰色粘土。層厚は30cm前後で、下面の凹凸はゆるやかである。第12層は第4次調査区の第12a層と対応すると考えられる。

第13層 2.5G Y3/1暗オリーブ灰色粘土。層厚は25cm前後で、下面の凹凸はゆるやかである。第13層以下の層はグライ化が認められる。第13層は、第4次調査区の第13a層・13b層と対応すると考えられる。

第14層 5G 3/1暗緑灰色粘土。層厚は40cm前後で、下面には凹凸が見られる。

第15層以下の層は、下層調査区の壁面断面図を実測する前に壁面が降雨により崩壊したため断面図を作成できなかった。その結果、下層調査区の東西端で16層から19層までの上面の標高を測るだけとなつたため、断面図には標高のみを示すだけとなつた。

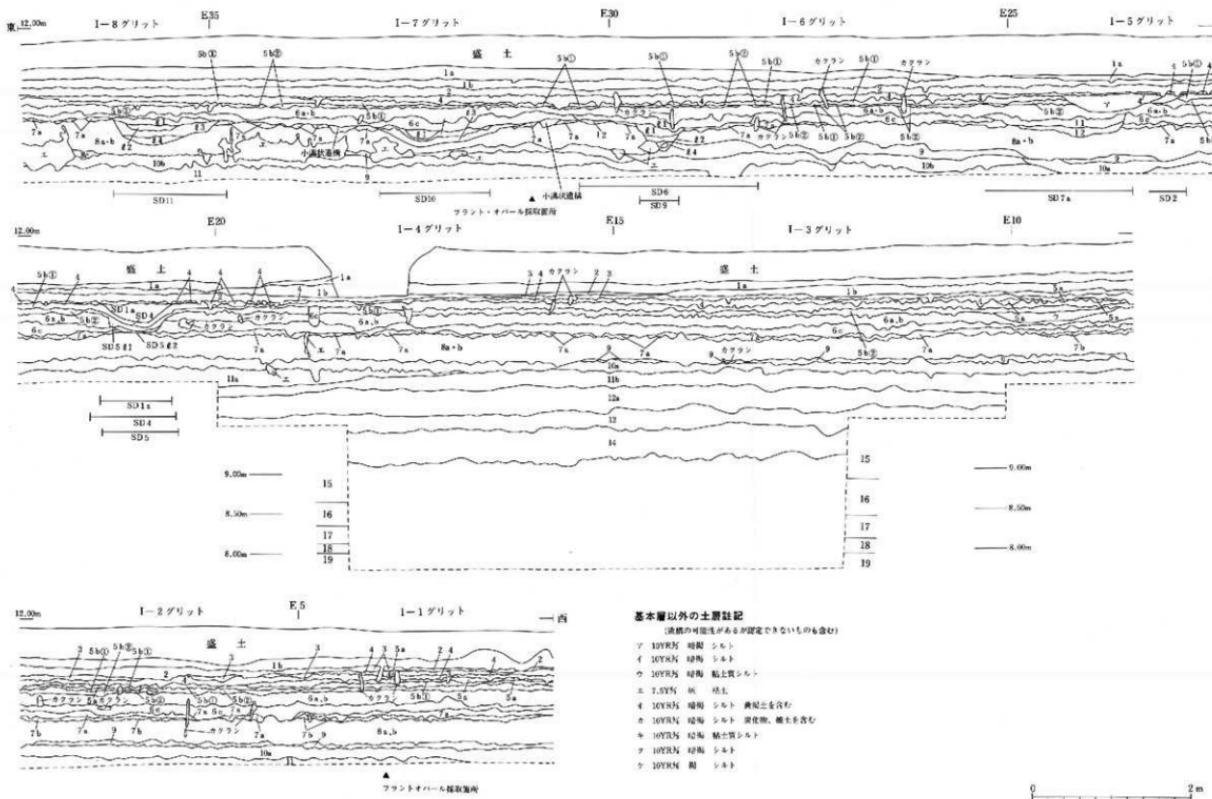
第15層 7.5G Y4/1暗緑灰色粘土。

第16層 5G 3/1暗緑灰色粘土。

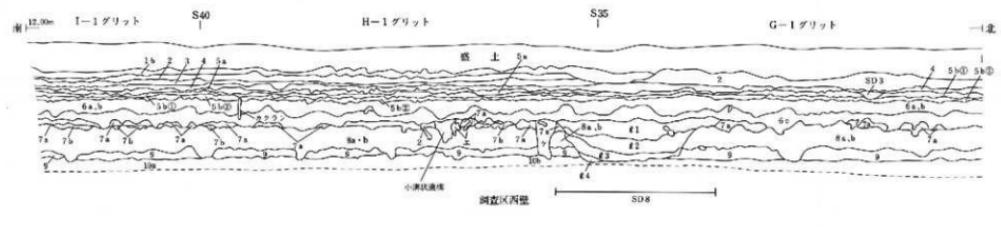
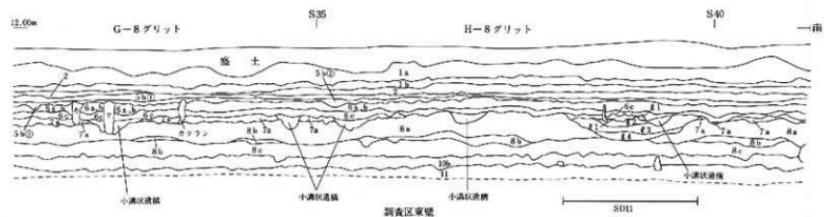
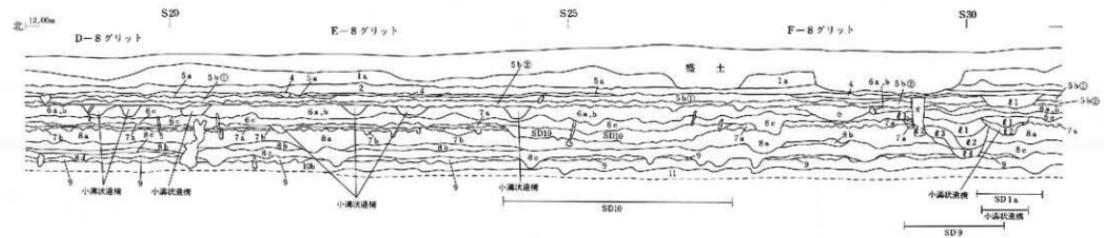
第17層 7.5G Y4/1暗緑灰色砂質シルト。

第18層 5G 3/1オリーブ灰色砂。

第19層 7.5G Y4/1暗緑灰色砂。粗砂や直径1~2cm大の風化礫を多く含む。第19層は、第4次調査区の第20b層と対応すると考えられる。



第5図 調査区南壁断面図



第6図 調査区東壁・西壁断面図

## 第5章 検出遺構と出土遺物

今回の調査で遺構が検出された層は、第4・5b①・5b②・6a・6c・7a層の6層である。また遺物が出土した層は、第1a層～第8層、第11層～第15層である。

以下、層ごとに検出遺構と出土遺物について記述する。

### 1 第3層までの出土遺物

第3層上面まで遺構は検出されなかった。第2層を中心とし小破片ながら須恵器、土師器、赤焼土器、陶器が出土している。どれも細かい破片資料ばかりだが、図化し得たのは以下の3点で、いずれも第2層中から出土した。

I-1（第7図1、写真80-1）は常滑産の壺口縁部、I-2（第7図2、写真80-2）は、堤産の壺口縁部、I-3（第7図3、写真80-3）は常滑産の壺口縁部である。破片資料では、須恵器、ロクロ未使用の土師器、ロクロ使用の土師器の环・壺の体部、赤焼土器の环体部などの小破片で、合計773点を数える。

### 2 第4層

第4層上面では、主にIII区を中心に水田跡を検出した。

#### 第4層水田跡（第8図、写真7）

第4層水田跡は、基本層第2層または第3層を掘り込んでいく途中に畦畔を検出し確認された。畦畔3条によって構成され5区画認められる。III区東端部及びIV区のほとんどは第2層が深く及んでいるため第4層が存在しない。そのため、第4層水田跡はIII区を中心に分布し、遺存状態は悪い。

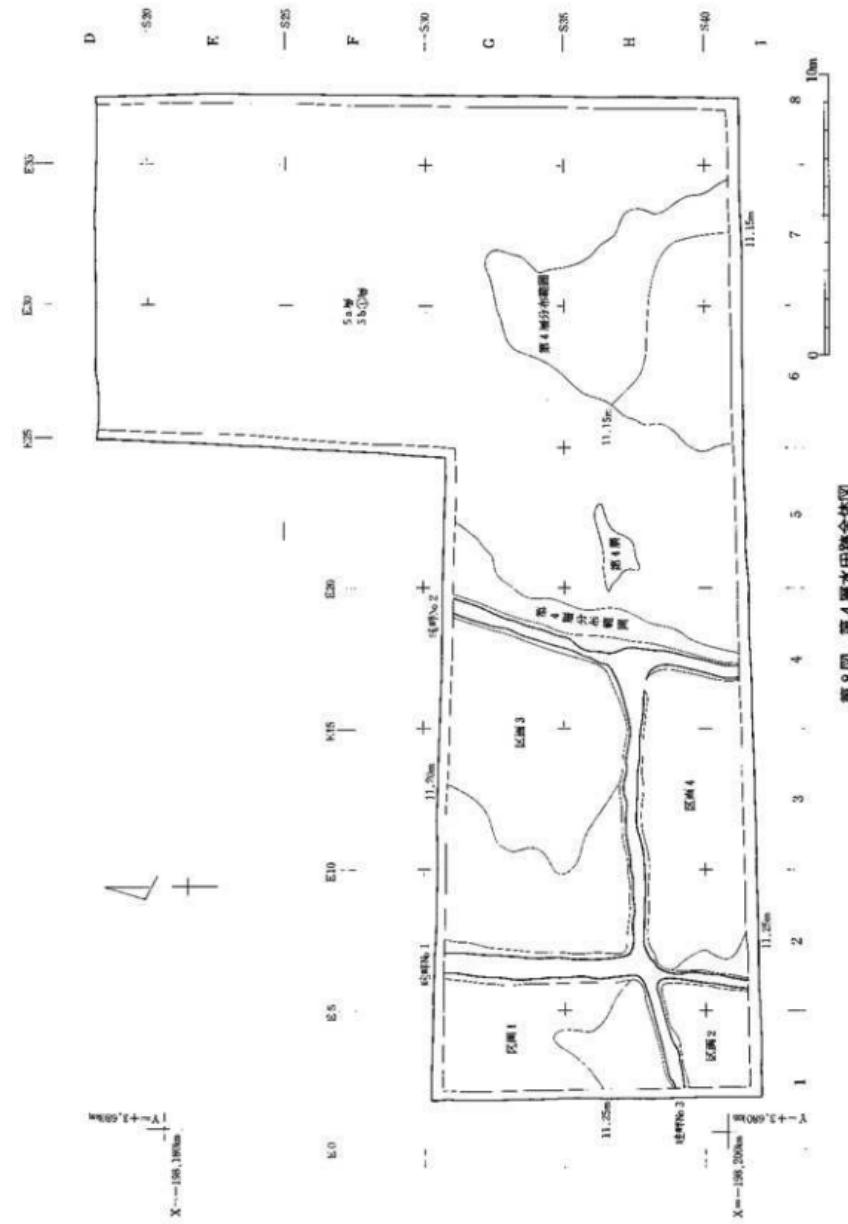
〈畦畔〉III区において3条の畦畔を検出した。3条ともに耕作土を盛り上げて作られており、畦畔の耕作土上面からの高さは遺存状況の良い箇所で3.3cmである。規模は3条ともほぼ同じだが、畦畔NO.1の南端部のみ小規模となる。畦畔NO.1とNO.3は十字に交わるが、畦畔NO.2の東側に畦畔は確認されなかった。

〈耕作土〉耕作土は基本層第4層である黒褐色の粘土で、III区及びIV区の南端部に分布する。



第7図 第2層出土遺物

番号	測量番号	出土地名	層	位	種類	高さ	参考写真
1	I-1	日区・北西区	第2層	高付	常滑	80-1	
2	I-2	日区・北東部	第2層	高付	常滑	80-2	
3	I-3	日区・側斜	第2層	側面	常滑	80-3	



第8圖 第4層水田跡全體図

厚さは畦畔 NO.2 より東側では厚く、最大16cmで、III区では 2~10cmである。

〈水田区画〉 基本層第4層が残存するところで5区画を確認した。区画全体が検出されたものはないが、平面形は長方形を基調としていると考えられる。区画の一辺の長さは区画3と区画4の東西の長さが確認され、それぞれ10.1~11.2mと10.4~10.8mである。畦畔 NO.2 より東側では耕作土の分布が全域に及んでいないため、本来の状況は不明である。

〈水田面の標高と傾斜〉 第4層水田跡は、全体的にみると、南西から北東へとゆるやかに傾斜している。標高は11.14~11.28mで、最も標高の高い区画2と低い畦畔 NO.2 より東側の標高差は14cmである。

第2表 第4層水田跡畦畔計測表

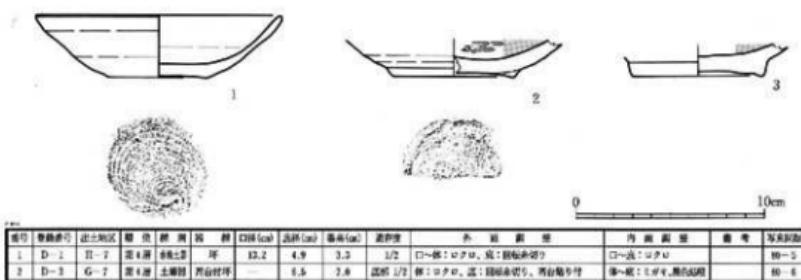
畦畔No.	方	向	長さ(cm)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	N-4°-E	東	10.8~	24~48	23~122	2~3	
2	N-19°-E	東	10.2~	18~48	29~105	2~3	
3	西側 南側 北側	西	15.8~	15~110	27~123	1~3	

〈出土遺物〉 第4層水田跡からは、土師器・赤焼土器、須恵器、陶器が出土した。土師器はロクロ使用のものが79点、ロクロ未使用のものが42点で、成形不明の土師器が88点である。土師器以外では赤焼土器が33点、須恵器が35点、陶器1点である。いずれも細かな破片がほとんどである。そのなかでロクロ使用の土師器2点、赤焼土器1点が図化できた。いずれも水田耕作土中からの出土である。

D-1 (第9図1、写真80-5) は赤焼土器坏で、内外面ともにロクロ調整され、底部の切り離しは回転糸切りである。底径/口径は0.37である。

D-2 (第9図3、写真80-7) は、ロクロ土師器の高台付坏で底部のみの資料である。磨滅が著しく調整は不明なところもあるが、内面は黒色処理されている。

D-3 (第9図2、写真80-6) は底部から体部にかけての資料で、外面体部はロクロ調整され、底部の切り離しが回転糸切りで、高台が貼り付けられている。内面は全面にわたり黒色



第9図 第4層水田跡出土遺物

處理ののちミガキが施されている。I-4陶器（写真80-4）は微細な破片で図化できない。産地は瀬戸・美濃で器形は不明である。

〈所調年代〉第4層水田跡からは、大部分が平安時代と考えられる土器が出土した。I-4陶器1点が出土しているが、微細な破片1点のみで年代決定するには危険が多い。確実にいえることは、下層の第5b②層が灰白色火山灰がブロックで含まれていることから、上層の第4層は灰白色火山灰降下以降（10世紀前半以降）である。したがって、第4層水田跡の年代はここでは平安時代以降としておきたい。

### 3 第5a層

第5a層はIII区の東側にしか分布せず、第5a層上面においても遺構は検出されなかった。遺物は、須恵器壺、ロクロ土器・非ロクロ土器の壺・壺の体部、赤焼土器壺の体部などで、図示できるものはなかった。破片資料は合計42点を数える。

### 4 第5b①層

第5b①層上面では、第5b①層水田跡、SD1・2・3溝跡、SK1~10土坑、第5b①層小溝状遺構群、ピットを検出した。

#### （1）水田跡

##### 第5b①層水田跡（第10図、写真8・9）

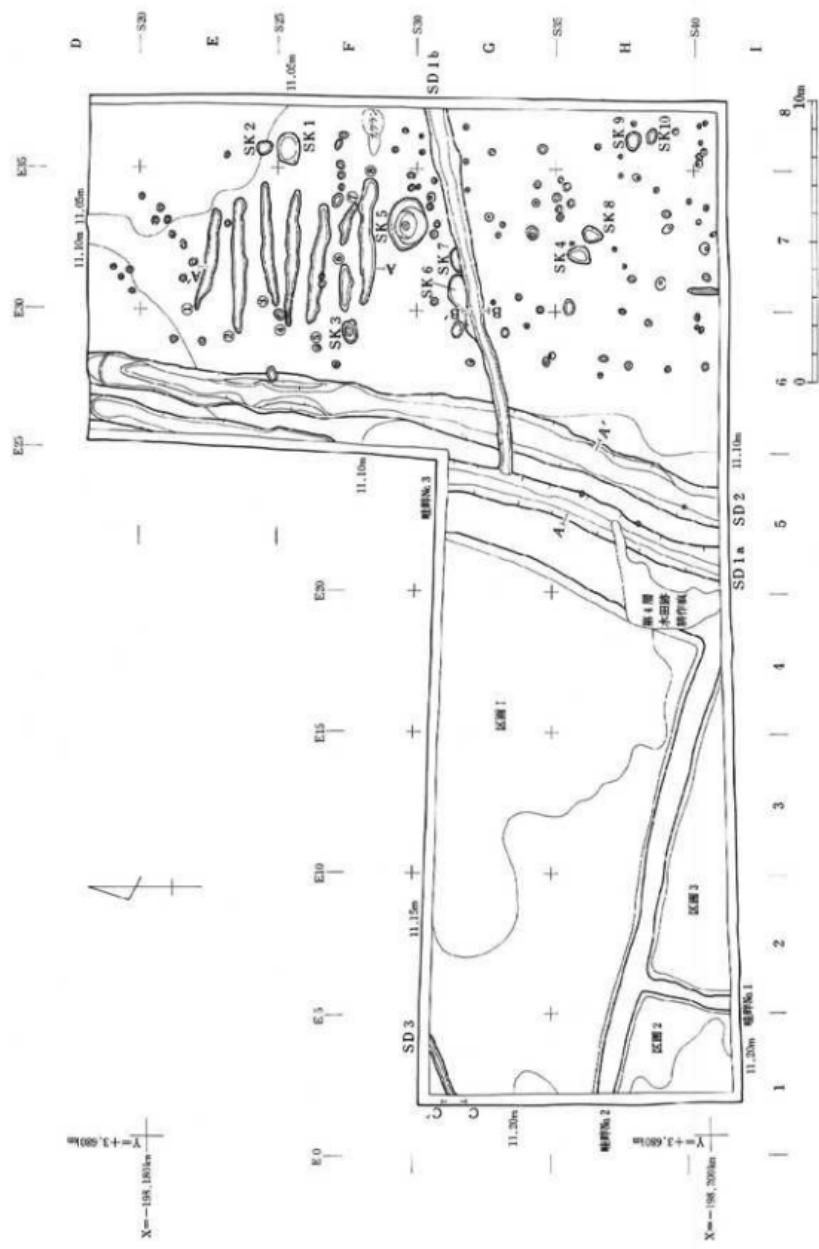
第5b①層水田跡は、III区において基本層第4層または第5a層を掘り込んでいく途中に畦畔を3条検出し確認された。IV区では、後述のSD1a溝跡の東側で畦畔を確認することはできなかった。

〈畦畔〉III区において3条の畦畔を検出した。3条とも耕作土を盛りあげて作られており、畦畔の耕作土上面からの高さは遺存状況の良い箇所で5.4cmである。規模はそれぞれ相違が認められ（第3表）、畦畔NO.3は畦畔NO.1・2より幅がありSD1a・b溝跡を伴う大畦畔である。それに直行するように畦畔NO.2が取り付いている。

〈耕作土〉耕作土は基本層第5b①層のぶい黄褐色のシルト質粘土である。厚さは4~12cmで、下面の凹凸はIV区の一部にゆるやかなところもあるが全面に認められる。

〈水田区画〉III区を中心に3区画を確認した。区画全体を検出したものはないが、平面形は長方形を基調としていると考えられる。1番大きな区画である区画1は1辺が東西方向に16.6m以上、南北方向に10.0m以上ある。

第10图 第5层①层上面遗存全体图



第3表 第5b①層水田跡計測表

柱印No	方 向	長さ(cm)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	N - 14° - E	3.3~	37~78	76~102	3~4	
2	N - 103.3° - E	16.6~	56~81	86~116	3~6	
3	N - 18.5° - E	16.6~	159~202	178~232	2~4	大畦跡

〈水田面の標高と傾斜〉第5b①層水田跡は全体的にみると南西から北東へゆるやかに傾斜している。標高は11.20~11.05mで、もっとも標高の高い区画2と区画1の標高差は15cm程度である。

〈出土遺物〉第5b①層水田跡からは、土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品が出土した。破片資料はロクロ土師器が132点、非ロクロ土師器が116点、成形不明の土師器145点、赤焼土器が45点、須恵器が87点である。いずれも細かな小破片が多い。

図示したものでは、III区から出土したE-1須恵器坏（第11図、

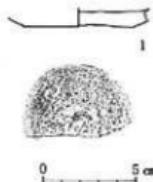


写真80-13）がある。E-1須恵器坏は底部のみの資料で切り離しがヘラ切り無調整である。

## (2) 溝 跡

### S D 1 a 溝跡（第10・12図、写真10・11・12）

〈遺構の状況〉III区とIV区の境付近であるD-I-5~6グリットに位置し、第5b①層上面で検出した。N-19°-Eの方向で、第5b①層水田跡の畦跡NO.3と同じ方向にほぼ直線的に走行する。上端の幅は、72~116cmで、下端幅は23~52cmを計り、深さは検出面より約5~15cmである。底面はほぼ平坦で、標高は北側が南側より約7cm高くなっている。北から南へわずかな傾斜が見られる。底面上において、杭列などの施設は検出されなかった。断面形は扁平なU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は砂粒を多く含んだ暗褐色シルトで、自然堆積であると考えられる。

〈出土遺物〉図化できたものにE-3須恵器壺体部（第15図5、写真80-12）がある。破片資料としては、土師器、赤焼土器、須恵器が計28点ある。土師器はロクロ土師器が多い。

### S D 1 b 溝跡（第10・12図、写真10・11）

〈遺構の状況〉G-5グリットでSD1a溝跡と直交する溝跡が同じ第5b①層上面で検出されたが、平・断面を精査した結果切り合はない。堆積土も同じことから同時期の溝跡と判明した。そこで、東西方向の溝跡をSD1b溝跡とした。SD1b溝跡はG-5~6グリットに位置し、N-77°-Eの方向で、東西方向にほぼ直線的に走行する。上端の幅は、42~98cmで、

下端幅は23~53cmを計り、深さは検出面より約5~11cmである。底面はほぼ平坦で、標高は西側が東側より約9cm高くなっている。底面上において、杭列などの施設は検出されなかった。断面形はゆるやかなU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。

SD 1 a溝跡は第5 b①層水田跡群NO.3と平行しており、第5 b①層水田跡に伴うものである。また、SD 1 b溝跡はSD 1 a溝跡と同時期のものであるからSD 1 b溝跡も水田跡に伴う。したがって、SD 1 b溝跡がSD 1 a溝跡と同時期のものであることを第5 b①層がIV区にも連続して存在していると考えると、第5 b①層水田跡がIV区にも広がっていた可能性もある。

〈出土遺物〉 破片資料のみで、土師器、赤焼土器、須恵器が計18点ある。土師器はロクロ土師器が多く、須恵器には切り離しが回転糸切りの坏が1点含まれる。

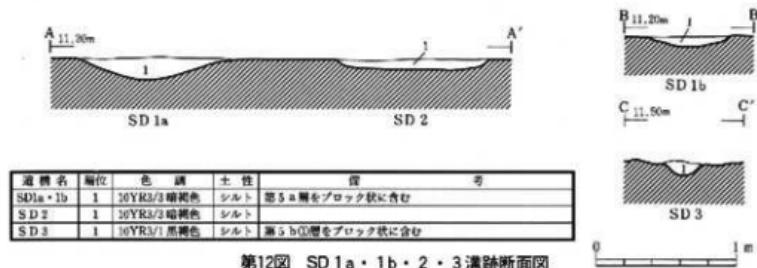
#### SD 2溝跡 (第10・11図、写真10・12)

〈遺構の状況〉 III区とIV区の境付近であるD~I-5~6グリットに位置し、第5 b①層上面で検出した。N-17~20°-Eの方向で、SD 1 a溝跡とほぼ同じ方向で直線的に走行する。上端幅は、82~152cmで、下端幅は36~88cmを計り、深さは検出面より約2~10cmである。底面はほぼ平坦で、標高は北側が南側より約8cm高くなっている。底面上において、杭列などの施設は検出されなかった。断面形は扁平なU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は1層で、砂粒を多く含んだ暗褐色シルトで、自然堆積と考えられる。重複関係を見ると、SD 1 b溝跡、ピットに切られる。

〈出土遺物〉 破片資料のみで、土師器、赤焼土器、須恵器が計13点ある。土師器はロクロ土師器が多い。

#### SD 3溝跡 (第10・12図、写真26)

〈遺構の状況〉 III区北西部、G-1グリットに位置し、第5 b①層上面で検出した。N-68°-Eの方向で、ほぼ同じ方向で直線的に走行する。上端幅は、21~28cmで、下端幅は7~14cmを



計り、深さは検出面より約7～10cmである。底面はほぼ平坦で、標高もほぼ一定で傾斜はない。底面上において、杭列などの施設は検出されなかった。断面形は扁平なU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は1層で、第5b①層のブロックを含んだ黒褐色シルトである。第5b①層水田跡を切っている。

〈出土遺物〉 破片資料のみで、須恵器壺の小破片が1点ある。

### (3) 土坑

#### S K 1 土坑 (第13図、写真13)

〈造構の状況〉 IV区東側F-8グリットに位置する。平面形は東西に長軸をとる不整橢円形で、上端の長軸が109cm、短軸が78cm、下端の長軸が82cm、短軸が48cm、深さが8cmを計る。底面は中央が若干凹むもののほぼ平坦で、壁面はゆるやかに立ち上がる。堆積土は1層で、暗褐色シルトに炭化物粒を少量含む。重複関係はない。

〈出土遺物〉 図示できるものはないが、ロクロ土師器破片が1点、土師器壺破片が2点がある。

#### S K 2 土坑 (第13図、写真14)

〈造構の状況〉 IV区東側E-8グリットに位置する。平面形は南北に長軸をとる不整橢円形で、上端の長軸が59cm、短軸が42cm、下端の長軸が49cm、短軸が33cm、深さが8cmを計る。底面は平坦で、壁面はやや強く立ち上がる。堆積土は2層で、1層が黒褐色シルト、2層が暗褐色シルトで2層中に炭化物粒を含む。重複関係はない。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

#### S K 3 土坑 (第13図、写真15)

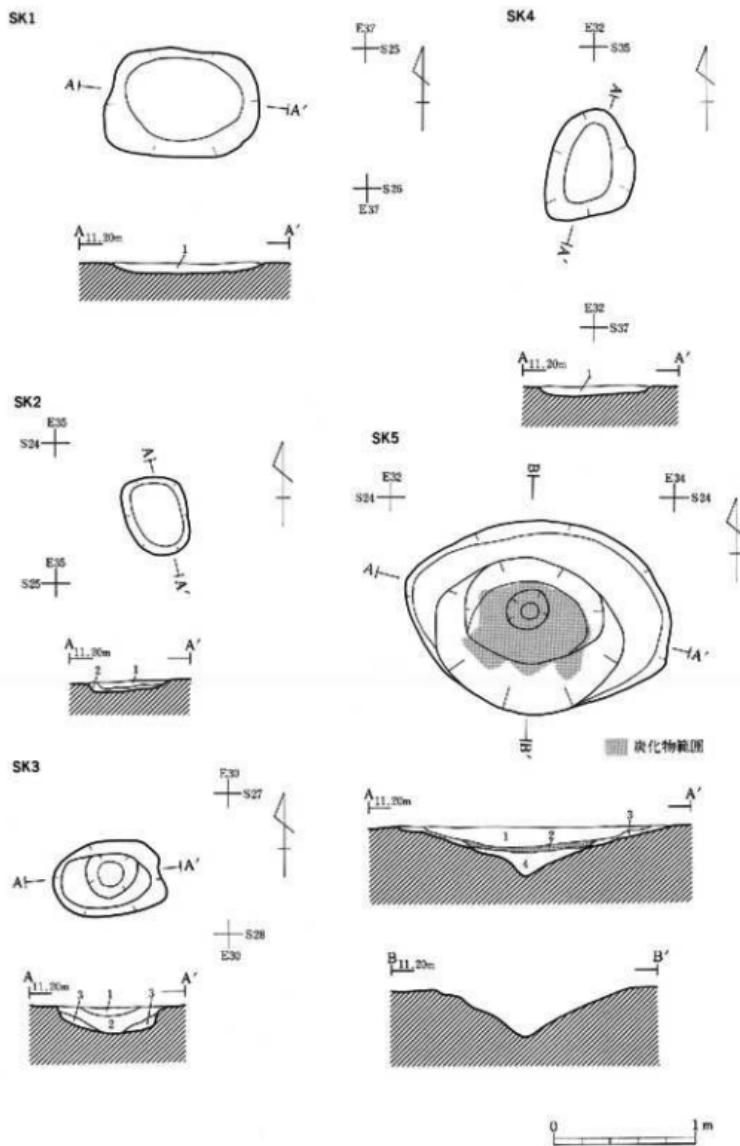
〈造構の状況〉 IV区西側F-6グリットに位置する。平面形は東西に長軸をとる不整橢円形で、上端の長軸が81cm、短軸が53cm、下端の長軸が64cm、短軸が39cmで、深さが20cmを計る。底面は中央よりやや北よりに部分が丸くくぼみ、壁面は急に立ち上がる。堆積土はレンズ状に3層堆積する。1層はにぶい黄褐色シルト、2層が黒褐色シルト、3層が黒褐色粘土質シルトで2層中に炭化物粒を多く含む。重複関係はない。

〈出土遺物〉 図示できなかったが、須恵器破片が1点がある。

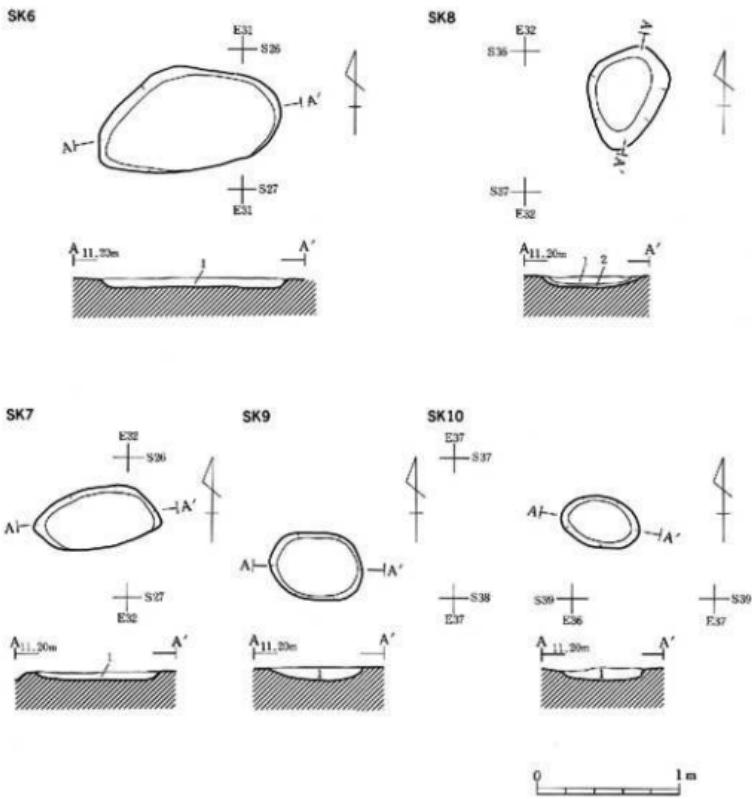
#### S K 4 土坑 (第13図、写真16)

〈造構の状況〉 IV区南東部G-7グリットに位置する。平面形は南北方向に長軸をとる不整橢円形で、上端の長軸が77cm、短軸が60cm、下端の長軸が58cm、短軸が31cmで、深さが8cmを計る。底面は平坦で、壁面はやや急に立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトの単層で炭化物粒を少量含む。重複関係はない。

〈出土遺物〉 出土遺物は、図示できなかったが、ロクロ土師器壺破片が1点がある。



第13図 SK 1 ~ 5 土坑平面図・断面図



遺構名	解説	色調	土性	備考
SK 1	1 10YR3/3 暗褐色	シルト	第5a層をブロック状に含む	
SK 2	1 10YR3/3 黒褐色	シルト	第5b層をブロック状に含む	
	2 7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む	
SK 3	1 10YR3/2-5 暗褐色	シルト		
	2 10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む	
	3 10YR2/2 暗褐色	粘土質シルト		
SK 4	1 10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む	
	1 10YR2/2 黒褐色	シルト	第5b①層をブロック状に含む 炭化物、鐵土を粒状に多く含む	
SK 5	2 10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、鐵土を粒状に少量含む	
	3 10YR4/4 色	シルト		
	4 10YR2/3 暗褐色	粘土質シルト		
SK 6	1 10YR3/4 暗褐色	シルト	第5e層をブロック状に含む	
SK 7	1 10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に含む	
SK 8	1 10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に少量含む	
	2 10YR4/4 色	シルト	炭化物を粒状に少量含む	
SK 9	1 10YR2/3 暗褐色	シルト	炭化物を粒状に含む	
SK 10	1 10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物・鐵土を粒状に含む	

第14図 SK 6～10土坑平面図・断面図

### S K 5 土坑 (第13図、写真17・18・19)

〈遺構の状況〉 IV区東側F-7グリットとG-7グリットの境に位置する。平面形は東西に長軸をとる梢円形で、上端の長軸が90cm、短軸が40cmとなり、下端は径15cmの円形である。深さは35cmを計り、底面はゆるやかに凹むが、中央よりやや北よりの位置でピット状に凹む。壁面は、中央の凹みの部分は急に立ち上がり、その上部はゆるやかに立ち上がる。堆積土は4層に分けられ人為堆積と考えられる。1層は黒褐色シルトで炭化物・焼土を多く含み、2層が炭化物層、3層が褐色シルト、4層が暗褐色粘土質シルトである。2層の炭化物層は中央部に分布し、厚さは4~8cmである。重複関係はない。

〈出土遺物〉 2層中よりロクロ土師器坏、赤焼土器高台付坏が出土した。図示できたのは3点で、D-7ロクロ土師器坏、D-8赤焼土器高台付坏、D-9ロクロ土師器坏がある。

D-7ロクロ土師器坏(第15図1、写真80-9)は、口縁部から体部にかけての資料で、外表面は手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理のちにミガキが施されている。

D-8赤焼土器高台付坏(第15図2、写真80-10)は、体部下端の資料でわずかに底部が残っている。

D-9ロクロ土師器坏(第15図3、写真80-11)は、底部を欠いた資料で、再調整はされていない。内面は黒色処理されているが、再酸化されている。

その他、図示できなかつたがロクロ土師器の小破片が12点2層中より出土している。

また、底面からもロクロ土師器の小破片が3点出土した。

### S K 6 土坑 (第14図、写真20)

〈遺構の状況〉 IV区中央部G-7グリットに位置する。平面形は東西方向に長軸をとる不整梢円形で、上端の長軸が130cm、短軸が75cm、下端の長軸が120cm、短軸が67cm、深さが7cmを計る。底面は平坦で、壁面はやや強く立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトで炭化物粒をわずかに含む。SD1b溝跡に切られる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

### S K 7 土坑 (第14図、写真21)

〈遺構の状況〉 IV区中央部G-7グリット、SK6土坑の東側に位置する。平面形は東西方向に長軸をとる不整梢円形で、上端の長軸が91cm、短軸が43cm、下端の長軸が68cm、短軸が39cm、深さが7cmを計る。底面は平坦で、壁面はやや強く立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトで炭化物粒を含む。SD1b溝跡に切られる。

〈出土遺物〉 出土遺物は土師器・須恵器の小破片が2点のみである。

### S K 8 土坑 (第14図、写真22)

〈遺構の状況〉 IV区南東部II-7グリットに位置する。平面形は南北方向に長軸をとる不整梢

円形で、上端の長軸が76cm、短軸が57cm、下端の長軸が54cm、短軸が39cm、深さが8cmを計る。底面は平坦で、壁面は北側がやや急に、南側がややゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれるが、1・2層とも炭化物粒を含んでいる。1層は暗褐色シルトで、2層は褐色シルトである。重複関係はない。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

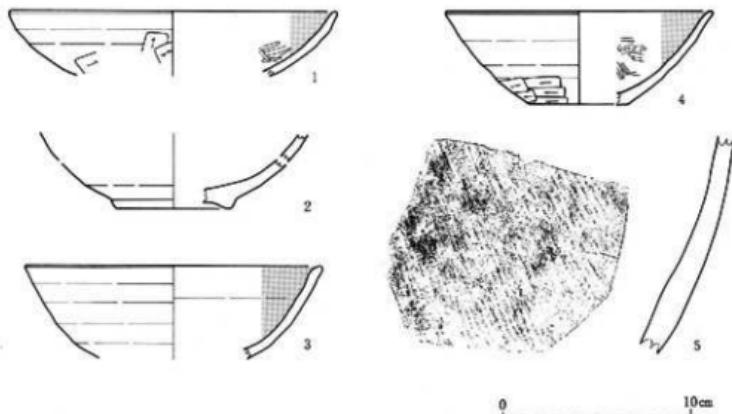
#### S K 9 土坑 (第14図、写真23)

〈遺構の状況〉 IV区南東部H-8グリット、S K 10土坑の北側に位置する。平面形は東西方向に長軸をとる楕円形で、上端の長軸が66cm、短軸が48cm、下端の長軸が58cm、短軸が42cm、深さが10cmを計る。底面は平坦で、壁面はゆるやかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトで炭化物粒を含んでいる。重複関係はない。

〈出土遺物〉 出土遺物は、ロクロ土師器の小破片が2点がある。

#### S K 10 土坑 (第14図、写真24)

〈遺構の状況〉 IV区南東部H-8グリット、S K 9土坑の北側に位置する。平面形は東西方向に長軸をとる楕円形で、上端の長軸が56cm、短軸が37cm、下端の長軸が42cm、短軸が28cm、深さが10cmを計る。底面は平坦で、壁面は急に立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトで、炭化物、焼土を粒状に含んでいる。重複関係はない。



番号	実測番号	遺構名	厚さ	基部	頂部	二層(㎝)	三層(㎝)	四層(㎝)	五層(㎝)	六層(㎝)	外 周 面	内 周 面	備考	写真番号
1	D-7	S K 5	2層	土壌層	平	0.7-4.0	—	2.5-7	1/8	口-体：ロクローカズリ	口-部：ミダリ、褐色斑塊	—	写真23	
2	D-8	S K 5	2層	褐色土	褐色土	—	6.0	4.2	1/4	体：ロクロ	体：ロクロ	—	写真23	
3	D-9	S K 5	2層	褐色土	褐色土	13.9	—	3.9-	1/2	口-体：ロクロ	口-体：褐色斑塊	内側化されている	写真23	
4	D-6	小窓	壁土	土壌層	平	14.3	3.0	9.0	1/3	口-体：ロクローカズリ	口-部：ミダリ、褐色斑塊	—	写真23	
5	E-3	SDa	1層	泥炭層	平	—	—	—	壁土	体：平行クサキ	体：ケズリ	—	写真24	

第15図 第5b①層上面遺構出土遺物

〈出土遺物〉出土遺物は、ロクロ土師器、赤焼土器の小破片が1点づつである。

以上のように土坑10基が検出されたが、炭化物を含んでいるという共通点があるものの性格については不明である。

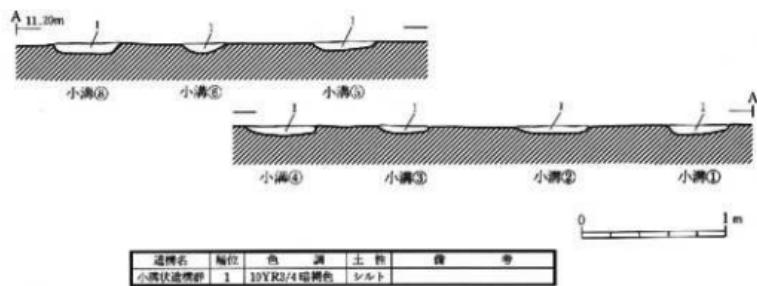
#### (4) 小溝状遺構群

##### 第5 b ①層小溝状遺構群 (第10・16図、写真27)

遺構の状況)IV区において小溝状遺構が8条検出された。いずれもIV区北半部E～F-6～7グリットに位置し、第5 b ①層上面にて検出された。方向はN-83～109°-E(平均N-93.9°-E)を示し、小溝の心地間隔は約80～110cm(平均98.3cm)である。小溝それぞれの最大上端幅は、39～52cm(平均46.6cm)である。底面は不規則な凹凸をなし、断面形はゆるやかに立ち上がる。小溝それぞれの検出面からの最大深度は5～9cmで比較的浅い。堆積土は暗褐色シルトに第5 b ①層のブロックを含む1層のみで、小溝間に大きな相違はない。重複関係はない。小溝状遺構群が天地返し的な耕作の痕跡だとすると、上層の遺構である第4層水田跡の水田耕作に伴う耕作痕か、若しくは本来第4層と第5 b ①層の間に存在していたであろう遺構(畠跡または水田跡)の耕作痕と考えられる。第5 b ①層小溝状遺構群の堆積土が第4層水田跡の耕作土とは違うことを考えると、この小溝状遺構群は後者の性格が強いと推定できる。

〈出土遺物〉小溝⑧よりD-6 ロクロ土師器環(第15図4、写真25-80-8)1点のほか、各小溝からロクロ土師器環、須恵器甕などの小破片が若干出土している。

D-6 ロクロ土師器環は、切り離しが回転糸切りで体部下端にケズリ調整が施されている。内面は黒色処理のちミガキが施されている。



第16図 第5b ①層小溝状遺構群断面図

## (5) ピット

第5 b ①層上面においては107個検出した。掘り方は円形または方形で、柱穴になるものが18個あるが、建物跡になる組み合わせは確認できなかった。ピットはSD 2溝跡より東側で分布がみられ、南半部に多い。南半部に分布するピットの堆積土は、炭化物や焼土の小ブロックを含むものが多い。重複関係ではなく、出土遺物もロクロ土師器、須恵器の小破片をわずかに出土したピットが32個ほどあるが、どれも図化できるものはなかった。

## (6) 第5 b ①層出土遺物

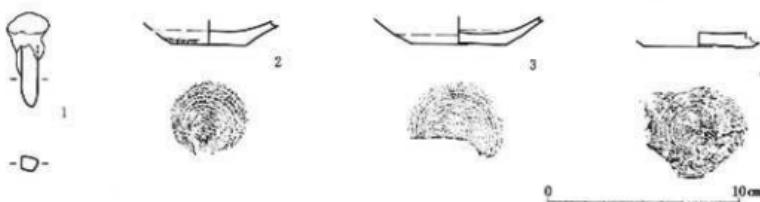
第5 b ①層水田跡の畦畔が検出しなかったIV区出土の遺物を第5 b ①層中出土遺物として扱った。土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品があり、破片資料はロクロ土師器が71点、非ロクロ土師器が77点、成形不明の土師器が96点、須恵器が63点、赤焼土器が22点がある。そのなかで図化できたのは、E-2 須恵器坏(第17図4、写真80-16)、D-4 赤焼土器坏(第17図2、写真80-14)、D-5 赤焼土器坏(第17図3、写真80-15)、N-1 鉄製品(第17図1、写真80-19)がある。

E-2 須恵器坏は底部のみの資料で、切り離しが回転糸切り無調整である。

D-4 赤焼土器坏は底部と体部下端のみの資料だが、底部は回転糸切り無調整である。

D-5 赤焼土器坏も底部と体部下端のみの資料だが、底部は回転糸切り無調整である。

N-1 鉄製品は鋒が多く詳細は不明だが、形状からみて釘であると考えられる。



番号	全縦長さ	出土地区	層位	底面	断面	北緯(cm)	南緯(cm)	西緯(cm)	東緯(cm)	寸				参考文献
										厚さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	
1 N-1	1-8	Ⅳ区	5b①	鉄製品	鉄	5.0	0.9	0.7	—	—	—	—	—	80-19
2 D-4	E-7	Ⅳ区	5b①	鉄製品	鉄	—	—	—	3.9	1.2-	表面のみ	底:ロクロ、底:回転糸切り	底:一孔:ロクロ	80-14
3 D-5	G-7	Ⅳ区	5b①	鉄製品	鉄	—	—	—	3.0	0.9-	内面2/3	底:ロクロ、底:回転糸切り	底:一孔:ロクロ	80-15
4 E-3	G-7	Ⅳ区	5b①	須恵器	鉄	—	—	—	—	0.6-	底面3/4	底:回転糸切り+テヅリ	底:ロクロ	80-16

第17図 第5b①層出土遺物

## (7) 遺構の変遷と年代

〈遺構の変遷〉 第5 b ①層上面で検出された遺構は、直接的に切り合いがあるものはSD 1 b溝跡、SD 2 溝跡、SK 6・7 土坑、SD 3 溝跡及び第5 b ①層水田跡である。SD 1 b 溝跡がSD 2 溝跡、SK 6・7 土坑を切っており、SD 2 溝跡、SK 6・7 土坑どうしで切り合いはない。また、SD 3 溝跡が第5 b ①層水田跡を切っている。SD 1 a 溝跡とSD 1 b 溝跡は前述のとおり同時期、同一のものであり、SD 1 a・b 溝跡は第5 b ①層水田跡に伴う水路跡であることが判明した。SK 6・7 土坑以外の土坑群は切り合いがないが、それぞれの堆積土が近似しており、おそらく同じ段階のものであろう。そして、SK 5 土坑とSD 2 溝跡から出土したロクロ土師器が接合しているので、溝と土坑が埋まる段階の年代は同じである可能性がある。小溝状遺構群については、切り合いもなく、遺構の配置からも何ともいえる要素はない。ピット群についても切り合いがないが、IV区にしか分布していないことを考えると水田跡を意識したものである可能性がある。

前後の層の遺構を含めて以上のことをまとめる以下のような変遷が考えられる。



(どの段階か不明のもの) 第5 b ①層小溝状遺構群、ピット群

〈所属年代〉 第5 b ①層は前述のとおり灰白色火山灰を含んだ第5 b ②層の直上層で、第4層同様灰白色火山灰下以降の時期が与えられる。したがって平安時代の10世紀前半以降となる。出土遺物は、第5 b ①層水田跡からE-1須恵器坏の1点、SK 5 土坑からD-7ロクロ土師器坏・D-8赤焼土器高台付坏・D-7ロクロ土師器坏の3点、小溝状遺構群からD-6ロクロ土師器坏の1点、第5 b ①層中からE-2須恵器坏・D-4赤焼土器坏・D-4赤焼土器坏・N-1鉄製品の4点がある。

このうち、第5 b ①層水田跡の耕作土から出土しているE-1須恵器坏の底部切り離しはヘラ切りで、手持ちヘラ削り調整が施されている。切り離しがヘラ切りのものは9世紀半ばより古い段階に多くみられるもので(白鳥:1980)、水田の耕作に伴う下層からの巻き上げによるものと思われる。小溝状遺構群から出土したD-6クロ土師器坏は底径／口径は0.37で、底部は回転糸切りに回転ヘラケズリが施されており、再調整がなされる点で平安時代でも古い要素を持つ。SK5土坑の炭化物層から廃棄されたと考えられる土器が3点出土している。同じロクロ土師器坏でも再調整の行われているものとそうでないものが混在しており、破片資料なうえ、出土数も少ないことからSK5土坑の年代については断定できない。第5 b ①層の破片資料をみても下層の巻き上げと考えられるものと混在しており、年代の特定は困難である。しかし、中・近世まで下る遺物は見い出だせない。以上のことから第5 b ①層の年代は平安時代で10世紀前半以降としておきたい。

## 5 第5 b ②層

第5 b ②層上面では、5 b ②層水田跡、SD4溝跡を検出した。

### (1) 水田跡

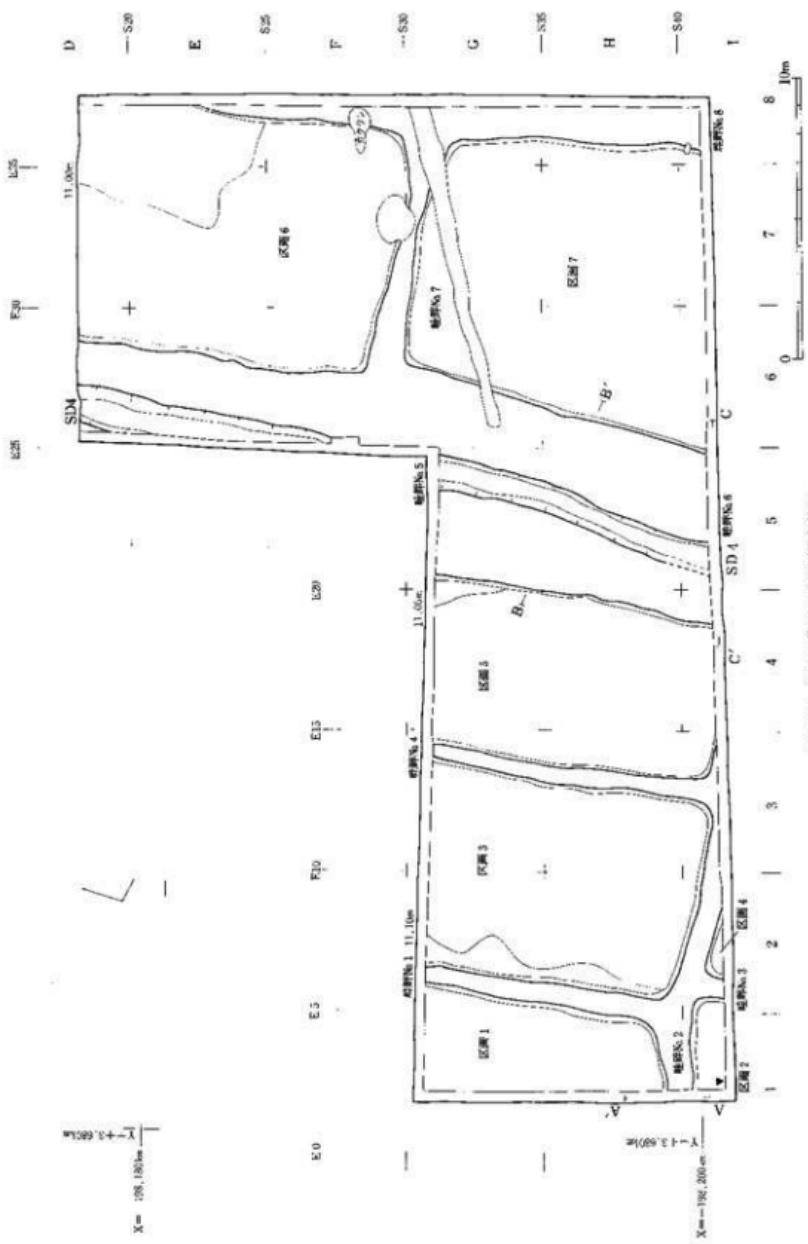
#### 第5 b ②層水田跡 (第18図、写真29・30)

III区とIV区の境にある大畦畔とそれに伴う6条の小畦畔によって構成される。畦畔は、第5 b ①層を堀り込んでいく途中に検出し確認された。水田域は調査区全域に広がり、第5 b ①層水田跡の耕作による攪乱が及んでいる箇所もあるが遺存状態は良好である。

〈畦畔〉 III区において5条の畦畔を、IV区において3条の畦畔を検出した。8条ともに耕作土を盛り上げて作っており、畦畔の耕作土上面からの高さは遺存状況の良い箇所で5.0cmである。畦畔NO.5と畦畔NO.6は上端幅が154~310cm、下端幅が175~325cmと他の6条の畦畔とくらべると規模が大きく、さらに後述するSD4溝跡を畦畔間ににはさんでおり、大畦畔をなしている。他の6条の畦畔は上端幅が45~179cm、下端幅が70~211cmとばらつきがある。

〈耕作土〉 耕作土は基本層第5 b ②層である褐色のシルト質粘土で、調査区全域に分布する。厚さは全体的に薄く、5~12cmである。下面は一部ゆるやかなところもあるが、凹凸が比較的認められる。

〈水田区画〉 III区で5区画、IV区で2区画を確認した。区画全体が検出されたものはないが、平面形は南北方向に長い長方形を基調としていると考えられる。区画の一辺の長さは区画3・5・6・7で東西方向の長さが確認され、それぞれ6.9~7.2m、5.5~6.0m、8.4~8.6m、8.1~9.1mである。南北方向は区画6・7が比較的長く11m以上ある。



第18图 第5b(2)层上面地带全图

第4表 第5b②層水田跡計測表

地盤No.	方	向	長さ(cm)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	N	-9°-E	8.5~	55~84	86~125	1~3	
2	N-85°~165°-E	16.1~		82~125	115~178	1~3	
3	N-11°-E	0.9~		69~117	105~154	1~2	
4	N-9°-E	16.1~		46~122	89~126	2~5	
5	N-11°-E	10.1~		175~300	191~320	1~2	大畦畔
6	N-10.5°-E	23.1~		154~310	175~325	1~5	大畦畔
7	N-102°-E	8.1~		45~179	70~211	1~3	
8	N-5°-E	17.8~		148~	168~	1~2	

〈水田面の標高と傾斜〉第5b②層水田跡は、全体的にみると、西から東へとゆるやかに傾斜している。標高は11.13~11.0mで、最も標高の高い区画1と低い区画6の標高差は13cmであり、大畦畔をはさんで西側（区画5）と東側（区画7）では5cm程度の標高差が見られる。

〈出土遺物〉第5b②層水田跡からは、土師器、須恵器が出土した。土師器はロクロ使用のものが69点、ロクロ未使用のものが54点、成形不明の土師器が74点、須恵器は61点である。いずれも細かな破片がほとんどである。

そのなかで図化できたのは、E-4須恵器坏（第19図1、写真80-17）とE-5須恵器坏（第19図2、写真81-18）である。双方とも水田耕作土中からの出土である。

E-4須恵器坏は底部のみの資料で、切り離しが回転糸切り、無調整である。

E-5須恵器坏は底部と体部下端の資料で、同じく底部切り離しが回転糸切り、無調整である。



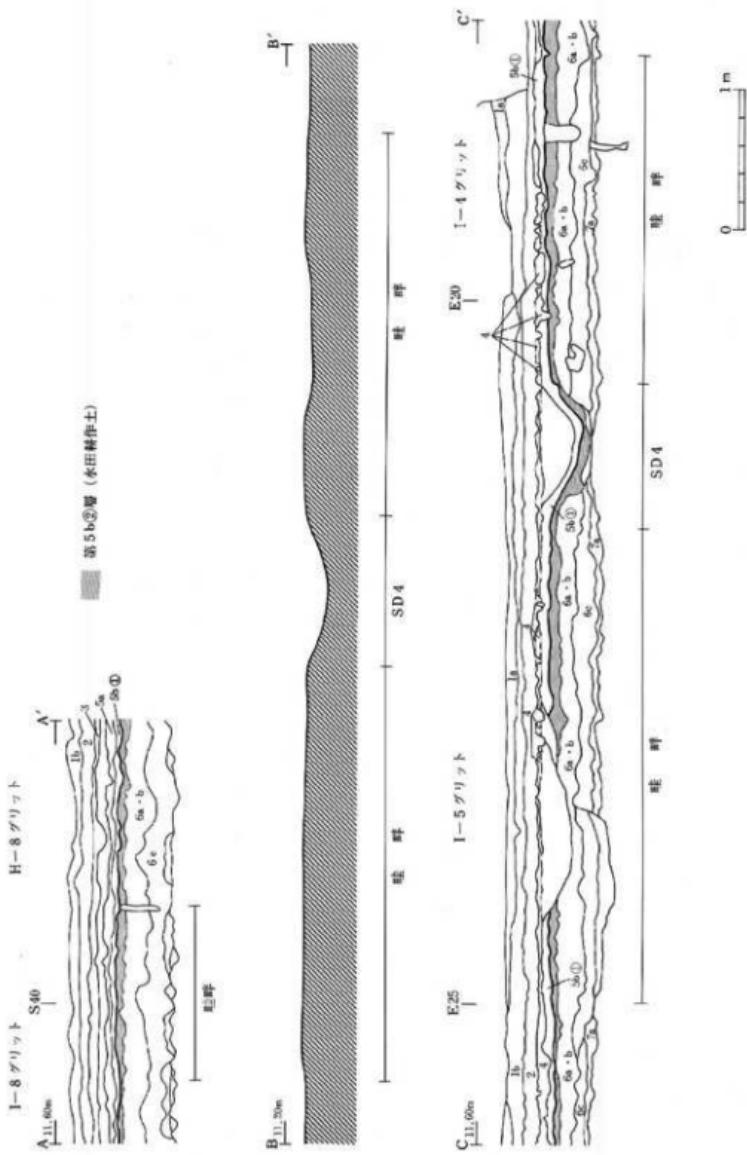
番号	発見場所	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	底深(cm)	底分類	方	向	内面観察	備考	写真番号
1	E-4	6.2	8.6	—	7.0	0.5~	底面1/4 側面1/4	左	ロクロアズ	底:回転糸切り	底:ロクロ	80-17
2	E-5	2.6	3.6	—	8.1	1.4~	底面1/4 側面1/4	右	ロクロアズ	底:回転糸切り	底:ロクロ	80-18

第19図 第5b②層水田跡出土遺物

## (2) 溝跡

### S D 4溝跡 (第18図、写真28)

III~IV区にまたがるD~I-5~6グリットに位置する。第5b②層水田跡の畦畔NO.5・NO.6の間をわずかに蛇行しながら走行する。方位はN-11°~16°-Eである。上端幅は82~148cm、下端幅は44~83cmで、深さは検出面より約4~16cmである。底面は部分的にわずかな凹凸があり、杭列などの施設は検出されなかった。底面の標高は南側が北側より5cm低く、北側か



第20回 第5b②層水田耕作畔・SD4 滲漏断面図

ら南側へわずかな傾斜がある。堆積土は1層のみで基本層第5 b ①層が堆積し、底面近くでは砂粒を含んでおり、自然堆積と考えられる。重複関係はなく、第5 b ②層水田跡との関係も同時存在で、しかもSD 4溝跡は第5 b ②層水田跡に伴う水路であったと考えられる。

〈出土遺物〉堆積土中から須恵器壺、ロクロ土師器壺などがあるが、いずれも細かい小破片であるため図化はできなかった。

### (3) 第5 b ②層水田跡・SD 4溝跡の年代

第5 b ②層水田跡・SD 4溝跡は出土遺物が乏しいため、遺物から所属年代を推定することは困難である。しかし、第5 b ②層中には調査区全域からまばらに灰白色火山灰がブロック状に混入している。現在、灰白色火山灰の降下年代は10世紀前半と考えられている。したがって、第5 b ②層水田跡の上限は10世紀前半となり、第5 b ②層水田跡に伴うSD 4溝跡も同様のことが言える。出土遺物で図化できた須恵器壺2点は底部しかないので全容は不明だが、切り離しが回転糸切り無調整のものは、9世紀半ば以降に多くみられる(白鳥:1980)ので矛盾はない。また、破片資料で非ロクロ土師器も多く含まれるが、これはすべて水田耕作土中の出土で水田耕作による下層の遺物の巻き上げと考えられる。下限は上層の第5 b ①層の年代を下らない範囲におさまると考えられるが、実年代は不明である。以上のことから、第5 b ②層水田跡・SD 4溝跡の年代は平安時代の灰白色火山灰降下以降の時期である10世紀前半以降である。

## 6 第6 a・b層

第6 a層上面では、第6 a層水田跡、溝跡1条(SD 5溝跡)、掘立柱建物跡2棟(SB 1・2建物跡)、第6 a層小溝状遺構群、ピットを検出した。

### (1) 水田跡

第6 a層水田跡 (第21図、写真31)

第6 a層水田跡はIII区東端の大畦畔(畦畔NO.3)と、それに伴う3条の畦畔によって構成され、4区画を確認した。畦畔は、基本層第5 b ②層を掘り込んでいく途中で確認されたが、SD 4溝跡以東では確認できなかった。SD 4溝跡以東でも以西でみられる耕作土(第6 a層)が連続して分布し、さらに両者の差を見分けることができなかつたので、SD 4溝跡以東も同じく水田耕作域であった可能性もある。

〈畦畔〉III区において4条の畦畔を検出した。4条ともに耕作土が盛り上げて作られており、畦畔の耕作土上面からの高さは遺存状況の良い箇所で3cmである。畦畔NO.3は他の畦畔よりも規模が大きく、さらにSD 5溝跡を伴っており、大畦畔をなしている。規模は上端幅が

199~333cm、下端幅が210~344cmである。畦畔 NO.1 と NO.2 は十字に交わり、畦畔 NO.1 の南側の畦畔の幅が他とくらべ大きいほかは同規模で、上端幅が56~148cm、下端幅が76~278cmである。

第5表 第6a層水田跡畦畔計測表

起算點	方	度	長さ(cm)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備	号
1	N	-8°-E	10.8~	110~248	139~278	1~2		
2	N	-87.5°-E	16.0~	56~148	76~184	1~2	途中切れている	
3	N	-12°-E	10.3~	190~333	210~344	1~3	大畦畔	

〈耕作土〉 耕作土は基本層第6a層である黒褐色の粘土質シルトである。第6a層と第6b層を全域で分層できなかったので、耕作土の厚さや状態については不明である。

〈水田区画〉 畦畔を検出したIII区において4区画を確認した。区画全体が検出されたものはない、全体像は不明である。区画の一辺の長さは区画3及び区画4で東西の長さが確認され、それぞれ10.5~11.5mと10.1~10.7mである。

〈水田面の標高と傾斜〉 区画内はほぼ平坦だが、全体的にみると西から東へとゆるやかに傾斜している。標高は11.08~11.04mで、最も標高の高い区画1と低い区画3の標高差は4cmである。

〈重複関係〉 第6a層小溝状遺構群(B4群)、第6a層上面検出ピットによって畦畔が切られているので、時期差を表していると考えられる。

〈出土遺物〉 第6a層水田跡からは、土師器・須恵器が出土した。土師器はロクロ使用のものが5点、ロクロ未使用のものが8点、そのほかは成形不明の土師器が4点ある。いずれも細かな破片がほとんどである。そのなかでロクロ未使用の土師器2点が図化できた。2点とも畦畔NO.1と畦畔NO.2の交じわる地点から出土したものである。

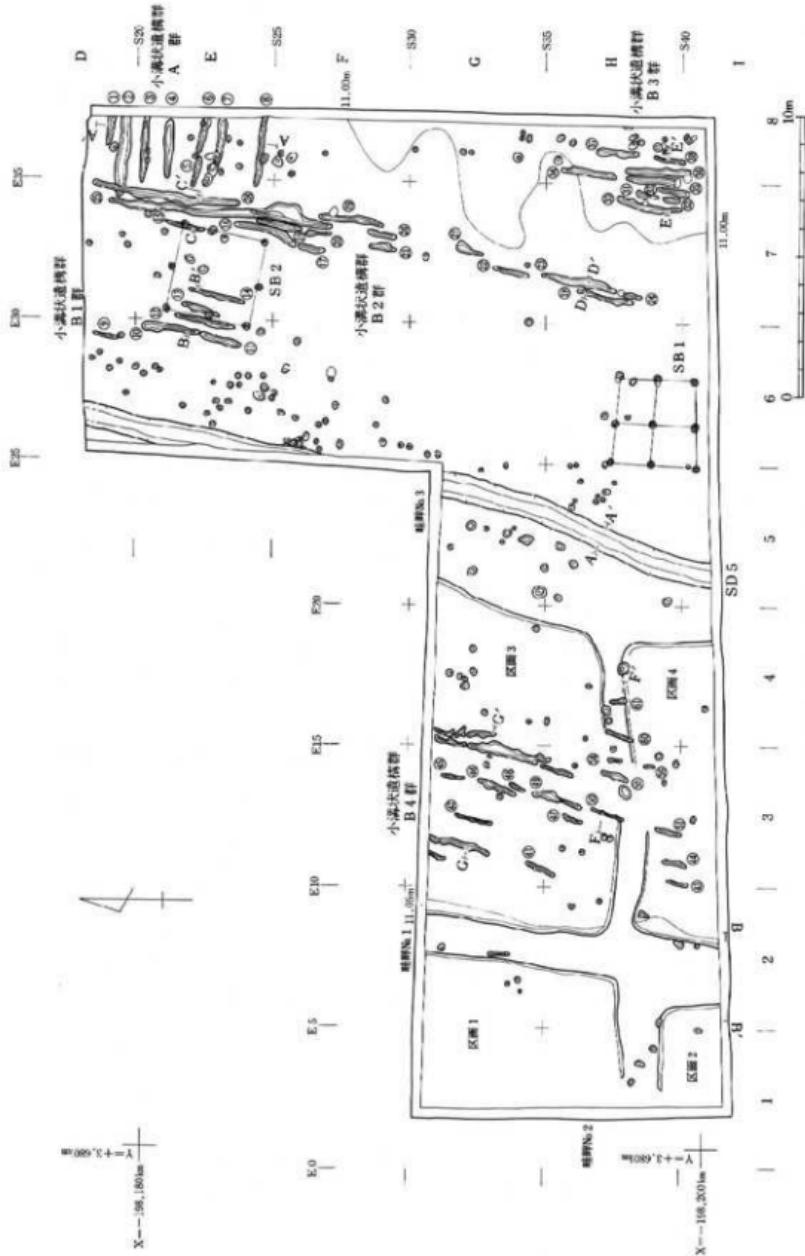
C-1 土師器(第22図1、写真81-1)は甕の口縁部から体部にかけての資料で、頸部に長い段をもち口縁部は外反する。外面口縁部はヨコナデ、体部はケズリ、内面口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデの調整を施している。

C-2 土師器(第22図2、写真81-2)は甕の底部から体部下端にかけての資料である。C-1 土師器と同一のものの可能性もあるが、接合できなかったので違う登録番号をつけた。体部の調整はC-1 土師器と同じである。

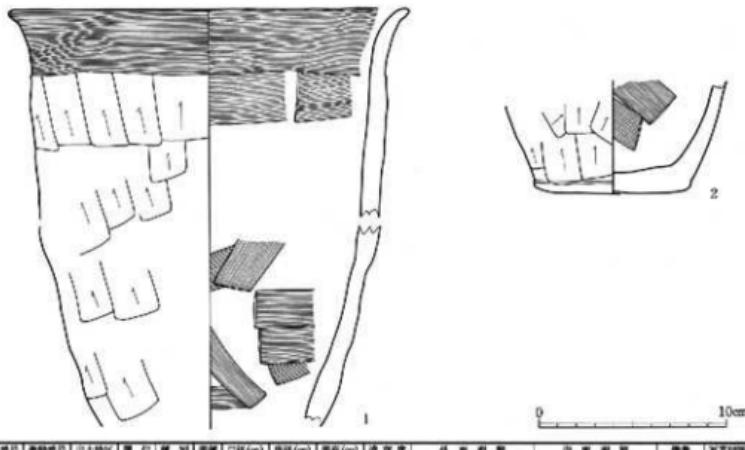
## (2) 溝 跡

### S D 5 溝跡 (第21・23図、写真33~35)

〈遺構の状況〉 III区東端部、G~I-5グリットとIV区D~F-6グリットに位置し、第6a層上面で検出した。第5b①層上面のSD1a溝跡、第5b②層上面のSD4溝跡とほぼ同じ

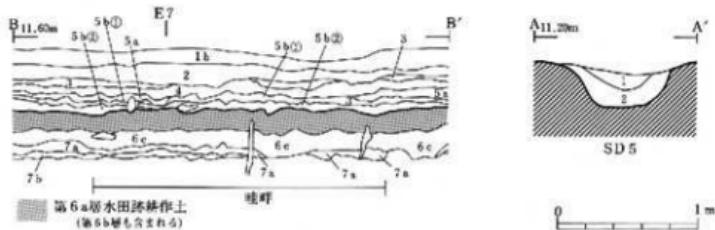


第21圖 第6a層上面遺構全體圖



第22図 第6a層水田跡出土遺物

位置で、第6a層水田跡の畦畔NO.3に沿った状態でN-11°~19°-Eの方向にわずかに屈曲しながら走行する。上端幅は79~94cm、下端幅は28~45cm、深さは検出面より29~33cmである。底面はほぼ平坦で杭列などの施設は検出されなかった。底面の標高は南端部が北端部より10cm低く、北から南へわずかに傾斜している。断面形は逆台形をなし、西壁のほうが東壁よりもゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられ1層は基本層の第5b②層で、2層は暗褐色シルト質粘土で炭化物を含んでいる。重複関係はない。SD5溝跡は第6a層水田跡畦畔との状況から、第6a層水田跡に伴う水路である可能性が高い。



第23図 第6a層水田跡畦畔・SD5溝跡断面図

測定名	層位	色	表	土性	物	考
SD5	1	10YR3/2無褐色		粘土		
	2	10YR3/2暗褐色		シルト質粘土	炭化物をブロック状に含む。炭化物を少量含む。	

〈出土遺物〉土師器、須恵器がある。いずれも小破片であるが、ロクロ土師器が17点、成形不明の土師器が9点、須恵器が3点である。図化できたものはない。

### (3) 挖立柱建物跡

#### S B 1 建物跡 (第24図、写真36・37)

〈遺構の状況〉IV区南西部、H-I-6グリットに位置する。東西2間×南北2間の掘立柱建物跡で、方向は西側柱列でN-5°-Eである。建物の規模は東西方向で総長307cm、南北方向が西側で総長304cm、東側で総長280cmである。柱間寸法は東西方向で135~172cm(平均152cm)、南北方向が137~164cm(平均146cm)である。柱穴掘り方は円形ないし梢円形で、長軸23~37cm、短軸19~33cmで、深さは検出面より22~26cmである。柱痕跡は掘り方を一段掘り下げて検出したが、径8~12cm(平均9.9cm)の円形である。堆積土は掘り方、柱痕跡とともにP1~P9までほぼ同じである。第6a層上面での重複関係はない。

〈出土遺物〉P1、P4、P6、P7からロクロ土師器の小破片が1点づつ出土しているのみである。

#### S B 2 建物跡 (第25図、写真38・39)

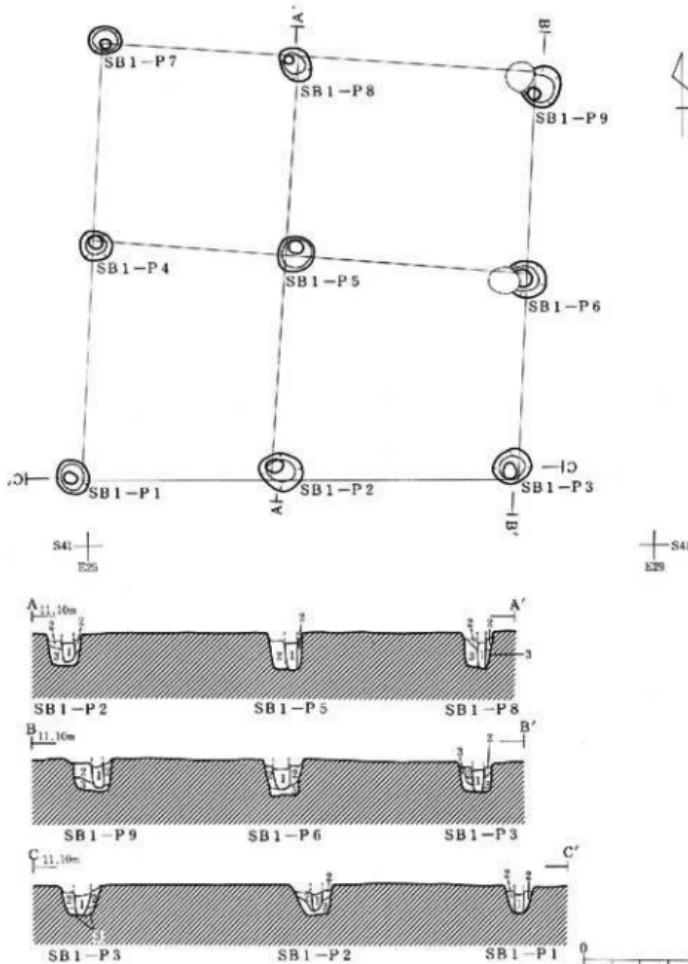
〈遺構の状況〉IV区北部、E-6~7グリットに位置する。東西2間×南北2間の掘立柱建物跡で、方向は西側柱列でN-11°-Eである。建物の規模は東西方向で総長313cm、南北方向が総長296cmである。柱間寸法は東西方向で148~161cm(平均155.5cm)、南北方向が119~176cm(平均147.8cm)である。柱穴掘り方は円形ないし梢円形で、長軸25~31cm、短軸20~26cmで、深さは検出面より17~26cmである。柱痕跡は掘り方を一段掘り下げて検出したが径9~11cm(平均9.9cm)の円形である。掘り方の堆積土はすべて同じ褐色シルトで、柱痕跡の堆積土は黒褐色シルトと暗褐色シルトがある。第6a層小溝状遺構群(B2群小溝⑬)を切っている。

〈出土遺物〉P4からロクロ土師器壺の小破片が1点出土しているのみである。

### (4) 小溝状遺構群

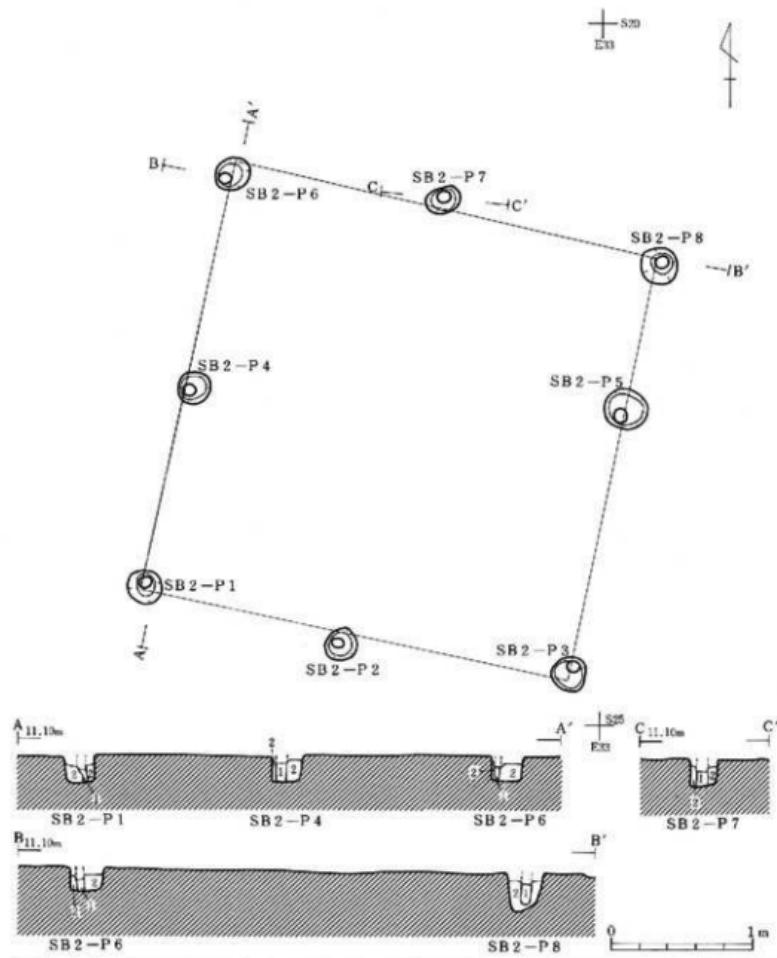
#### 第6a層小溝状遺構群 (第21・26図、写真40・41)

〈遺構の状況〉小溝状遺構がIII区において25条、IV区において36条検出された。ただし、第5b②層水田跡の耕作深度が深いため底面の凹凸が激しく1条のものも数条に分かれてしまったため多くなった。本来の状態を推定するとIII区において11条、IV区において22条となる。したがって、小溝の心心間隔の数値は推定された本来の小溝どうしのもので計測した。第6a層小溝状遺構群は小溝の方向から2群に分けられ、平面的なまとまりからさらに4群に分けることができる。



遺構名	層位	色調	土性	備考	遺構名	層位	色調	土性	備考
SB1-P1	1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡	SB1-P6	1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡
	2	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方		2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方
SB1-P2	1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡		3	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方
	2	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方		1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡
	3	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方	SB1-P8	2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方
SB1-P3	1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡		3	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方
	2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方		1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡
	3	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方	SB1-P9	2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方
SB1-P5	1	10YR4/2 深黄褐色	粘土質シルト	柱状跡		3	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	柱状跡
	2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	柱穴掘り方					

第24図 SB1 建物跡平面図・断面図



遺構名	部位	色 調	土 件	備 考
SB 2 - P 1	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱頭跡
	2	10YR4/1 海灰色	シルト	柱穴掘り方
SB 2 - P 4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱底跡
	2	10YR4/1 海灰色	シルト	柱穴掘り方、酸化鉄を含む
SB 2 - P 6	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱底跡
	2	10YR4/1 海灰色	シルト	柱穴掘り方、酸化鉄を含む
SB 2 - P 7	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱底跡
	2	10YR4/1 海灰色	シルト	柱穴掘り方、酸化鉄を含む
SB 2 - P 8	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱穴掘り方、酸化鉄を含む
	2	10YR4/1 海灰色	シルト	柱穴掘り方、酸化鉄を含む

第25図 SB 2 建物跡平面図・断面図

**A群**：小溝①～⑧の8条から構成され、本来は7条と推定できる。IV区の北東部に分布し、方向はN-93～105°-E（平均N-98.4°-E）を示している。小溝の心心間隔は56～140cm（平均92.2cm）である。それぞれの最大上端幅は22～40cm（平均28cm）、深さは検出面より3～10cm（平均5.9cm）である。底面には凹凸があり、遺存状況は悪い。堆積土は1層で、暗褐色シルトでB群のものとは相違がみられる。重複関係を見ると第6a層小溝状遺構群のB2群およびピットに切られる。

**B1群**：小溝⑨～⑩の6条から構成される。IV区の北西部に分布し、方向はN-7～20°-E（平均N-13.7°-E）を示している。小溝の心心間隔は45～60cm（平均52.5cm）である。それぞれの最大上端幅は16～35cm（平均22.8cm）、深さは検出面より3～4cm（平均3.3cm）である。底面には凹凸があり、遺存状況は悪い。堆積土は1層で、褐灰色粘土質シルトで、A群のものとは相違がみられる。重複関係はSB2建物跡、ピットに切られる。

**B2群**：小溝⑪～⑫の14条から構成される。IV区の北東部に分布し、方向はN-0～17°-E（平均N-9.2°-E）を示している。小溝の心心間隔は45～60cm（平均52.5cm）である。それぞれの最大上端幅は16～42cm（平均28.1cm）、深さは検出面より1～8cm（平均2.4cm）である。底面には凹凸があり、遺存状況は悪い。堆積土はB1群同様で、重複関係はSB2建物跡、ピットに切られ、第6a層小溝状遺構群のA群を切っている。

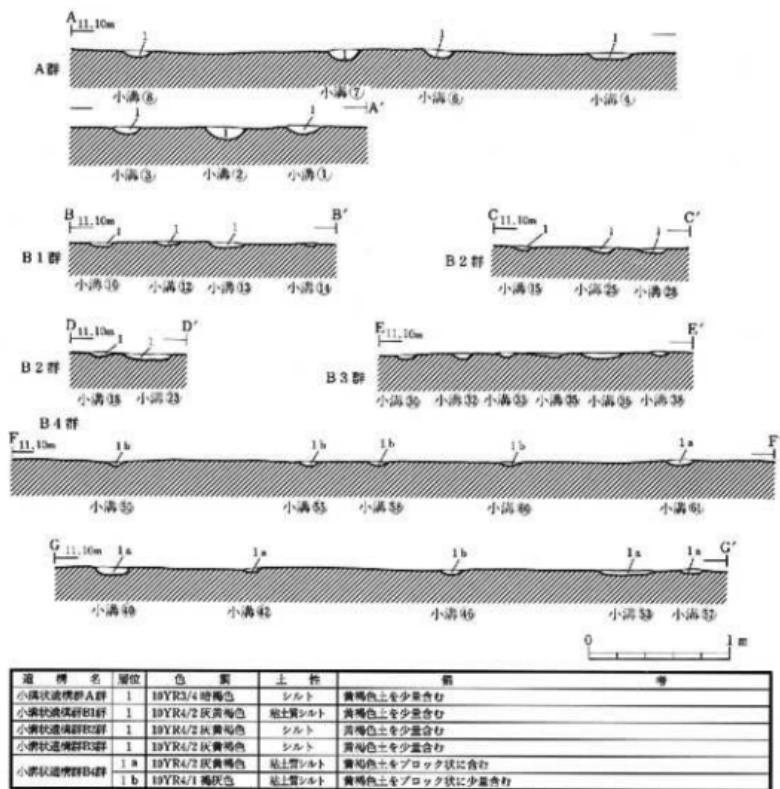
**B3群**：小溝⑬～⑯の8条から構成される。IV区の南東部に分布し、方向はN-1～9°-E（平均N-6.0°-E）を示している。小溝の心心間隔は30～45cm（平均36.0cm）である。それぞれの最大上端幅は16～30cm（平均28.4cm）、深さは検出面より1～3cm（平均1.6cm）である。底面には凹凸があり、遺存状況は悪い。堆積土はB1群同様で、重複関係はない。

**B4群**：小溝⑰～⑲の22条から構成される。III区の中央に分布し、方向はN-0～25°-E（平均N-13.7°-E）を示している。小溝の心心間隔は50～110cm（平均81.0cm）である。それぞれの最大上端幅は16～43cm（平均19.1cm）、深さは検出面より1～4cm（平均1.3cm）である。底面には凹凸があり、遺存状況は悪い。堆積土はB1群同様で、重複関係を見ると第6a層水田跡群を切っている。

〈出土遺物〉 A群、B1～4群ともに出土遺物は土師器、須恵器の小破片がわずかにあるのみである。

〈遺構の性格〉 A群とB2群は重複関係にあり、B2群がA群より新しいことが判明した。そして、B1・3・4群は堆積土の状況、平面形、残存状況、方向などからみてB2群と同じような状況を呈している。したがって、B1～4群群は1つのまとまりをなすと考えられ、小溝状遺構群はA群とB群の2時期に分けられることになる。

A群は、残存状況、底面の凹凸、平面での規格性などから後述の第7a層上面で検出された



第26図 第6a層小溝状遺構群断面図

小溝状遺構群と類似している。小溝の底面に農具等の耕作痕跡こそ検出されなかったが、これらの小溝は天地返し的な耕作の痕跡と考えられ、本来は第6a層上面若しくは第5b②層との間に畠跡が存在した可能性があるが確認はない。

B1～4群はA群とは違い、残存状況が極めて悪い。それ故に本米1条のものが数条に分かれてしまったものと考えられる。堆積土も第5b②層水田跡と同じではないが、類似している。そうすると、第5b②層水田跡の耕作の痕跡の可能性が考えられるが、B2群とSB2建物跡に重複関係があってSB2建物跡が新しく、第5b②層水田跡とB1～4群の間にSB2建物跡が存在することとなり、その可能性はなくなる。したがって、状況はA群とは違うが、性格はA群と同様に考えざるを得ない。

## (5) ピット

第6a層上面では175個検出した。平面形は円形または橢円形で、SB1・2建物跡の他に柱穴になるものは23個あるが、建物跡になる組み合わせは確認できなかった。ピットはIV区西部とIII区東部にやや多く分布し、III区西側、IV区中央部はほとんどみられない。遺物は10個のピットでクロ土師器、須恵器の小破片が極少量出土しているが、図化できるものはなかった。重複関係を見ると第6a層小溝状遺構群を切っているものがある。

## (6) 第6a・b層出土遺物

畦畔を検出したIII区の第6a層水田跡以外の区域も前述のとおり水田耕作土の可能性はあるが、ここでは確実に第6a層水田跡から出土しているもの以外を第6a・b層中出土遺物としてとり上げる。図化したものはE-7須恵器壺(第27図1、写真81-3)、E-8須恵器壺(第27図2、写真81-4)、N-1鉄製品(第27図3、写真81-5)の3点である。

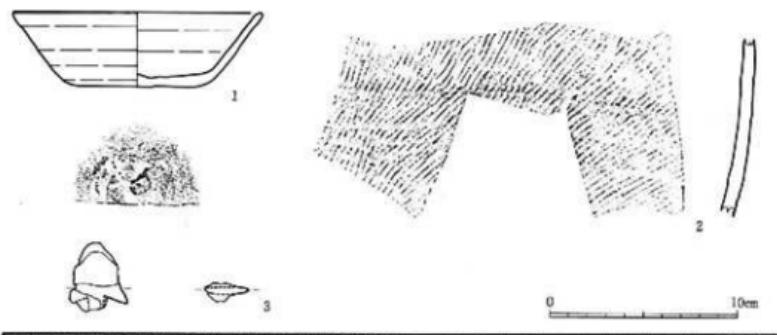
E-7須恵器壺は、底部が回転ヘラ切り無調整で、口縁部にかけて直線的に外傾する。底径／口径は0.49である。

E-6須恵器壺は体部の資料で、外面が平行タタキ、内面がナデ調整が施されている。

N-1鉄製品は鉄錠であるが、全体の形状は錠のため把握しがたい。

## (7) 遺構の変遷と年代

〈遺構の変遷〉第6a層上面で検出された遺構で直接的に切り合いがあるものは、SB2建物跡と小溝状遺構群(B2群)、第6a層上面検出のピットと小溝状遺構群、小溝状遺構群(B4



番号	発掘場所	地盤	深度	形	大きさ	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調査	内面	外面	縁	参考
1	E-7	G-7-H-2 6a,b	泥質粘土	壺	—	13.4	6.0	4.0	底部丸 口縁: リム、周: 回転ヘラ切り	リム: リム、周: 回転ヘラ切り	—	—	E-3
2	E-8	D-6 6a,b	泥質粘土	壺	—	—	—	—	破片	平行タタキ	—	—	E-4
3	N-1	出土地図 跡地	砂質粘土	鉄製品	—	3.6	3.1	0.4	—	—	—	—	E-5

第27図 第6a・b層出土遺物

群)と第6a層水田跡が挙げられる。前述のようにSB2建物跡が小溝状遺構群(B2群)を、ピットが小溝状遺構群を切っており、小溝状遺構群(B4群)が第6a層水田跡を切っている。また、SD5溝跡は第6a層水田跡に伴う溝跡なので同時期と考えられる。さらに、SB1建物跡は直接的な切り合いはないものの、柱穴、柱痕跡の状況や建物跡の規模などから考えるとSB2建物跡と同時期の可能性がある。

前後の層の遺構を含めて以上のことまとめると以下のような変遷が考えられる。



〈所属年代〉上層である第5b②層に灰白色火山灰のブロックを含むことは前述のとおりだが、第6a層においては含まない。したがって第6a層は灰白色火山灰降下前の層と言うことになり、年代も10世紀前半を下らないものと考えられる。また遺物については第6a層水田跡からC-1土師器壺、C-2土師器壺の2点、第6a層中からE-7須恵器壺、E-8須恵器壺、N-1鉄製品の3点が出土している。C-1・C-2土師器壺はおそらく同一個体で、成形にロクロを使用していない。非ロクロの土師器壺は平安時代においても存在しており、1例だけでは年代は限定できない。E-7須恵器壺は切り離しがヘラ切りで無調整である。このような切り離しの須恵器は9世紀半ばより前に多く見られる(白鳥:1980)。以上の点と下層の年代からみて第6a層は灰白色火山灰降下前で9世紀を中心とする年代としておきたい。

## 7 第6c層

第6c層上面では、第6c層島跡、溝跡3条(SD6・7a・7b溝跡)を検出した。

## (1) 島 跡

### 第6c層島跡 (第28図、写真42~49)

第4次調査において、第6c層上面で大きな凹凸がみられた。その凸部は断面形、幅、間隔、方向性や方向性の微妙な変化、途切れ、規模の変化による幾つかの単位が認められたことにより島の歯と認定された。第4次調査の島跡は周囲に広がる様相を示していたので、第5次調査においてもその検出を試みた。最初に調査区壁面の精査を行い、凹凸が確認されたので、第6c層上面において再びにわたって精査を行った結果、第4次調査における島の歯と同様のものを確認した。

〈島の範囲〉 耕作土は調査区全域に広がり、歯もIV区東側のSD 6~7 b溝跡が分布する区域を除いた全域で検出された。遺存状況はIII区西側が比較的良好、東にいくにしたがって悪くなる。特にIV区南東部は特に遺存状態が悪い。

〈耕作土〉 耕作土である第6c層は暗褐色のシルトである。上層の第6a・b層とは土色が似ているものの土質が粘土とシルトで全く異なる。また、下層の第7a層とは土色がぶい黄褐色で全く異なる。耕作土の厚さは5~25cmで、15cmの箇所が多い。

〈歯の配列・形状・規模〉 歯はすべて東西方向を基調としており、断面形も済鉢形あるいは山形を呈している。歯の規模・配列においては第4次調査のものと若干の相違が認められる。第5次調査においても歯を1つ1つ観察し、歯の方向、間隔、分布状況、規模などによって第31図のように大きくA~G群の7群に分けた。また、群ごとにさらに2~3に細分した。以下、それぞれの特徴を記述する。

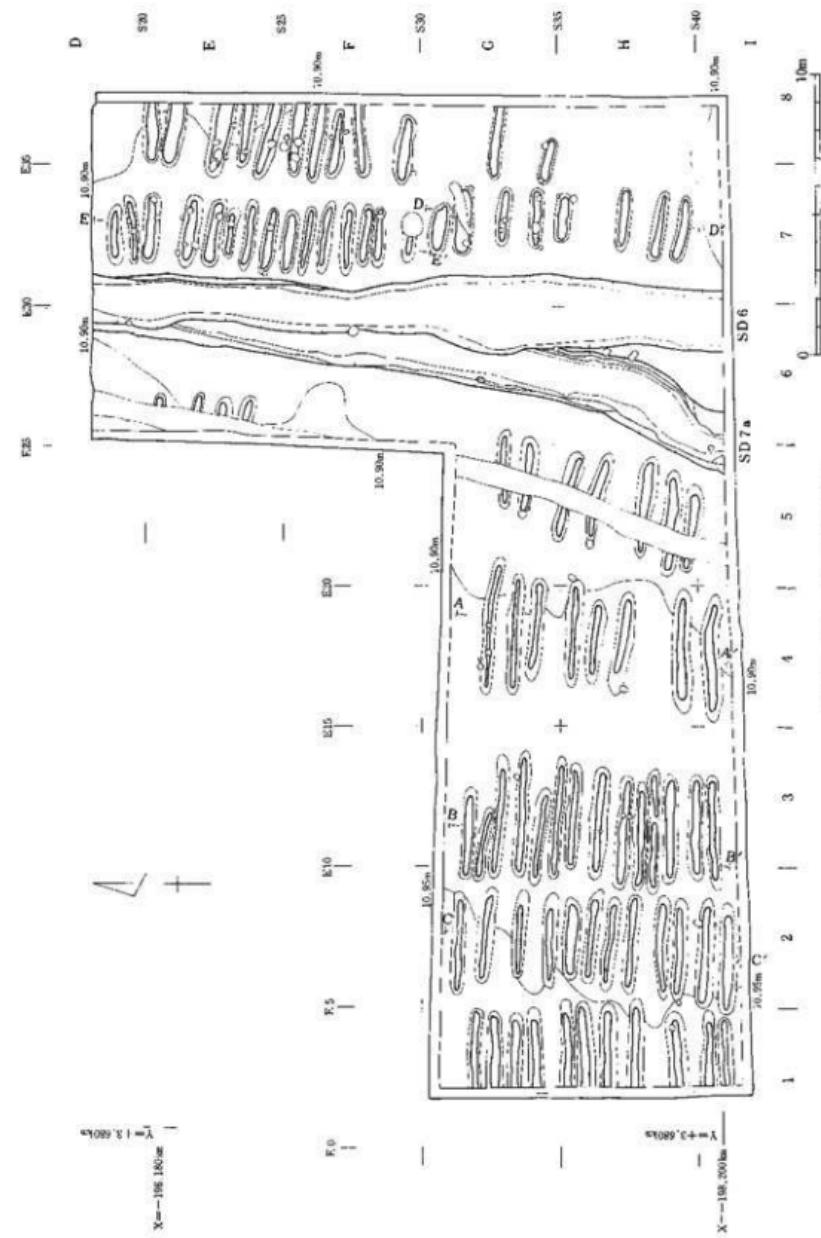
A群：溝跡の西側にあり、最も西にある1群で東端をそろえており、方向はN-88°~91°-Eでほぼ東西方向である。歯が3~4列ごとにまとまりがあり、さらに3群に細分できる。それぞれ歯の心心間隔は70~80cm前後が多く、下端の最大幅も50~60cm前後が多い。歯と歯の間の凹んでいる部分からの歯の高さは5cmのものが多い。全長は西にさらに延びるため不明である。

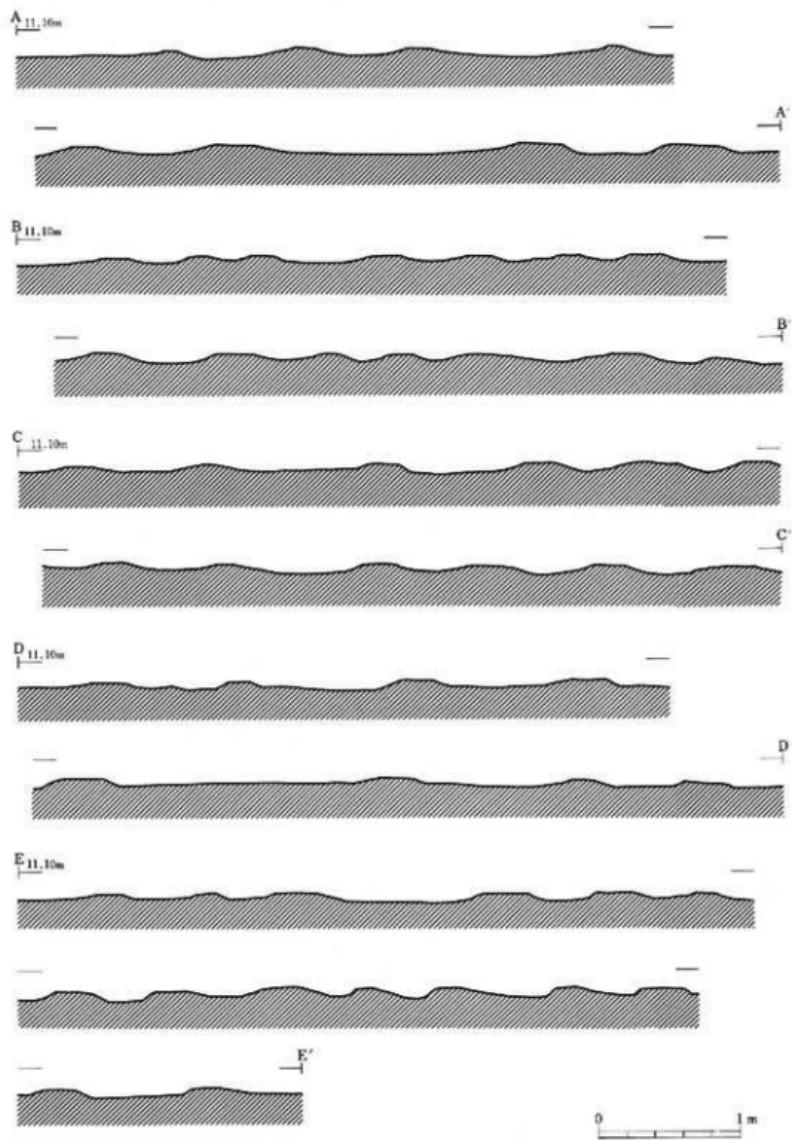
B群：溝跡の西側にあり、西から2列目の1群で西端で若干乱れるものの東端をそろえている。方向はN-90°~97.5°-Eで若干南に振れている。歯が3~5ごとにまとまりがあり、さらに3つの群に細分できる。それぞれ歯の心心間隔はばらつきが多く、下端の最大幅は50~60cm前後が多い。歯の高さは4~5cmのものが多い。全長は3.5m前後が多い。

C群：溝跡の西側にあり、西から3列目の1群で西端、東端ともに乱れている。方向はN-87°~101°-Eでばらつきがある。歯の形状、間隔などからさらに2群に細分できる。それぞれ歯の心心間隔は50~60cm前後が多く、下端の最大幅は50cm前後が多い。歯の高さは4~5cmのものが多く、全長は4m前後が多い。

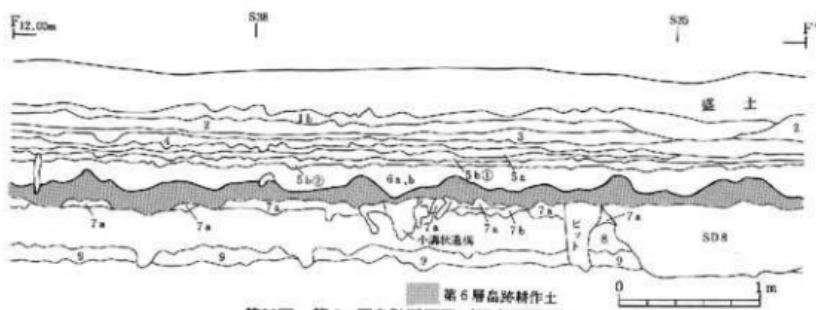
D群：溝跡の西側にあり、西から4列目の1群で西端、東端ともに多少乱れるがおおよそ端を

第26图 第60层上面建模全图

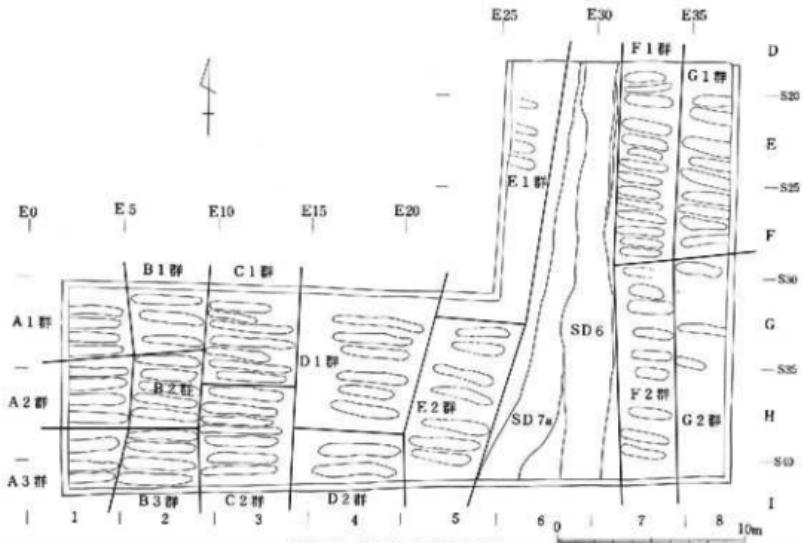




第29図 第6c層縦断面図



第30図 第6c層畠跡断面図(調査区西壁)



第31図 第6c層畠跡配置図

そろえている。方向はN-89°～101°-Eで、若干南側にふれる。畠の方向、間隔などからさらに2群に細分できる。それぞれの畠の心心間隔はばらつきがあり、下端の最大幅は50～60cm前後が多い。畠の高さは5cm程度で、全長は3～4m前後が多い。

**E群：**溝跡の西側にあり、西から5列目の1群で、西端、東端ともに多少乱れるがおおよそ端をそろえている。方向はN-92°～108°-Eでばらつきがある。ほとんど検出できなかった北側とある程度まとまった南側の2群に分けた。それぞれの畠の心心間隔はばらつきがあり、下端の最大幅もばらつきがある。畠の高さは5cm程度で、全長は3m前後が多い。

第6表 第6c層溝跡歯計測表

	方 向	歯の上端幅(cm)	歯の下端幅(cm)	長さ(cm)	歯の心心間隔(cm)	歯の高さ(cm)
A 1群	N-88°~91°-E (N-89.7°-E)	23 ~ 31 (27.5)	49 ~ 59 (53.3)	2.7 ~	70 ~ 74 (72.3)	2.9 ~ 4.7 (3.9)
A 2群	N-87°~91°-E (N-89.3°-E)	23 ~ 31 (26.0)	52 ~ 62 (56.5)	3.1 ~	62 ~ 93 (75.0)	3.7 ~ 8.3 (5.2)
A 3群	N-86°~90°-E (N-88.4°-E)	20 ~ 30 (25.7)	52 ~ 70 (61.0)	2.4 ~	60 ~ 110 (85.0)	5.3 ~ 6.0 (5.6)
B 1群	N-91°~97.5°-E (N-93.1°-E)	19 ~ 23 (20.3)	46 ~ 61 (52.3)	3.2 ~ 3.7	92 ~ 123 (107.5)	3.8 ~ 6.3 (4.9)
B 2群	N-91°~97°-E (N-93.3°-E)	18 ~ 37 (25.6)	45 ~ 61 (52.6)	2.9 ~ 3.5	65 ~ 85 (74.3)	4.3 ~ 6.6 (5.6)
B 3群	N-90°~93°-E (N-91.3°-E)	23 ~ 31 (27.5)	54 ~ 64 (57.3)	3.6 ~ 4.0	53 ~ 91 (73.3)	4.8 ~ 6.7 (5.4)
C 1群	N-93°~101°-E (N-95.3°-E)	18 ~ 26 (20.9)	41 ~ 52 (48.6)	2.6 ~ 4.5	41 ~ 67 (63.2)	3.5 ~ 5.1 (4.5)
C 2群	N-87°~95°-E (N-91.7°-E)	20 ~ 34 (24.9)	47 ~ 63 (53.9)	3.8 ~ 4.4	50 ~ 92 (53.9)	3.7 ~ 5.1 (4.3)
D 1群	N-93°~101°-E (N-96.5°-E)	12 ~ 26 (19.3)	47 ~ 59 (54.3)	3.0 ~ 4.9	69 ~ 144 (94.0)	4.6 ~ 6.6 (5.2)
D 2群	N-89°~92°-E (N-90.5°-E)	32 ~ 33 (32.5)	63 ~ 69 (66.0)	4.4 ~ 4.5	116 (116.0)	3.3 ~ 4.3 (3.8)
E 1群	N-96°~102°-E (N-99.3°-E)	19 ~ 27 (23.3)	38 ~ 59 (47.8)	0.9 ~	84 ~ 133 (103.3)	3.2 ~ 4.1 (3.7)
E 2群	N-92°~108°-E (N-98.7°-E)	19 ~ 31 (27.0)	47 ~ 71 (61.6)	2.8 ~ 3.7	70 ~ 106 (107.2)	4.8 ~ 7.5 (6.8)
F 1群	N-86°~102°-E (N-97.1°-E)	14 ~ 36 (22.0)	22 ~ 68 (48.9)	1.8 ~ 2.8	56 ~ 144 (72.8)	2.5 ~ 5.3 (4.0)
F 2群	N-93°~101°-E (N-97°-E)	18 ~ 48 (30.1)	48 ~ 70 (56.6)	1.7 ~ 2.6	80 ~ 210 (121.0)	1.0 ~ 4.3 (2.9)
G 1群	N-84°~102°-E (N-97.4°-E)	22 ~ 39 (34.5)	47 ~ 70 (59.3)	2.2 ~	70 ~ 163 (91.6)	3.0 ~ 4.5 (4.1)
G 2群	N-95°~105°-E (N-100°-E)	29 ~ 33 (31.0)	48 ~ 68 (55.3)	1.7 ~	190 ~ 320 (225.0)	2.1 ~ 2.6 (2.4)

( ) は平均値

F群：溝跡の東側にあり、東から2列目の1群である。方向はN-86°~102°-Eでばらつきがあり多少乱れているが、おおよそ東西ともに端をそろえている。北側の1群とまばらに検出された南側の1群に細分できる。F 1群のそれぞれの歯の心心間隔は70cm前後が多く、下端の最大幅も50cm前後が多い。歯の高さは4cm前後で、全長はA-E群に比べて短く2m前後が多い。

G群：溝跡の東側にあり、最も東にある1群である。方向はN-84°~105°-Eでばらつきがあり、多少乱れているがおおよそ西端をそろえている。ある程度まとまって検出された北側の1群と、まばらに検出された南側の1群に細分できる。G 1群のそれぞれの歯の心心間隔は70~80cm前後が多く、下端の最大幅も50cm前後が多い。歯の高さは3~4cm前後で、全長はA-E群に比べて短く2m前後が多い。

〈墓上面の標高と傾斜〉墓上面の標高は10.96~10.83mの間である。調査区の西から東にかけて非常にゆるやかに傾斜する。しかし、溝跡付近は、墓の設立した区域よりも若干低くなっている。

〈出土遺物〉第6c層溝跡からは土師器、須恵器が出土した。土師器はロクロ使用のものが11点、ロクロ未使用のものが14点、成形不明のものが9点あり、須恵器は25点ある。いずれも小破片であるが、D-10ロクロ土師器壺(第36図1、写真81-7)、E-9須恵器高台付壺(第36図2、写真81-8)、E-10須恵器壺(第36図3、写真81-6)の3点が図化できた。

D-10クロ土師器壺は調査区南壁から出土したもので(写真51)、底部の切

り離しが回転糸切りで手持ちヘラケズリ調整が施されている。体部外面はロクロ目が明瞭で下面を中心に手持ちヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理がなされ全面にミガキが施され、底部はヘラミガキが放射状となっている。

E-9須恵器高台付环は、切り離しが不明で回転ヘラ削り調整が施されている。底径に対し器高が低く、口縁は直線的に外傾する。割れ口には研磨痕が観察できる。

E-10須恵器壺は体部破片で、外面が平行タタキ、内面が青海波文である。

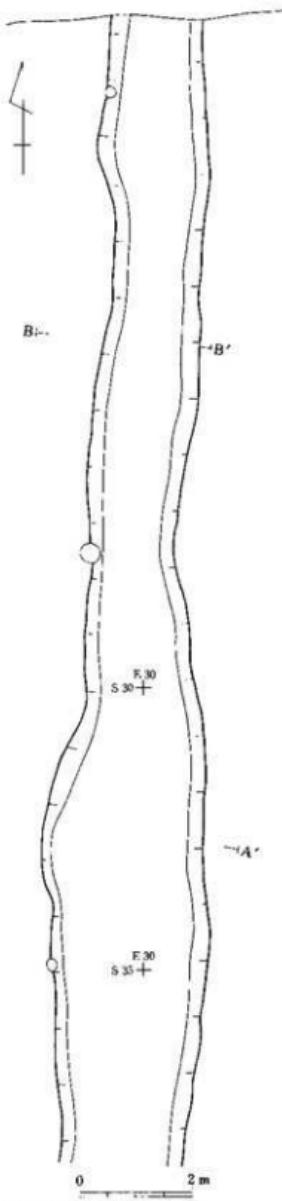
## (2) 溝 跡

### S D 6 溝跡 (第32・35図、写真44)

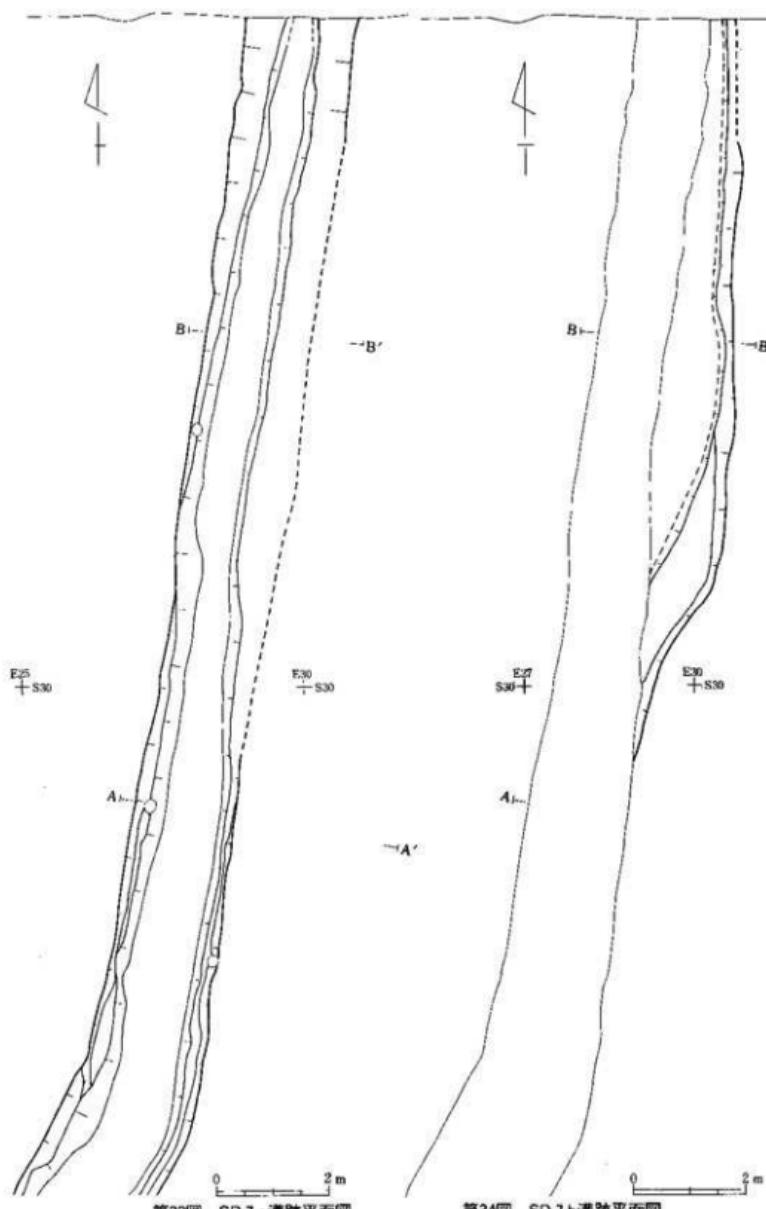
〈遺構の状況〉IV区西側E30ライン上、D～I-6～7グリットに位置する。N-1°-Eの方向にほぼ直線的に走行する。上端幅は285～150cm、下端幅は242～104cmで、深さは検出面より5～10cmである。検出面からの深さは北にいくほど浅くなるが、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、暗褐色シルトに砂粒を多く含んでおり、自然堆積である。重複関係はS D 7 a・7 b溝跡を切っている。

〈出土遺物〉S D 6溝跡の堆積土中から土師器、須恵器<sup>A</sup>が出土している。破片資料は、ロクロ土師器が1点、ロクロ不使用の土師器が7点、土師器の成形不明のものが6点、須恵器が11点である。C-3土師器壺(第36図5、写真81-9)、E-6須恵器壺(第36図4、写真81-11)、E-11須恵器壺(第36図6、写真81-13)の3点が図化できた。

C-3土師器壺は底部は平底で、体部は丸味をもって立ちあがり、口縁部はやや内湾している。ロクロ未使用で、外面の口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてケズリ調整が施されている。内面は黒色処理のちミガキ

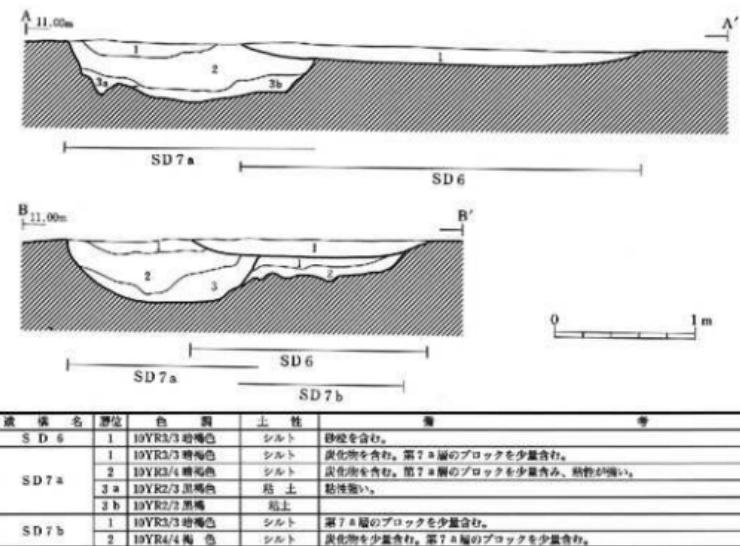


第32図 SD 6 溝跡平面図



第33図 SD 7a溝跡平面図

第34図 SD 7b溝跡平面図



第35図 SD 6 · 7a · 7b溝跡断面図

が全面に施されている。

E-6須恵器環は底部から体部下端の資料だが、切り離しは不明で底部全面と体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。

E-11須恵器甕は体部の破片資料で、外面は平行タタキである。

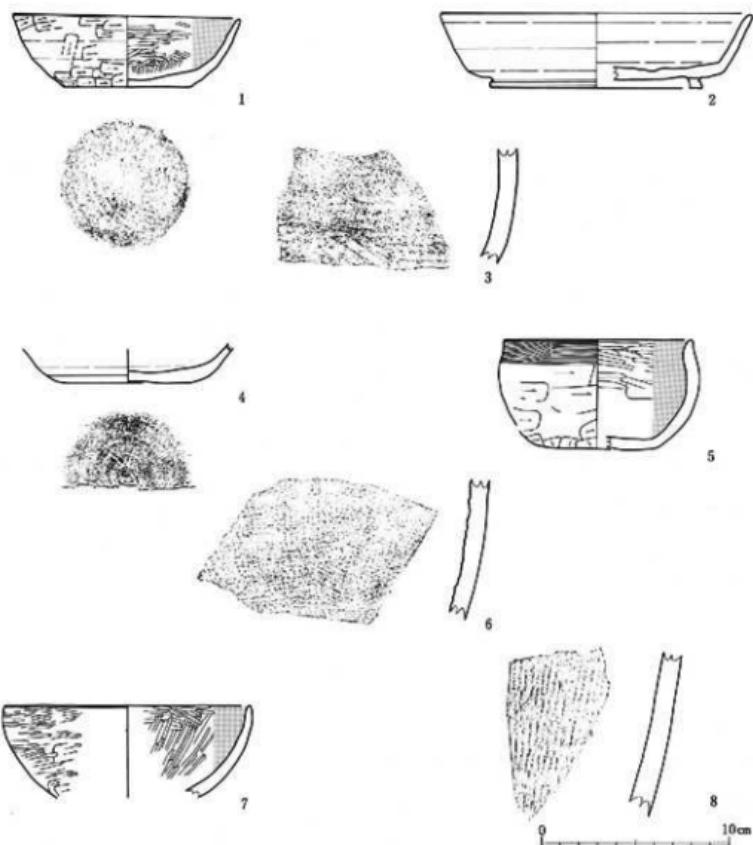
#### SD 7a溝跡（第33・36図、写真49・50）

〈遺構の状況〉 IV区西側、D-I-6~7グリットに位置する。遺構確認段階では堆積土が似ていたため、SD 7a溝跡とSD 7b溝跡を1条の溝跡として認定したが、断面観察用ベルトで確認したところ2条の溝跡の切り合いと判明した。そこで、新しい溝跡をSD 7a溝跡、古い溝跡をSD 7b溝跡とした。したがって、SD 7b溝跡と切り合っている部分のSD 7a溝跡の上端（東側）は推定したものを点線で示した。

SD 7a溝跡は、N-7°-Eの方向にほぼ直線的に走行するが、S40ライン付近で西側に屈曲する。上端幅は165~228cm、下端幅は54~126cmで、深さは検出面より28~63cmである。検出面からの深さは北にいくほど深くなる。底面はほぼ平坦であるが、S25ラインより北で1段低くなる。底面の標高は北端が南端よりも28cm低くなり、南から北へ傾斜していたと考えられる。堆積土は4層で、1層は暗褐色シルトに炭化物を含んでいるが、北側ではSD 6溝跡に1層が切られている。2層は暗褐色シルトに炭化物を含んでおり、1層より粘性は強い。1・2層と

もに7a層のブロックを少量含む。3層は黒褐色粘土で、7a層のブロックを多く含む3a層と少量含む3b層に分層できる。SD 6溝跡に切られ、SD 7b溝跡を切っている。

〈出土遺物〉 SD 7a溝跡とSD 7b溝跡の堆積土中から、弥生土器、土師器、須恵器が出土



番号	出土地名	地名	基	作	種	形	縦	横	厚	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	材	質	内	外	施	器	可
1	D-15	6c層島跡	耕作土	土師器	片	—	32.2	6.8	3.6	48.0	42.0	1.5	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:ミオカ、無色釉	6c-7	
2	E-9	6c層島跡	耕作土	土師器	高円形	28.2	11.4	4.6	—	—	—	1.5	土	土	斜	リニアテラコッタ	割れに付銀線あり	6c-8	
3	E-10	6c層島跡	耕作土	土師器	片	—	—	—	—	—	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:無	6c-9	
4	E-6	SD 6	1	須恵器	片	—	—	6.5	3.9	底径1/2	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:リニアテラコッタ	6c-10	
5	C-3	SD 6	1	土師器	片	—	36.0	6.5	5.0	3/4	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:ミオカ、無色釉	6c-11	
6	H-11	SD 6	1	須恵器	片	—	—	—	—	—	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:リニアテラコッタ	6c-12	
7	C-4	SD 7a	3b	土師器	片	—	63.2	—	4.9	—	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:ミオカ、無色釉	6c-13	
8	E-12	SD 7a	3b	須恵器	片	—	—	—	—	—	—	—	土	土	斜	リニアテラコッタ	ローラー:ア	6c-14	

第36図 第6c層島跡・SD 6・7a溝跡出土遺物

している。内訳は、弥生土器が2点、ロクロ土師器が2点、ロクロ未使用の土師器が2点、土師器の成形不明のものが3点、須恵器が6点である。いずれも小破片が多いが、C-4土師器壺（第36図7、写真81-10）とE-12須恵器壺（第36図8、写真81-14）の2点が図化できた。これは2点ともSD7a溝跡出土のものである。

C-4土師器壺は底部を欠いた資料で、口縁部はやや内湾している。ロクロ未使用で、外表面がヘラケズリ後全面にミガキが施されている。内面は黒色処理のちミガキが全面に施されている。底部は平底で、口縁部はやや内湾している。

E-11須恵器壺は体部の破片資料で、外表面が格子状のタタキで、内面は青海波文である。

#### SD7b溝跡（第34・36図、写真49）

〈遺構の状況〉IV区北側、D～F-6～7グリッドに位置する。SD7b溝跡はほとんどがSD7a溝跡に切られているために全容は不明だが、N-7.5-Eの方向に走行し、S20とS30ラインの間で西側に屈曲する。上端幅はおよそ140cm以上、下端幅は90cm以上で、深さは検出面より20～30cm程度である。底面には浅い凹凸があるが、傾斜は不明である。堆積土は2層で、1層は暗褐色シルトで、2層は暗褐色シルトに炭化物を含んでおり、1・2層ともに7a層のブロックを少量含む。重複関係を見ると、SD6溝跡、SD7b溝跡に切られている。

〈出土遺物〉SD7b溝跡はSD7a溝跡と一緒に掘り込んでしまったため、SD7b溝跡からの出土遺物の数量は正確にはつかめない。SD7a溝跡との総数は前述のとおりで、確実にSD7b溝跡から出土した遺物で図化し得たものはない。

### （3） 遺構の変遷と年代

〈遺構の変遷〉第6c層では、第6c層畠跡と溝3条が検出され、溝3条には重複関係がある。新しい時期からならべるとSD6溝跡、SD7a溝跡、SD7b溝跡の順になる。この3条の溝跡は第6c層畠跡と重複関係がなく、また3条の溝跡がある区域は第6c層畠跡がつくられていない。第6c層畠跡はこれらの溝跡を意識してつくられたものと考えることができる。3条の溝とも第6c層畠跡に伴う溝跡の可能性がある。検出された第6c層畠跡の歴史は、一番最後に設立されたものと考えられるので、一番新しい溝に伴うものであることが推定できる。したがって、一番新しい時期の溝跡であるSD6溝跡と第6c層畠跡が同時期となるが、前述のように第6c層畠跡がSD7a溝跡・SD7b溝跡の区域を意識して設立したと考えられることから、SD6溝跡より古い時期のSD7a溝跡・SD7b溝跡も畠跡に伴っていたものと考えられる。

以上の点をまとめると以下のようになる。



〈所属年代〉 所属年代を示す遺物は第36図に掲載した遺物のうち5点である。第6c層畠跡の耕作土から出土したD-10ロクロ土師器・E-9須恵器と、SD 6溝跡から出土したC-3土師器・E-9須恵器、SD 7a溝跡から出土したC-4土師器である。

D-10ロクロ土師器は、底部および体部に再調整を加えていること、底径／口径も0.56を計り底径と口径の比も比較的大きいことが特徴である。再調整の点からみると、この土器はロクロ使用のものと未使用的土師器が共存し、回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリしたもののが比較的多い「多賀城B群土器」と、体部下端や底部に回転ヘラケズリが施されたものが比較的多いのが特徴である「多賀城C群土器」に属するもので、糸切り無調整のものが圧倒的に多い「多賀城D群土器」より古い要素を持つ(白鳥:1980)。また、D-10ロクロ土師器に類似したものとして大河原町台ノ山遺跡第8号住居床面出土ものが挙げられる(阿部他:1981)。この土師器は底径／口径は0.59で、底部切り離しが回転糸切りで、底部および体部に手持ちヘラケズリ調整が施される。台ノ山遺跡のものは、再調整があるものとないものが組み合うタイプで底径／口径が0.46に集中する蔦王町東山遺跡土器のものより古く(真山:1981)、底部が回転ヘラケズリされるかヘラ切りによって切り離され、底径／口径が0.6に集中する亘理町宮前遺跡第20号住居のものより新しいとされている(丹羽:1983)。また、内面底部のミガキの状況をみると、宮前遺跡第20号住居のものは井桁状であり、東山遺跡土器のものは放射状になる。さらに外面のロクロ目をみると宮前遺跡のものは弱く、東山遺跡のものは明瞭となる。どちらの要素もD-10ロクロ土師器は宮前遺跡のものとは相違があり、どちらかと言えば東山遺跡のものに近い。東山遺跡土器のものは9世紀中葉と位置付けられ、宮前遺跡第20号住居のものは8世紀末から9世紀初頭に位置付けられている。以上の点を考えると、D-10ロクロ土師器は8世紀末から9世紀初頭より新しくなる要素をもっており、9世紀中葉に近い年代が考えられるので9世紀前葉の年代が考えられる。

E-9 須恵器高台付坏は口径と底径に関しては残存が1/4であるため誤差もあるが、底径に対して器高が低く、台部が短く坏部が皿状をなしており、底部は回転ヘラケズリ調整が施されている。台部が短く坏部が皿状をなし底部の調整が回転ヘラケズリのものは利府町観沢窯跡B地区8・9・10窯跡に見られ、E-9 須恵器高台付坏に近似しているものもある。観沢窯跡B地区8・9・10窯跡は8世紀中葉に位置付けられており（真山：1987）、E-9 須恵器もそのころの年代が考えられる。

第6c層畠跡に伴うと考えられる溝跡の堆積土からは、SD6 溝跡からC-3 土師器坏が、SD7a 溝跡からC-4 土師器がそれぞれ出土している。いずれも器形、調整から国分寺下層式に比定され（氏家：1967）、8世紀代に位置付けられている。国分寺下層式でもC-3 土師器は平底で新しい要素をもっていることから8世紀代でも後半の可能性がある。

補足資料として破片資料をみると、土師器ではロクロ使用のものと未使用のものは混在しているが未使用のものがやや多く、溝跡の堆積土の土師器はロクロ未使用のものが大部分である。

出土土器から以上のような年代が考えられたが、これらの土器は畠跡という遺構の性格上、下層の遺物が畠の耕作によって巻き上げられているため、畠跡と溝跡が同時存在としても、一括性のある土器群とは言えない。また、前述のとおり溝跡に3時期の変遷がみられることから、第6c層畠跡も一時的なものではなく、ある程度の期間をもったものと考えられる。以上の点から第6c層畠跡の年代を考えると、下限は9世紀前葉と考えられる。上限は後述する第7a層上面検出のSB4建物跡出土の遺物（E-13須恵器蓋）の年代より新しいと考えられるので、8世紀後葉としておきたい。

## 8 第7a層

第7a層上面の遺構は、掘立柱建物跡2棟（SB3・4建物跡）、溝跡4条（SD8・9・10・11溝跡）、土坑3基（SK11・12・13）、第7a層小溝状遺構群、ピットである。

### （1）掘立柱建物跡

SB3建物跡（第39図、写真57）

〈遺構の状況〉III区南西部、I-1～2グリッドに位置する。東西方向に柱穴を4個確認したのみで、実際に建物跡になるかどうかは不明であるが、一応建物跡として報告しておく。規模は東西方向に3間以上、534cm以上の大きさを計り、柱列の方向はN-86°-Eである。柱穴掘り方は方形ないし楕円形で一辺が40cmまたは長軸37～44cm、短軸33～40cmで、深さは検出面より約35cmある。柱痕跡は、掘り方を一段掘り下げて検出したが、径が9～12cm（平均10cm）の円形である。柱痕跡の堆積土はすべて黒褐色シルトで、掘り方の堆積土は黒褐色シルトと暗褐色

シルトの互層をなしていると考えられ、抜き取り痕は確認されない。重複関係はない。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

#### S B 4 建物跡 (第39・40図、写真55・56)

IV区南半部、G～H-7～8グリットに位置する。東西2間×南北3間の掘立柱建物跡で、方向は西側柱列でN-4°-Eである。建物の規模は東西方向で総長501cm、南北方向で総長403cmを計り、柱間寸法は東西方向で191～212cm(平均199.8cm)、南北方向で157～184cm(平均166.5cm)である。柱穴掘り方は方形ないし梢円形で、長軸(長辺)が49～65cm、短軸(短辺)が40～52cmで、深さは検出面より20～44cmある。柱痕跡は、掘り方を一段掘り下げて検出したが、径が16～20cm(平均18.3cm)の円形である。柱痕跡の堆積土は柱穴ごとに若干の相違が認められ、黒褐色・灰褐色・暗褐色・黄褐色のシルトの単層となる。掘り方はすべて黒褐色シルトと暗褐色シルトの互層をなしていると考えられ、抜き取り痕は確認されない。掘り方の状況はS B 3 建物跡と非常に似ている。SD10溝跡、SD9溝跡、小溝状遺構群(小溝⑩、⑪、⑫)を切っており、ピットに切られている。

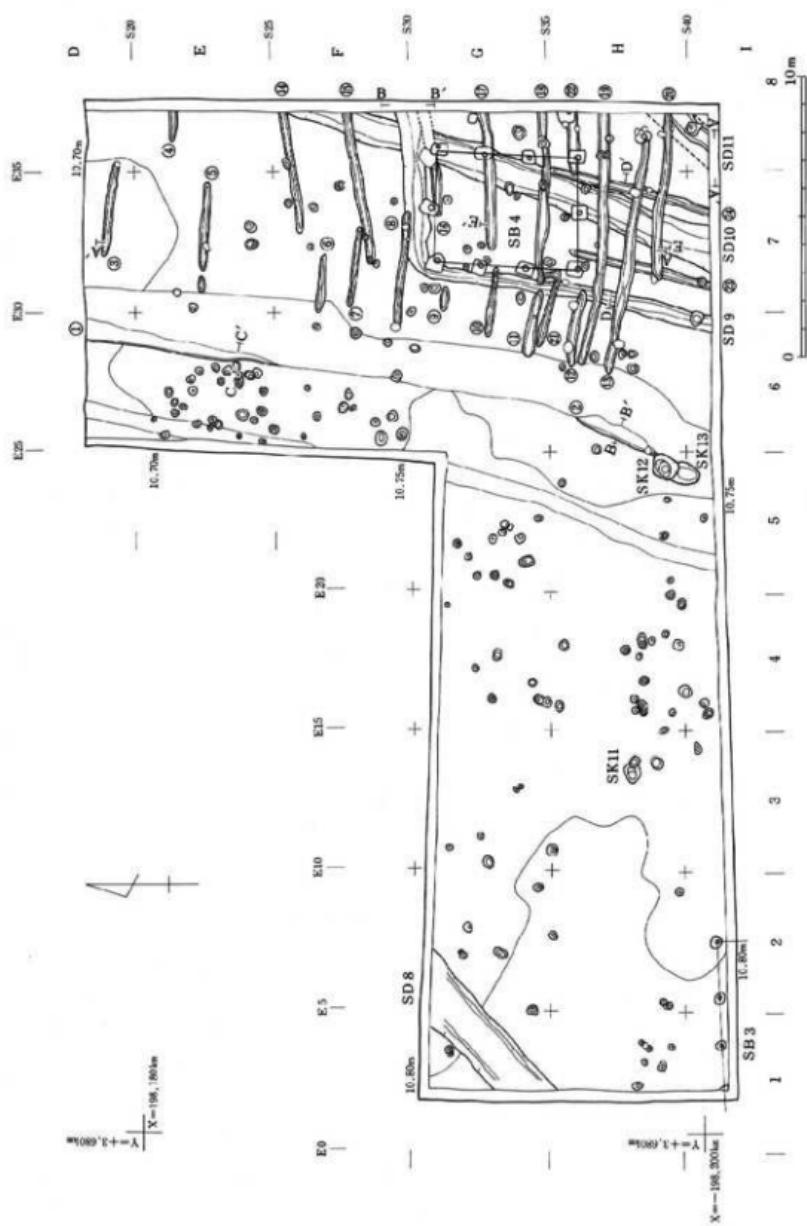
〈出土遺物〉 柱穴(S B 4-P 5)掘り方よりE-13須恵器蓋(第37図、写真81-12)とロクロ未使用の土師器壺底部破片が出土した。

E-13須恵器蓋はリング状に近いつまみを持ち、天井部は平坦で、口縁部はほとんど欠損しているものの、直角に近く折れ曲がるものと推定できる。他の柱穴から出土した遺物はなかった。

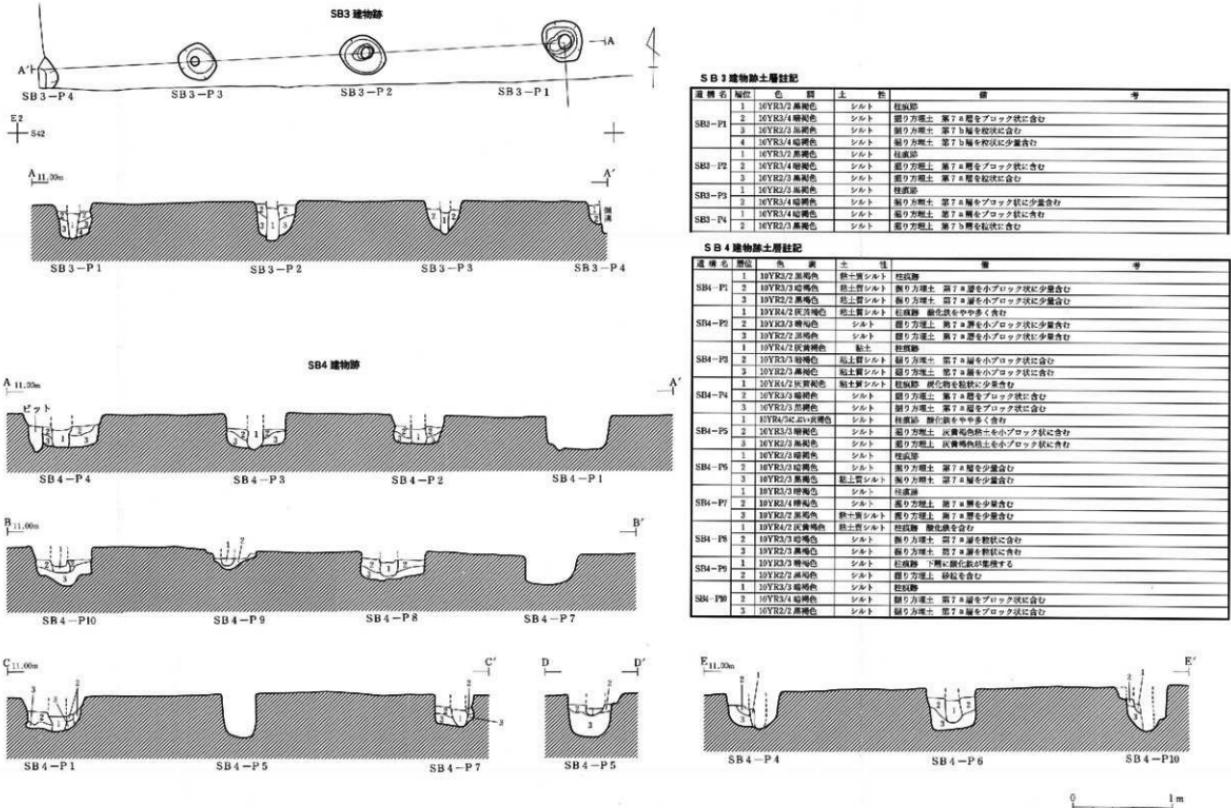


施号	登錄番号	遺物名	層位	種別	断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	遺存度
	E-13	SB4-P5	2層	須恵器蓋	蓋	12.5~	—	1.8~	3/4
1	外	蓋	内	蓋	調査	—	—	—	写真回版
	フタミ: リング狀天井部: ロクロ			ロクロ					81-12

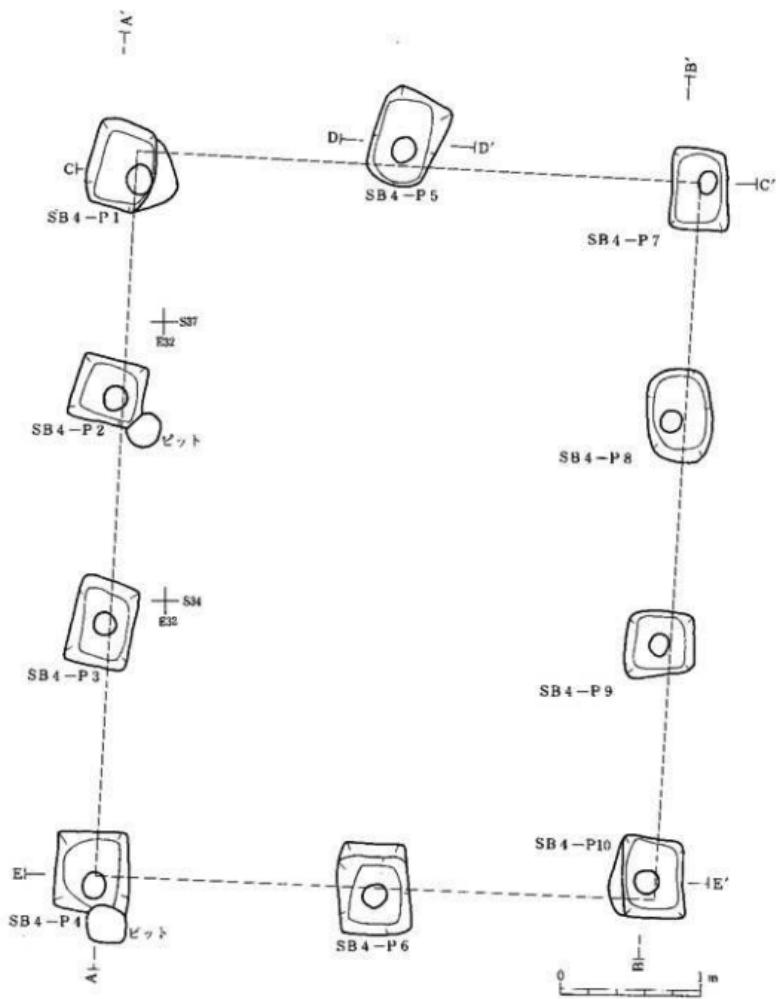
第37図 SB 4 建物跡出土遺物



第38圖 第7a層上面地塊全體圖



第39図 SB3 建物跡平面図・断面図、SB4 建物跡断面図



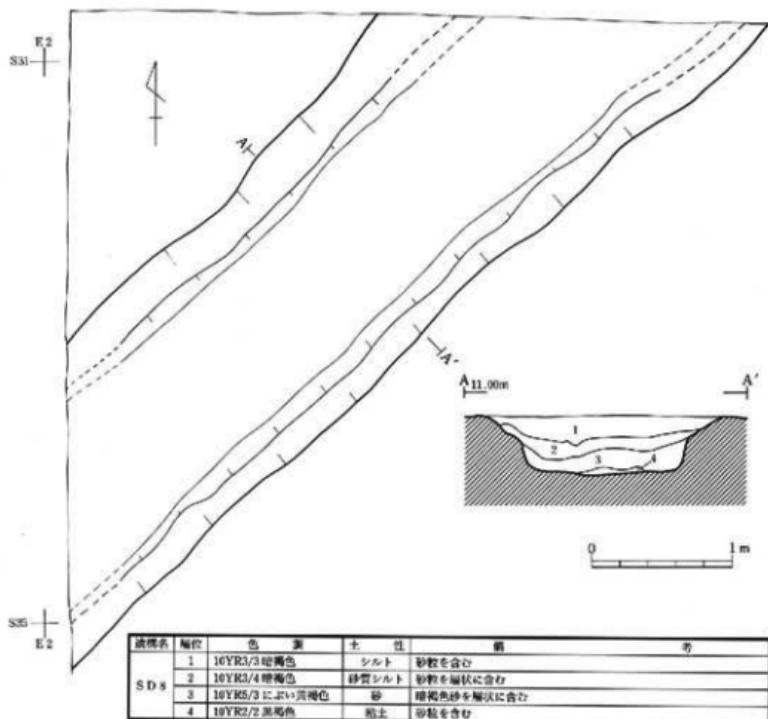
第40図 SB 4 建物跡平面図

## (2) 溝跡

### S D 8 溝跡 (第41図、写真68・69)

〈遺構の状況〉 III区北西端部、G-1~2グリットに位置する。N-46°-Eの方向にほぼ直線的に走行する。上端幅は約165~190cm、下端幅は約96~106cmで、深さは検出面より約36~43cmである。断面形は逆台形に近く、壁は底面近くでは急に立ち上がり、上端に近づくとゆるやかになる。底面の凹凸はほとんどなくほぼ平坦である。底面は南西部部分が北東部分よりも4cm低く、北東から南西へわずかに傾斜している。堆積土は4層に分けられ、1層が暗褐色シルト、2層が暗褐色砂質シルト、3層がにぶい黄褐色砂、4層が黒褐色粘土となっており、いずれの層も砂粒を多く含み、自然堆積と考えられる。重複関係はない。

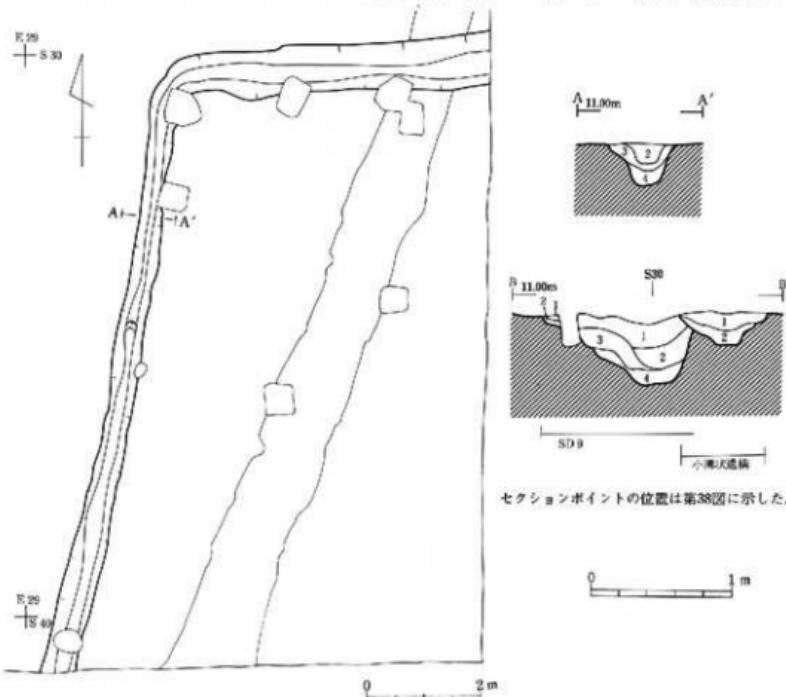
〈出土遺物〉 出土遺物はない。



第41図 SD 8 溝跡平面図・断面図

SD 9溝跡 (第42図、写真70~72)

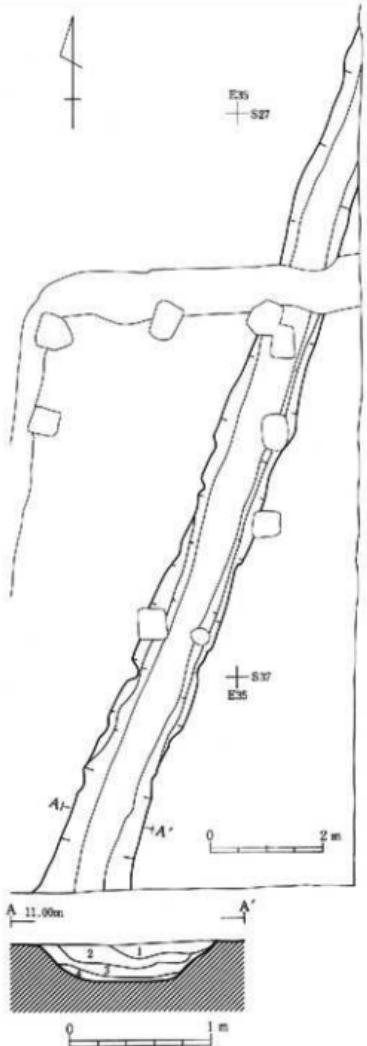
〈遺構の状況〉IV区南西部、G~I-7~8グリットに位置する。N-11°-Eの方向にはほぼ直線的に走る溝跡が、S 30-E 30の交点付近で東方向に77°曲り、全体的にL字状の形態を持つ。南北方向の上端幅は約37~61cm、下端幅は約8~30cmで、東西方向の上端幅は約71~100cm、下端幅は約12~30cmである。深さは南北方向が検出面より約30cm前後で、中央部分に段差があり、南側がさらに約4cm低くなる。東西方向の深さは検出面より約45cm前後である。底面はほぼ一定でほとんど傾斜はない。断面形はU字形で、南北方向が東側で、東西方向が北側で壁が急に立ち上がる。底面の凹凸はほとんどなく、ゆるやかに凹む。堆積土は4層に分けられ、1層が暗褐色粘土質シルト、2層がにい黄褐色粘土質シルト、3層が明黄褐色砂、4層が灰黄褐色と黄褐色が混在する粘土となっており、南北方向の溝には1層がないが東西、南北ともに



セクションポイントの位置は第38図に示した。

溝跡名	層位	色調	土性	備考	
				1	2
SD 9	1	10YR2/3暗褐色	粘土質シルト		
	2	10YR4/3.1:にい黄褐色	粘土質シルト		
	3	10YR2/6明黄褐色	砂	第3層のブロックが少量埋入する	
	4	10YR4/2灰黃褐色	粘土	にい黄褐色粘土が混入する	

第42図 SD 9 溝跡平面図・断面図



は同じである。SD10溝跡を切っており、SB4建物跡、小溝状遺構群(小溝⑧、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮)、ピットに切られている。

〈出土遺物〉遺物は層中から弥生土器の小破片が1点出土しているのみである。

#### SD10溝跡 (第43図、写真73・74)

〈遺構の状況〉IV区南東部、F～I-7～8グリットに位置する。N-20°-Eの方向にほぼ直線的に走行する。上端幅は約102～150cm、下端幅は約48～64cmで、深さは検出面より約20～29cmである。底面には部分的にわずかな凹凸があるもののほぼ平坦で、底面はほぼ一定でほとんど傾斜はない。堆積土は4層に分けられ、1層が褐色シルト、2層が黒褐色粘土質シルト、3層がにぶい黄褐色シルト、4層が黒褐色粘土質シルトとなっている。1～2層は炭化物を多く含み、3～4層は下層のブロックを多く含むことから人為堆積と考えられる。SB4建物跡、SD9溝跡、小溝状遺構群、ピットに切られている。

〈出土遺物〉出土遺物は、堆積土中よりロクロ未使用の土器器壺の底部小破片が1点ある。

#### SD11溝跡 (第44図、写真75・76)

〈遺構の状況〉IV区南東端部、H～I-8グリットに位置する。SD11溝跡の堆積土が第7a層と似ていたために第7a層上面では検出できず、第8a層上面で検出した。壁断面で検査の結果、第7a層上面より掘り込まれたものと判明した。したがって、平面図(第44図)では、

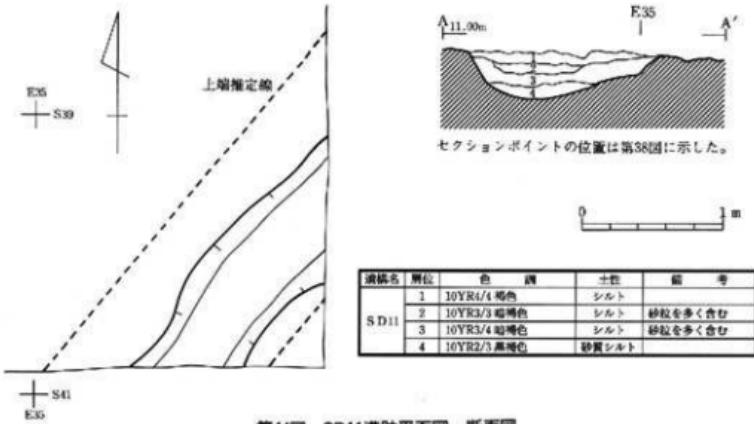
遺構名	層位	色調	土性	寸	
				面	考
SD10	1	10YR4/4褐色	シルト	災化物を粒状に少量含む	
	2	10YR2/3黒褐色	粘土質シルト	災化物を粒状に少量含む	
	3	10YR3/3にぶい黄褐色	シルト	暗褐色土を粒状に含む	
	4	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	第7a層を粒状に含む	

第43図 SD10溝跡平面図・断面図

調査区南壁と東壁において確認された断面における上端を結び、上端推定線とした。SD11溝跡はN-39°Eの方向にほぼ直線的に走る。検出された上端幅は約70~78cm、下端幅は約40~48cmで、深さは検出した面より4~9cmで、本来の上端幅は約110cm、深さは第7a層上面より約30cmになる。底面の比高は、検出された部分が短いので不明な部分があるが、北東が南西より8cm高くなっている。断面形は扁平なU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面の凹凸はほとんどない。堆積土は4層に分けられ、1層が暗褐色シルト、2・3層が暗褐色シルト、4層が黒褐色砂質シルトである。全体的に砂粒が多く含まれており、自然堆積と考えられる。

重複関係を見ると小溝状遺構群（小溝②）、ピットに切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。



第44図 SD11溝跡平面図・断面図

### (3) 土坑

SK11土坑（第45図、写真64）

〈遺構の状況〉 III区中央南側、H-3グリッドに位置する。上端が長辺約70cm、短辺約60cmの不整形で、下端は長軸が約30cm、短軸が約20cmの楕円形である。深さは検出面より約28cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層に分けられ、1層が暗褐色シルト、2層が黒褐色シルトで、褐灰色粘土のブロックを含む。ピットに切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

### S K12土坑 (第45図、写真65・67)

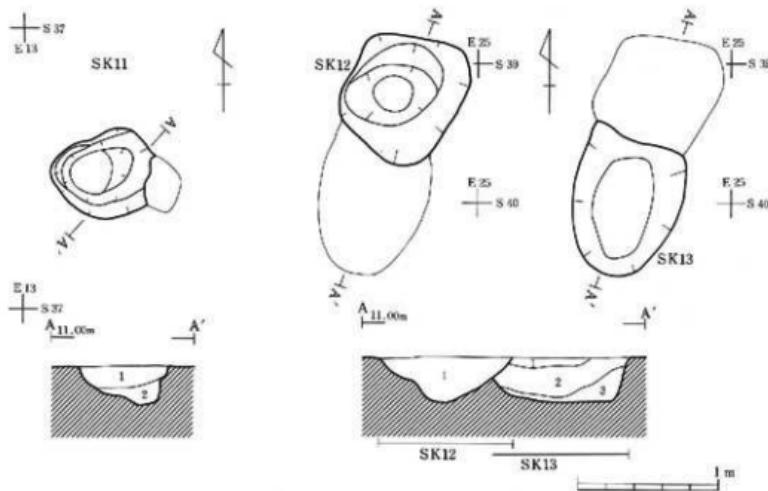
〈遺構の状況〉 III区南東端部、H-5グリットに位置する。上端が長辺約95cm、短辺約80cmの不整方形で、下端は長軸が約29cm、短軸が約26cmの楕円形である。深さは検出面より約35cmである。底面は浅く凹み、壁の立ち上がりはゆるやかである。堆積土は単層で、黒褐色シルトに下層のブロックを含む。S K13土坑に切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

### S K13土坑 (第45図、写真66・67)

〈遺構の状況〉 III区南東端部、I-H-5グリットに位置し、第7a層上面で検出された。上端が長軸100cm以上、短軸78cmの楕円形で、下端は長軸74cm、短軸が40cmを計る。深さは検出面より約30cmである。底面は浅く凹み、壁の立ち上がりは、南側はやや急であるが全体的にゆるやかである。堆積土は3層に分けられ、1層が暗褐色シルト、2層が灰黄褐色粘土質シルトで、3層が黒褐色粘土質シルトで全体的に第7a層のブロックを含む。重複関係は、S K12土坑に切られる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。



遺構名	部位	色 質	土 性	備 考
SK11	1	10YR3/4 黒褐色	シルト	
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	黒褐色粘土を含む
SK12	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	第7a層を柱状に含む
	2	10YR4/4 黒褐色	シルト	第7a層を柱状に含む
SK13	1	10YR4/4 黒褐色	粘土質シルト	第7a層をブロック状に含む
	2	10YR2/2 灰褐色	粘土質シルト	第7a層をブロック状に含む
	3	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	第7a層をブロック状に含む

第45図 SK11・12・13土坑平面図・断面図

#### (4) 小溝状遺構群

##### 第7a層小溝状遺構群（第38・46・47・48図、写真59～63）

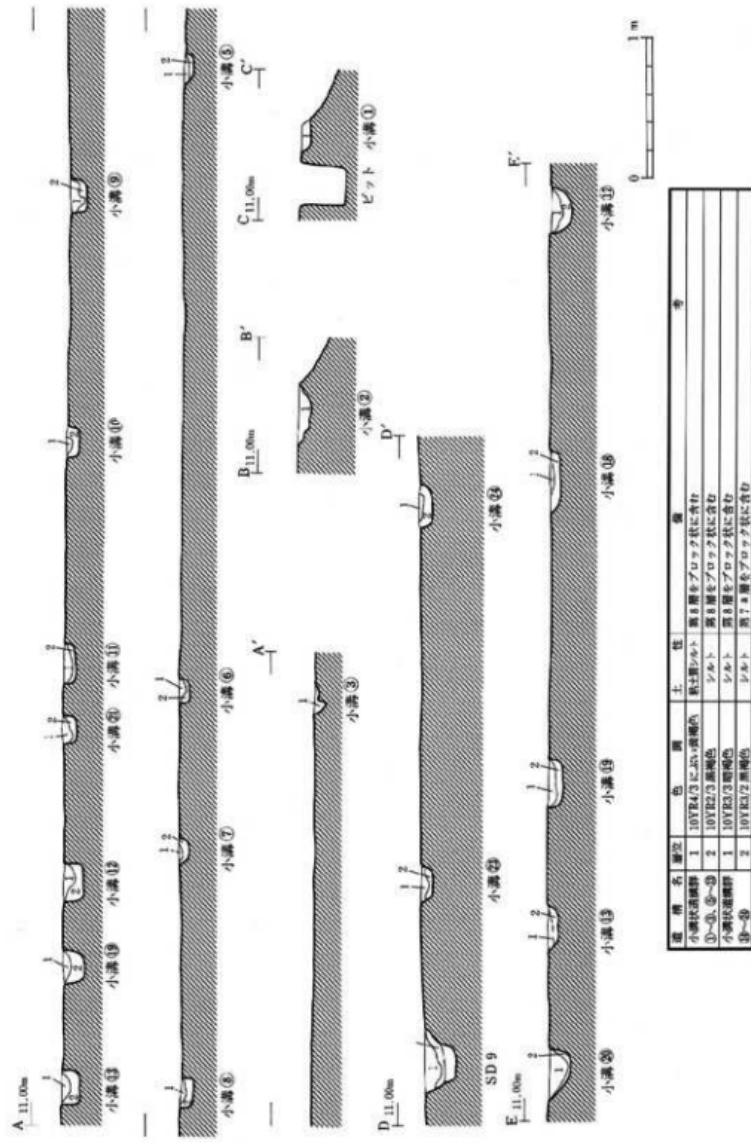
IV区において小溝状遺構が22条検出された。III区においては第6c層畠跡の耕作が深く及んでおり、第7a層が削平を受けたためか検出されなかった。第7a層小溝状遺構群はそれぞれの小溝状遺構の方向の同一性・小溝状遺構間の間隔・第4次調査区との連続性などから3群に分けることができる。

A群：小溝①～⑬の13条から構成される。小溝①及び②の方向は南北方向だが、第4次調査区との連続性からみて同じ群に入れた。A群は、IV区の全域に分布し、方向は小溝①及び②を除くとN-93°～103°-Eを示している。小溝の心心間隔は、小溝④の削平された部分を延長して計測すると、小溝⑤～⑥間が約430cmで、小溝⑥～⑦間が110cmである以外は150～180cm(平均165.6cm)である。小溝それぞれの最大上端幅は東西方向が20～40cm(平均29.0cm)、南北方向が50～70cm(平均62.5cm)である。ただし、第6c層の下面是起伏があったので第7a層上面の遺構を検出する際、第7a層の上部を若干掘り下げて検出しているので、小溝の実際の上端幅は検出面での幅よりも大きいことが調査区壁面から観察できる。小溝④の東壁での断面で観察すると、実際の上端幅は40cmであり、他の小溝も同様のことが推定できよう。深さは検出面より7～18cm(平均10.0cm)で、堆積土は1層または2層で、1層が暗褐色シルト、2層が黒褐色シルトで、どちらも7a層をブロックで含む。底面には耕作の痕跡が左右交互に確認できる(第47図、写真62・63)。耕作痕の平面形は円形・半円形・三日月形が多い。断面形は中央に向かって凹み、V字形やU字形が多く(第48図、写真61)、耕作痕の堆積土はにぶい黄褐色が多くなるが、小溝の堆積土と同じである。

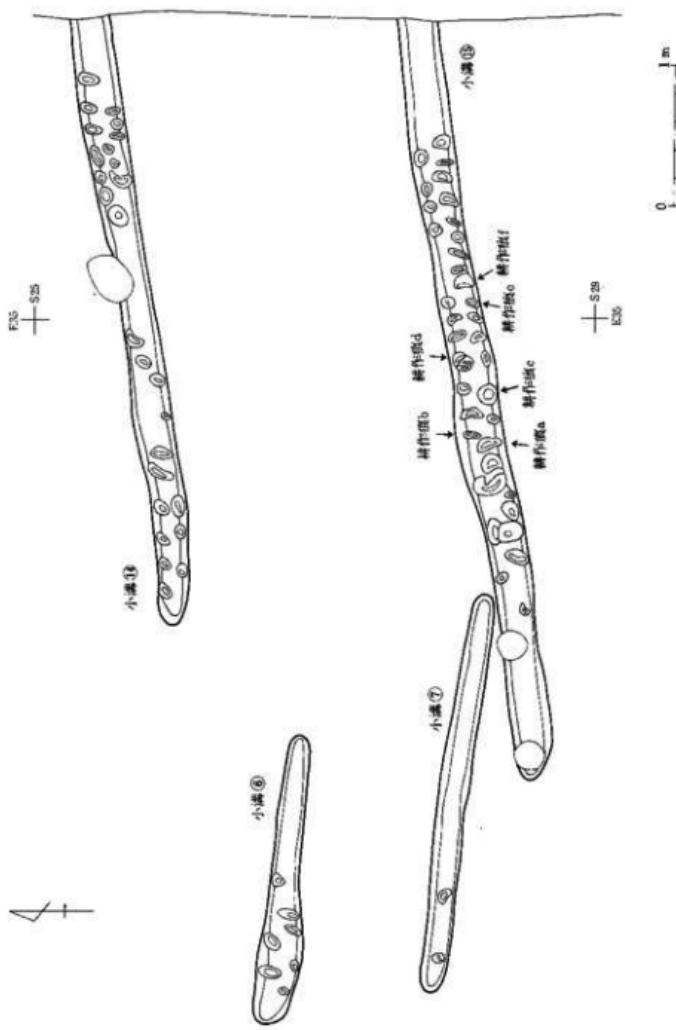
B群：小溝⑭～⑯の7条から構成される。IV区の東半部に分布し、方向はN-81°～95°-Eを示している。小溝の心心間隔は、200～270cm(平均220.0cm)であり、A群より幅広い。小溝それぞれの最大上端幅は28～48cm(平均36.6cm)である。深さは、検出面より5～22cm(平均13.6cm)で、底面には耕作の痕跡が左右交互に確認できる。耕作痕の平面形はA群と同様で円形・半円形・三日月形が多く、断面形は中央に向かって凹み、V字形やU字形が多い。耕作痕の堆積土はにぶい黄褐色が多くなるが、小溝の堆積土と同じである。

これらのA群、B群で検出された耕作痕は、形状から鍬などの農具によって耕作した痕跡であると考えられる。

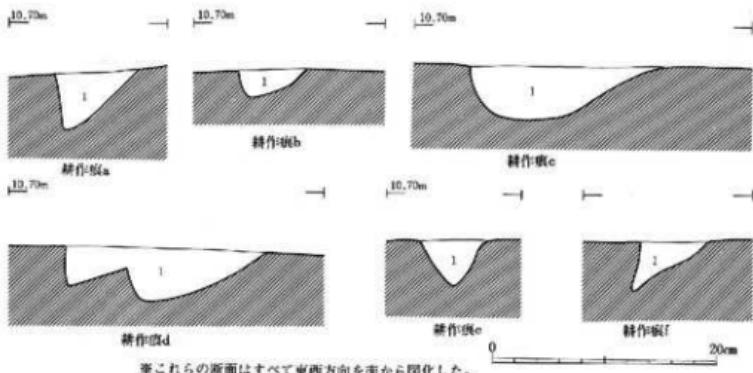
C群：A群にもB群に属さないもので、調査区外に展開すると考えられるものであり、東西方向の小溝⑰・⑱、南北方向の小溝⑲・⑳の計4条である。最大上端幅は、東西方向が26～44cm、南北方向が32～33cmで、深さは4条ともほぼ同じで9cm前後である。耕作痕は4条とも検出されなかった。



第7-a層小溝状透構断面図



第47图 第7a属小球状囊群平面图



層位	色調	土性	備考
1	10YR4/3に近い黄褐色	シルト 黑色土をブロック状に含む	

第48図 第7a層小溝状造構群（小溝⑤）耕作痕断面図

これらの小溝状造構群の性格であるが、いづれも畠の耕作に伴う土壤改良などを目的とした天地返し的な耕作の痕跡である可能性が高い。それは、小溝の底面に耕作の痕跡が左右交互に確認できたこと、堆積土に造構掘り込み層及び下層のブロックが多量に含まれることから言えよう。また、第6c層畠跡との関係については第4次調査との関連で後述する。

#### (5) ピット

第7a層上面では178個検出した。平面形は円形または方形で、柱穴になるものが33個あるが、建物跡になる組み合わせはなかった。ピットは全体的にまばらに分布するが、III区の西側やIV区の北側にはほとんどピットはみられない。遺物はほとんどのピットで出土しなかった。小溝状造構群（B・C群）、SD9・10・11溝跡、SK11土坑を切るピットがある。

#### (6) 第7a層の出土遺物

第7a層中の遺物は非常に少なく、ロクロ未使用の土器の小破片が5点、弥生土器の小破片が4点のみで、いづれも器種の判明するものはなかった。

#### (7) 造構の変遷と年代

〈造構の変遷〉第7a層上面で検出された造構で、直接切り合があるものを挙げると次のようになる。SB4建物跡が小溝状造構B群・SD9溝跡・SD10溝跡を切っており、小溝状造構B群はSD9溝跡・SD10溝跡を切っており、ピットに切られている。さらにSD9溝跡は

S D 10溝跡を切っており、小溝状遺構B群は小溝状遺構C群・S D 11溝跡を切っている。小溝状遺構A群は、S D 9溝跡・S D 10溝跡を切っている。S D 8溝跡、S K 11土坑、S B 3建物跡は重複関係がない。以上のことを上層の遺構を含めてまとめると以下のような変遷を考えられる。



(どの段階か不明のもの) SB 3建物跡、SK 11~13土坑、SD 8溝跡

〈所属年代〉 第7a層上面検出遺構及び第7a層中からの出土遺物は非常に少なく、また小破片が多い。年代決定に使用できるものとしては、SB 4建物跡P 5柱穴の掘り方から出土したE-13須恵器蓋1点である。この須恵器蓋は出土の状況からみて、SB 4建物跡が造られた時期を表している。このE-13須恵器蓋は、擬宝珠形に近いリング状のつまみを持ち、つまみの周辺が直線的な平坦をなし、口縁部が直角に下方に折れ曲がるのが特徴である。このようなリング状のつまみを持つ須恵器蓋は、大和町鳥屋窯跡群三角田南地区1号窯・2号窯にみられ(東北学院大学考古学研究部:1975)、つまみの特徴だけをみると硯沢窯跡B地区3号窯・16号窯にみられる(真山:1987)。

鳥屋窯跡群三角田南地区1号窯・2号窯や硯沢窯跡B地区3号窯・16号窯は8世紀中葉に位置付けられており、E-13須恵器蓋もその頃のものと考えられる。そうすると、1点のみの遺

物で年代を決定するのは危険ではあるが、E-13須恵器蓋はSB4建物跡の柱穴掘り方から出土しているので、SB4建物跡は8世紀中葉頃以降に建てられた可能性が高い。

SB4建物跡出土遺物の年代から遺物が出土していない遺構の年代を推測すると、小溝状遺構A群は前で述べたとおり第6c層壘跡に伴うものであるから第6c層壘跡と同じ年代である。小溝状遺構B群・C群、SD9溝跡、SD10溝跡、SD11溝跡はSB4建物跡より古い時期のものなので、8世紀中葉より古くなるが、上服がいつになるかは遺物がほとんど出土していないので第5次調査の成果だけでは不明である。

## 9 第7b層

第7b層はIII区の南西部とIV区の北半部にしか分布しないが、第7b層上面での遺構の検出はされなかった。

遺物はIV区の北半部から土師器破片が18点出土した。小破片なので図化できないが、壺になるとと思われる頸部破片及び体部破片がある。調整は外面が細かいハケメや後に丁寧なミガキが施されている。内面はナデや丁寧なミガキが施されている。時期は小破片ではあるが、塩釜式や南小泉式を中心とした時期が考えられる。

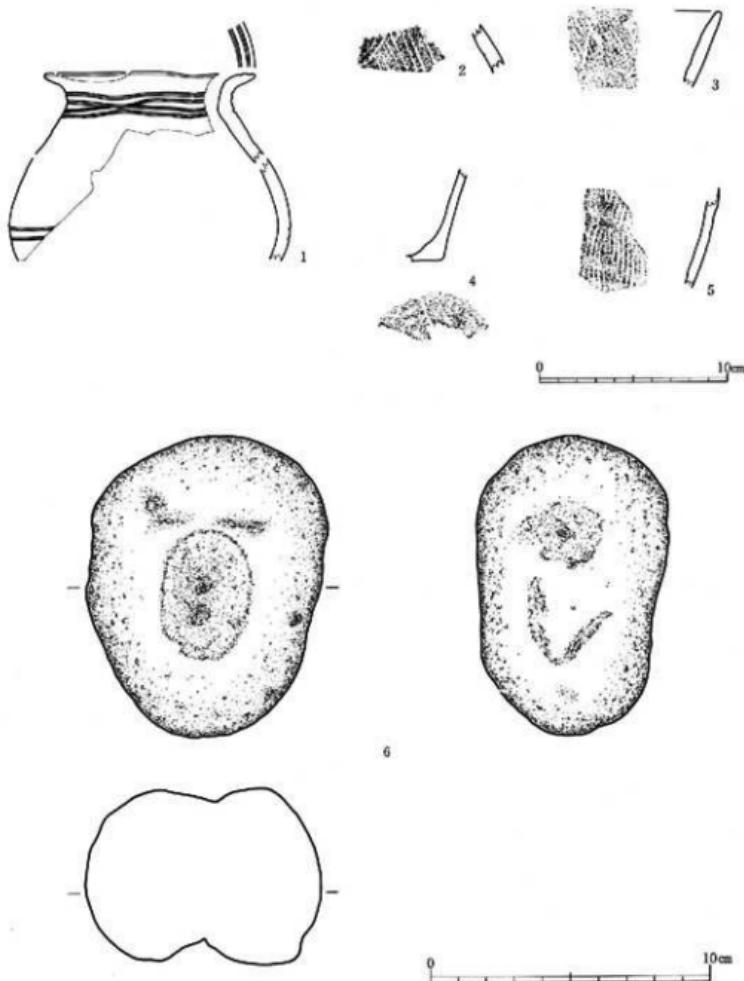
## 10 第8層

第8層上面、下面（第9層上面）では遺構の検出はされなかった。第9層上面では第4次調査区と同じように不整形の落ち込みが検出されたが、平面形・断面形等の観察の結果、人為的なものではなく9層上面が起伏をなしていたためにその凹みに第8層が堆積したものと判明した。

第8層の掘り込みにあたっては、第4次調査区での成果により多量の弥生土器の出土が予想されたが、先行トレンチ（下層調査区）での結果は極めて稀薄な出土状況だったため、第8層が4層に细分できるものの、细分層ごとに掘り分けずに第8層全体を掘り込む方法をとった。その結果、第8層中からは弥生土器が57点、磨滅しているため弥生土器か否か不明のものが36点出土した。出土層・分布範囲も特にまとまりではなく、全体的に遺物量は稀薄である。また、弥生土器の57点も小破片が多く遺存状態は悪い。その中で図化できたものが5点ある。

B-1 弥生土器（第49図1、写真82-1）は頸部及び体部に二本一描の平行沈線文を巡らせており、内面にも口唇部直下に二本一描の平行沈線文がみられる。これは、弥生時代中期後葉の十三塚式に比定される。

B-2（第49図2、写真82-2）は二本一描の沈線文が施されており、弥生時代中期後葉の十三塚式に比定される。



番号	遺物番号	出土地区	形 市	材 料	口幅(cm)	深度(cm)	高さ(cm)	大きさ・質			参考図版
								外	内	底	
1	E-2	H-4	筒状器	陶土上部	直	—	9.9~	1/2	口:平行斜面文、身:平行斜面文	口:平行斜面文、身:斜面ナメ	E-1
2	E-2	I-3	筒状器	陶土上部	直	—	—	瓶片	二重一級斜面文(山形文)	斜面ナメ	E-2
3	E-2	I-7	筒状器	陶土上部	直	—	—	瓶片	斜面文	アーチ文	E-2
4	E-4	H-8	筒状器	陶土上部	斜文	—	—	瓶片	斜面文	アーチ文	E-2
5	E-5	I-7	筒状器	陶土上部	斜文	—	—	瓶片	斜面文	アーチ文	E-2
外縁にスカリが付着している。											
番号	遺物番号	出土地区	形 市	材 料	最大径(cm)	底径(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	方 材	考 古	参考図版
6	E-1	F-2	筒状器	陶	18.7	8.4	6.2	481.5	安山岩質物	泥目の可能性がある。	E-1

第49図 第8層出土遺物

B-3（第49図3、写真82-3）の内面には横位ナデが観察できる。こうした調整は弥生時代後期の天王山式にみられるものである。

B-4（第49図4、写真82-4）及びB-5（第49図5、写真82-5）については所属時期は不明である。

破片資料をみると圓化したものに52点あるが、底部破片が2点のみで他はすべて体部破片である。体部破片には文様のあるものは確認されない。地文も残存状況が悪いため多くのものはわからないが、単節R L縄文、燃糸文Rが数点みられる。内面調整にはナデとミガキがみられる。

また、K-1 磨（第49図6、写真82-9）が出土しているが、これは形状からみて凹石の可能性があるので石製品の登録番号をつけた。しかし石材が安山岩性の溶岩であることや、凹みの部分が人為的なものかどうか疑わしい点があるので、凹石の可能性がある磨としておく。

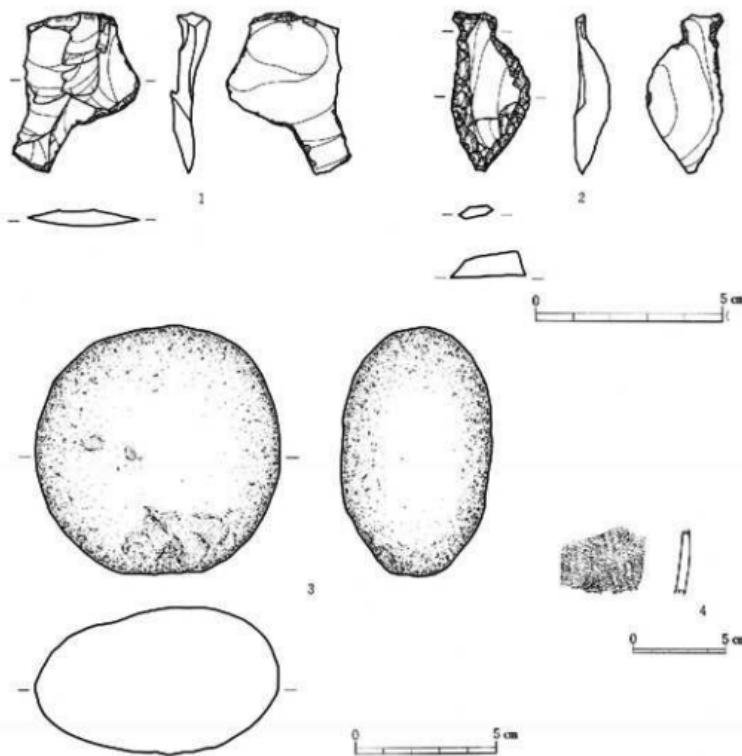
以上のような状況であるが、第8層の性格・年代については、包含する遺物が極めて稀薄なため不明な点が多い。

## 11 第9層以下の出土遺物

第9層以下の層では、各層とも遺構の検出はなく出土遺物が若干あるだけである。第11層から第15層まで縄文土器が合計8点、第11層から磨が1点、第15層から石器2点出土している。縄文土器は底部破片、体部破片で地文のみで時期は不明である。

石器のうち1点は石匙（第50図2、写真82-8）で、もう1点は微細剥離痕のある剝片（第50図1、写真82-7）である。第11層から出土した磨（第50図3、写真82-10）は、形状からみて磨石の可能性があるので石製品の登録番号をつけたが、磨が風化しており磨面が観察できない。したがって、磨石の可能性がある磨としておく。

第11層から第15層までは縄文土器が出土したが、第9～10層と第16層以下の層から遺物は出土しなかった。



番号	参考番号	出土地区	層位	名 称	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	石 材	備	考	参考番号	
1	長-3	H-3	第15層 のあらわし	無縫隙板状 のあらわし	4.5	3.3	0.5	6.1	西向		昭-7	
2	K-4	H-2	第12層	板	4.2	2.1	0.5	5.5	西向		昭-8	
3	K-3	H-2	第11層	板	8.8	8.7	5.1	454.3	断続的 な變形がある。 裏面は 圓錐形。	變形の可能性がある。 異化している。	昭-10	
4	A-1	H-4	第11層 西壁北部	板 磨	13.5(cm)	10.5(cm)	0.5(cm)	褐色	外 壁 調 整 内 面 調 整	板 外壁(6枚多孔) 内壁(1枚) 不明	学式調取	昭-6

第50図 第11層～第15層出土遺物

第7表 基本層位出土遺物数量表

基本層位	縄文土器	弥生土器	土 器			赤陶土器	漆器	陶 瓶	石 瓶	鉄製品	不 明	合 計
			芦口クロ	ロクロ	成形不明							
第1層～第3層			88	72	76	2	49	3			13	303
第2層			152	114	122	2	64	2			14	470
第4層			42	29	88	35	33	1			2	280
第5a層			9	12	12	2	6				1	42
第5b①層			243	248	232	105	152			1	138	1119
第5b②層			54	69	74		51				63	321
第6a, b層	1	21	67	22			33				14	158
第6c層	1	14	11	9			25				16	26
第7a層	4	2		4							4	14
第7b層			18									18
第8a～d層	57										36	93
第9層												6
第10層												6
第11層											2	2
第12層	3											3
第13層	2											2
第14層	3											3
第15層									2			2
鉄器・鐵鋤等	6	1		2	22		6		1		9	47
合計	14	64	643	674	661	316	429	6	3	1	312	2953

第8表 遺構出土遺物数量表

検出層位	遺構名	弥生土器	土 器			赤陶土器	漆器	陶 瓶	石 瓶	鉄製品	不 明	合 計
			芦口クロ	ロクロ	成形不明							
第5b①層	SD1a調査		6	2	2	3	9				1	23
	SD1b調査		6	6	9	5	3				1	30
	SD2調査		4	4	3	1	2				3	17
	SK1土坑			1	2							3
	SK3土坑							1				1
	SK4土坑			1	1							2
	SK5土坑		12	24							7	43
	SK7土坑				1		1					2
	SK9土坑				1	1						2
	SK10土坑		1				1					3
第5b②層	第5b②層 小窓調査	1	3	18	17			9			9	49
	ピット	6	5	19	4	5					15	54
	SD4調査		2	10	4		3			1	2	22
	SB1調査			2	3							5
	SB2調査	1	1									2
第6a層	SD6調査			17	9		3					29
	第6a層 小窓調査	2	1	3		1					1	8
	ピット	2	4	1		5						12
	SD8調査	1	7	1	6		11				16	42
第6c層	SD9調査	2	2	2	3		6				14	29
	SB4調査			1				1				2
	SD9調査	1										1
	SD10調査	4	2		2							8
	SK13土坑										2	2
第7a層	第7a層 小窓調査	3	3		1		1		2			10
	ピット	5						1				6
	合計	17	48	79	111	15	62	9	2	1	73	408

## 第6章 プラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は植物によりそれぞれ固有の形態的特徴を持っていることから、これを土壤中より検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境の復原に役立てることができる。プラント・オパール（植物珪酸体）分析と呼ばれるこの方法は、とくに埋蔵水田跡の確認や探査において極めて有効であり、これまでに多くの実績をあげている。

下ノ内浦遺跡の発掘調査では、土層断面の観察において複数の層準に水田跡が埋蔵されている可能性が考えられた。そこで、稻作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行うことになった。

### 2. 試 料

調査地点は、南壁 I - 7 グリットと同 I - 1 グリットの 2 地点である。調査区の土層は 1 層から 11 層に分層された。試料は、I - 7 グリットでは 2 層、4 层、5 b ①層、5 b ②層、6 a・b、6 c 層、7 a 層、8 层、9 层、10 層の 10 点、I - 1 グリットでは 2 層、3 层、4 层、5 a 層、5 b ①層、5 b ②層、6 a・b 層、6 c 層、7 a 層、7 b 層、8 层、9 a 層、10 層の 13 点の計 23 点である。これらはいずれも遺跡の調査担当者によって容量 50cm<sup>3</sup> の採土管を用いて採取されたものである。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾 (105°C・24時間)、仮比重測定
- 2) 試料土約 1 g を秤量、ガラスピース添加 (径約 40μm、約 0.02g)  
※ 電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz 10 分間)

- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の動細胞由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計算されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚1cm当たりの植物体生産量を算出し図示した。換算計数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、0.84、6.31、1.24、0.48である。

#### 4. 分析結果

稻作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ属（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群を基本に行った。分析の結果、I-7グリットではこれらすべての分類群のプラント・オパールが検出された。また、I-1グリットではキビ族を除く各分類群のプラント・オパールが検出された。

試料1g中のプラント・オパール個数ならびに稻作総量を表1に示す。なお、イネのプラント・オパール個数および各植物の推定生産量と変遷をタイアグラムにして図1、図2に示した。84～85ページに主な分類群の顕微鏡写真を示した。

#### 5. 考察

##### （1）稻作の可能性について

水田跡（稻作跡）の検証や検査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、仙台地方ではこれまでの調査において、プラント・オパール密度が3,000個/g程度であっても水田遺構が検出されている例が多くあることから、ここでは判断の基準値を3,000個/gとした。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性

はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

### 1) I - 7 グリッド

本地点では、2層から10層までの各層について分析を行った。その結果、イネのプラント・オバールは2層、4層、5b①層、5b②層、6a・b層、6c層の各層より検出された。したがつて、これら各層において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層ではプラント・オバール密度が10,000個/g以上と非常に高い値であることから、同層においては稻作が行われていた可能性が極めて高いと考えられる。また、4層、5b①層では密度が3,000個/g以上と高い値であることから、これらの層については稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

表1 プラント・オバール分析結果

仙台市、下ノ内溝遺跡  
南壁I - 7 グリッド地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケア科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	67	9	1.06	13,900	13.64	1,300	28,500	1,300	600
4	76	10	1.08	8,600	9.60	700	26,600	2,100	0
5 b①	86	2	0.97	4,400	0.89	0	28,600	0	0
5 b②	88	2	0.98	2,300	0.47	1,100	30,900	0	0
6 a - b	90	11	1.03	700	0.82	700	21,900	0	0
6 c	101	15	0.99	600	0.95	0	22,300	1,200	0
7 a	116	5	0.96	0	0.00	0	34,000	1,300	1,300
8	121	19	1.01	0	0.00	0	33,500	700	0
9	140	10	0.92	0	0.00	1,400	19,500	0	0
10	150	14	0.95	0	0.00	1,400	7,800	1,400	0

南壁I - 7 グリッド地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケア科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	45	5	1.12	11,100	6.39	1,400	49,600	700	0
3	50	6	1.04	9,400	6.05	700	27,600	700	0
4	56	5	0.89	3,300	1.54	0	32,200	2,600	0
5 a	61	3	0.96	4,300	1.28	700	23,800	700	0
5 b①	64	6	0.98	10,600	6.46	0	26,900	700	0
5 b②	70	4	0.95	6,900	2.74	0	22,300	0	0
6 a - b	74	16	1.03	1,400	2.38	2,800	25,200	0	0
6 c	90	13	1.00	0	0.00	0	18,800	1,200	0
7 a	103	8	0.84	0	0.00	0	24,700	0	0
7 b	111	4	0.87	0	0.00	0	18,000	600	0
8	115	29	0.86	2,700	7.13	0	20,600	0	0
9	144	4	0.78	0	0.00	2,100	27,700	0	0
10	148	14	0.92	0	0.00	700	7,500	0	0

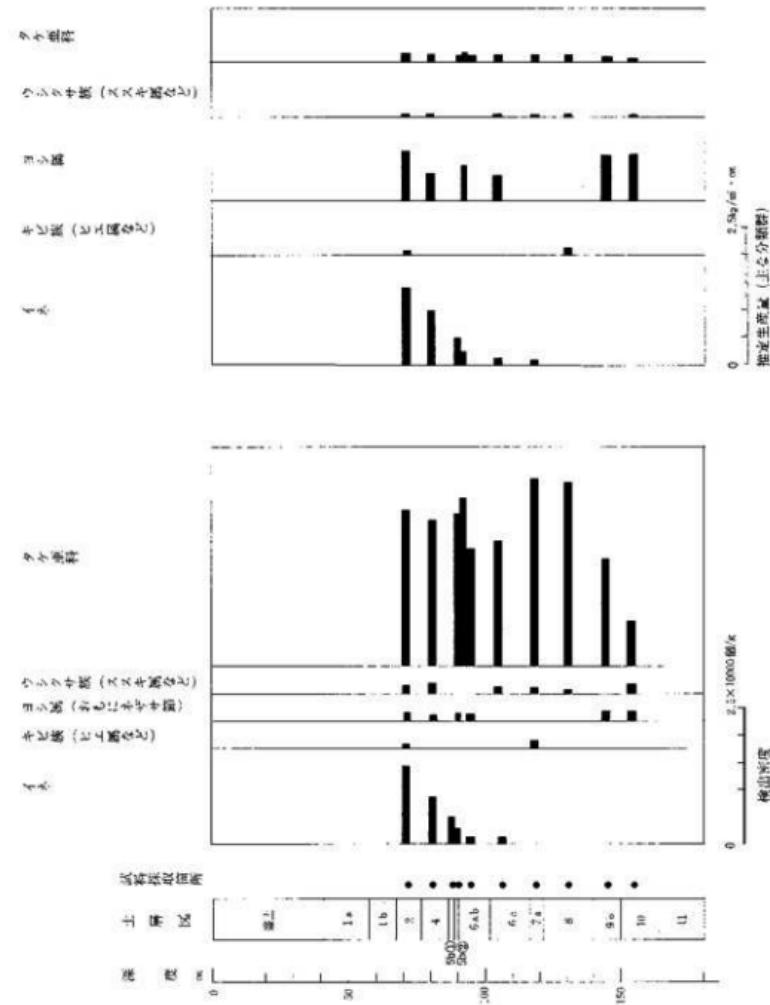


図1 下ノ内浦通路南壁I-7グリッドにおけるプラント・オバール分析結果

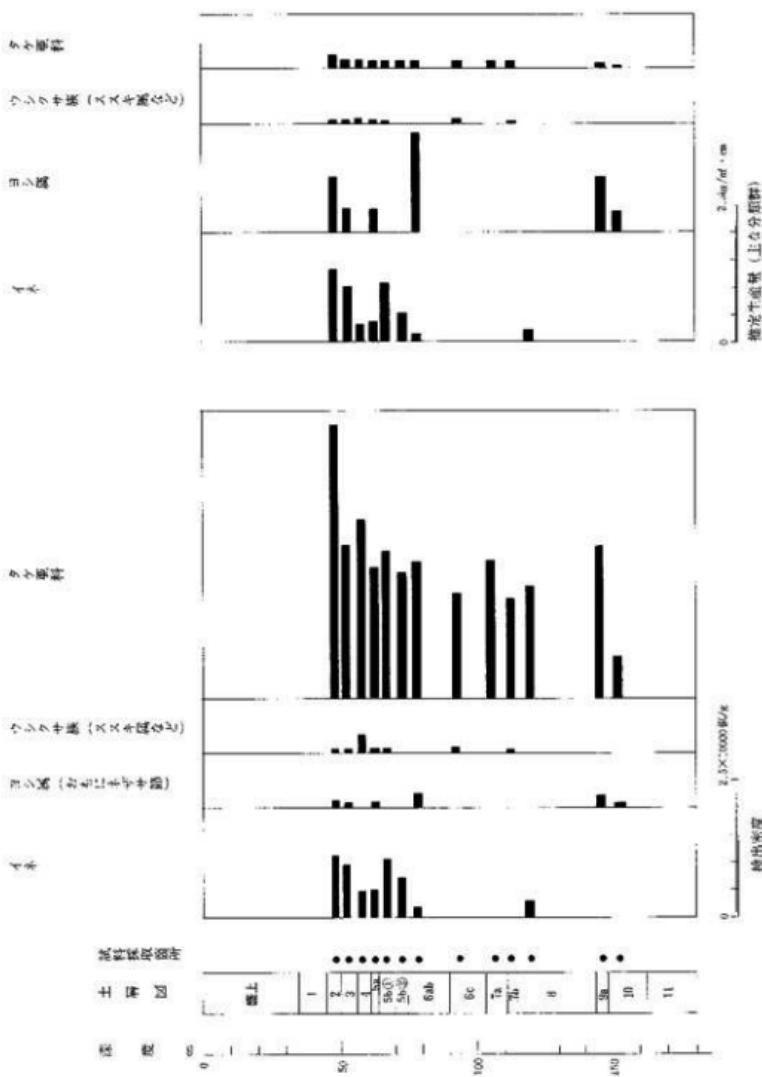


図2 下ノ内溝排水溝I-1グリットにおけるプラント・オバール分析結果

## 2) I-1グリッド

本地点では、2層から10層までの各層について分析を行った。その結果、2層、3層、4層、5a層、5b①層、5b②層、6a・b層および8層の各層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層、3層、5b①層ではプラント・オパール密度がおよそ10,000個/g以上と非常に高い値であることから、これらの層においては稻作が行われていた可能性が極めて高いと考えられる。4層、5a層、5b②層では密度が3,000個/g以上と高い値である。また、8層では密度は3,000個/g弱であるが、直上層からはまったく検出されていないことから、上層からの混入の危険性は考えにくい。したがって、これら各層においては稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

## (2) その他のイネ科栽培植物

プラント・オパール分析で同定が可能な分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外では、キビ族（ヒエなどが含まれる）やムギ類、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。

本遺跡では、南壁I-7グリッドの2層と7a層においてキビ族のプラント・オパールが検出された。これらはいずれもその形態からヒエ属である可能性が考えられるが、現時点ではプラント・オパール分析でヒエ属とキビ属、栽培ヒエと他の野・雑草のヒエを識別するに至っていない（杉山ほか、1988）。仮に、ここで検出されたものがヒエ属であったとしても、プラント・オパール密度が非常に低いことから、本地点で栽培されたものとは考え難い。おそらく野草あるいは雑草のヒエであると思われる。

## (3) 植生および環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ウシクサ族（ススキ属など）やタケ亜科は比較的乾いた土壤条件のところで生育している。このことから、これらの植物の出現傾向を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥、温潤）を推定することができる。

本遺跡では、全体的にタケ亜科が卓越しておりヨシ属は少量である。この傾向は稻作が開始された後もほとんど変わりはない。したがって、調査区一帯は10層堆積時より現在に至るまで比較的乾いた環境で移動したものと推定される。また、ここで行われた稻作が水田稻作であれば、その水田は乾田であった可能性が考えられる。

## 6. まとめ

ドノ内浦遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稻作跡の探査を試みた。その結果、I-7グリッドの2層、4層、5b①層とI-1グリッドの2層、3層、4層、5a層、5b

①層、5 b ②層および8層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、これらの層において稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

#### 参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山—古環境編一、川口市遺跡調査会報告、10：281-298。
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料としてー。考古学と自然科学、20：81-92。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸標本と定量分析法ー。考古学と自然科学、9：15-29。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の検査ー。考古学と自然科学、17：73-85。

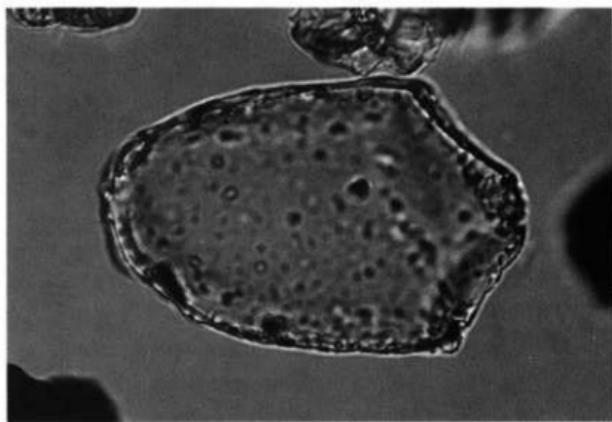


写真1  
イネ ( $\times 400$ )  
IV区、I-7グリッド  
第5b①層

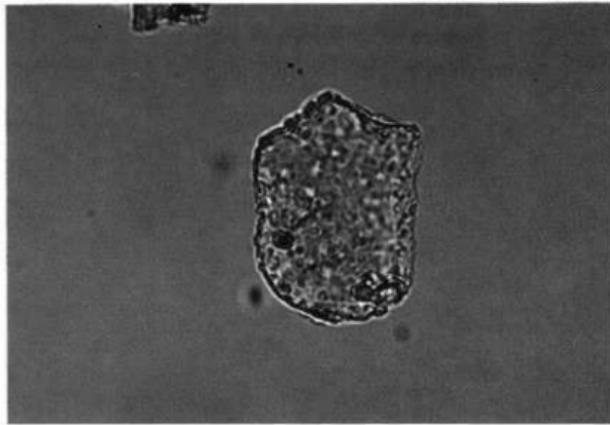


写真2  
イネ ( $\times 400$ )  
III区、I-1グリッド  
第5b②層

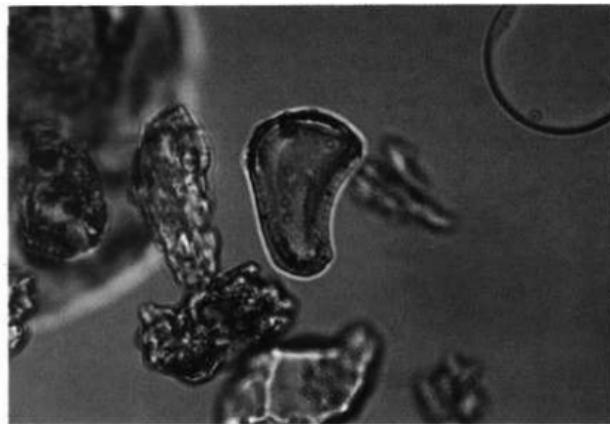


写真3  
イネ ( $\times 400$ )  
III区、I-1グリッド  
第8層

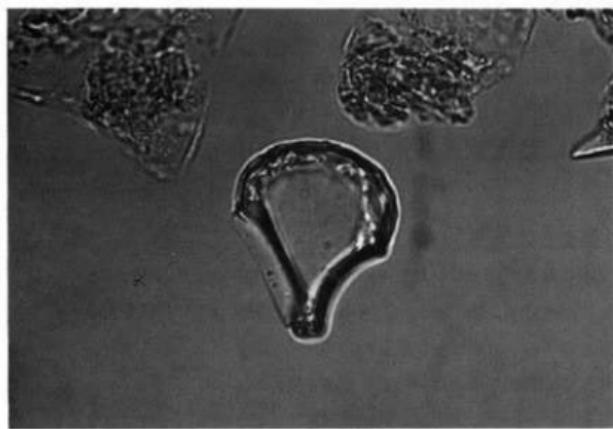


写真4  
ヨシ属 ( $\times 400$ )  
Ⅲ区、I-1グリット  
第6a、b層

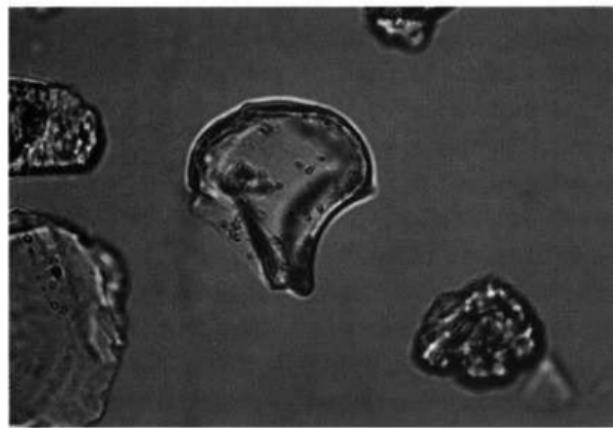


写真5  
タケ亜科 ( $\times 400$ )  
Ⅳ区、I-7グリット  
第8層

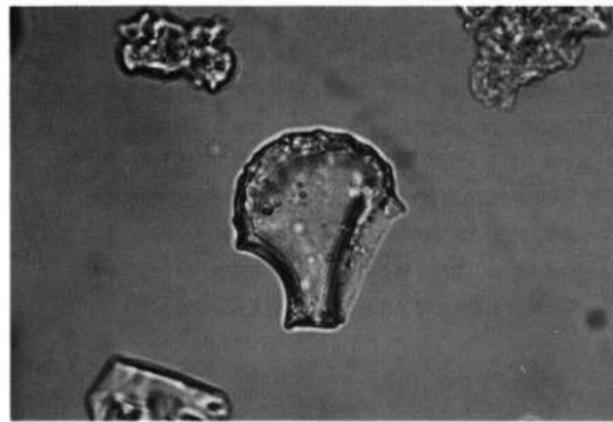


写真6 ( $\times 400$ )  
ウシクサ族 (スキ属など)  
Ⅲ区、I-1グリット  
第4層

## 第7章 これまでの調査成果との関連

### 1 第5次調査と以前の調査との関連

下ノ内浦遺跡では、これまで第2章3で述べたとおり4回の調査例があるが、それらを第5次調査区での成果の関連について簡単にまとめてみたい。特に第4次調査区は北に隣接した調査区なので遺構がどういう展開になるのか合成図を作成した(第51~54図)。以下、第5次調査区の遺構の主な年代である奈良・平安時代を中心に時代ごと記述する。

中近世：第5次調査区での第4層が中・近世の水田跡の可能性がある。他の調査区では、第2次調査区で近世の建物跡が3棟あるが、遺跡全体の状況は不明である。

平安時代：第5次調査区で平安時代に所属し遺構が検出されたのは第5b①層、第5b②層、第6a層である。まとめると以下のようになる。

第5b①層……平安時代（灰白色火山灰降下後、10世紀前半以降）

第5b②層……平安時代（灰白色火山灰降下後、10世紀前半以降）

第6a層……平安時代（灰白色火山灰降下前、9世紀代）

第4次調査では、第5b①層と第5b②層は遺構が検出されなかったので、第6a層について合成図を作成した(第51図)。第6a層は、第4次調査でもその年代を「平安時代（灰白色火山灰降下前）」としている。合成図での遺構の分布をみると、南西部に水田跡がひろがり、南北を走る溝跡をはさんで東側に畠の天地返し的な耕作の痕跡と考えられる小溝状遺構群と掘立柱建物跡がある。掘立柱建物跡は小規模な建物跡である。北西部には性格不明の土坑3基がある。以上の遺構の分布をみるとこれらの調査区周辺の平安時代前期の段階（9世紀）は水田跡あるいは畠跡という生産域であったことがわかる。また、前述のとおり第5b①層の時期と第5b②層の時期とともに水田跡を中心とする生産域であることがわかる。下ノ内浦遺跡の他の調査区をみると、第5次調査区より約70m南にある第3次調査区では10世紀前半以降の火葬施設の可能性のある土坑1基、平安時代の藏骨器、平安時代かそれ以降の溝跡が検出されている。以上のように、ここは平安時代前期の段階は全く不明で、その後は墓域となった可能性もあるが不明な点が多い。同じく約60m南にある第1次調査区（II区）では灰白色火山灰降下前の河川跡があり、約110m南西にある第1次調査区（I区）では9世紀以降の性格不明の土坑・溝跡や掘立柱建物跡がある。ここはやや規模の大きい建物跡があり居住域である可能性が強い。第2次調査区では概報によると平安時代の水田跡、畠跡と考えられる小溝状遺構群、竪穴住居跡などが検出されている。このように平安時代を通して考えると、生産域であった時期と居住域であった時期に分かれるようである。



第51図 第4次・第5次調査区合成図（第6a層）

奈良時代：第5次調査区で奈良時代に所属する遺構が検出されたのは第6c層と第7a層である。まとめると以下のようになる。

第6c層……奈良時代～平安時代（8世紀後葉～9世紀前葉）

第7a層……奈良時代（8世紀中葉）及び奈良時代以前

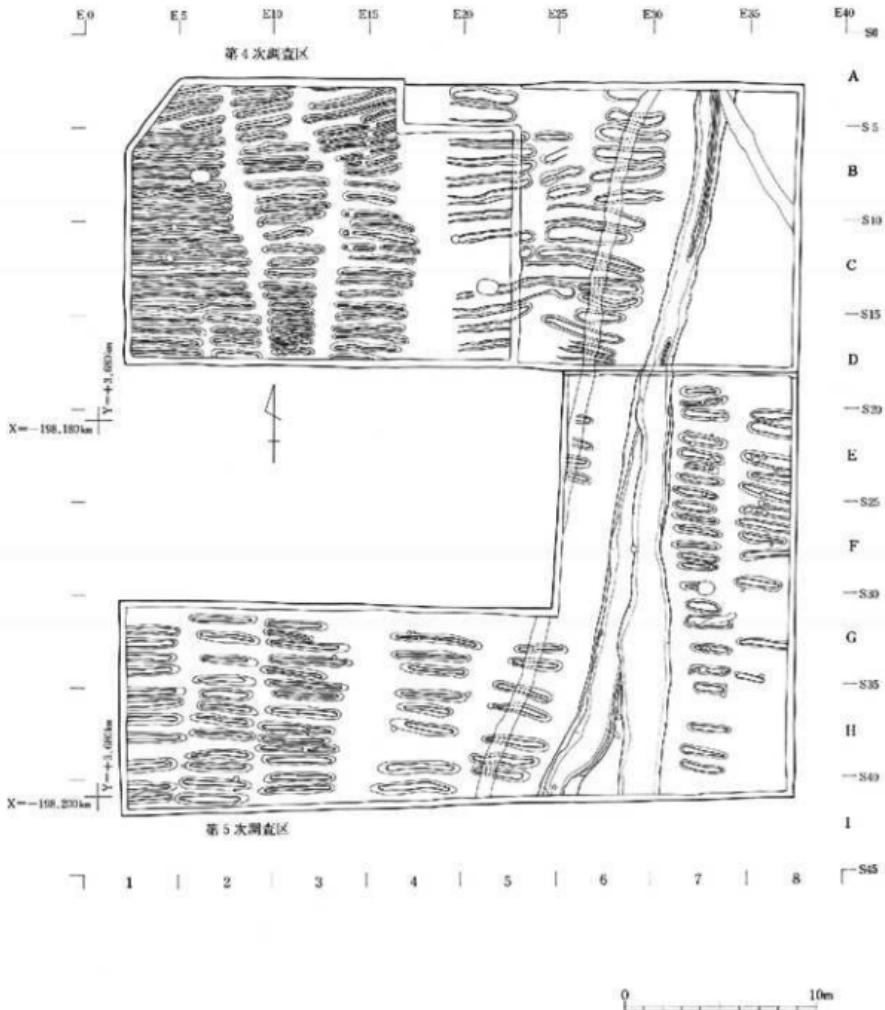
第7a層は第4次調査の結果と合わせ考えると奈良時代以前の遺構も含まれるようである。そこで、ここでは8世紀代と考えられる遺構を中心として記述する。

第5次調査区で検出した第6c層畠跡は、第4次調査区の畠跡と一連のものである。それに伴う第5次調査区のSD6・7a・7b溝跡と第4次調査区の溝跡も同様に畠跡に伴うものとされている。また第4次調査の第7a層上面で検出された小溝状遺構群は第6c層の畠跡の天地返しの跡と報告されている。そこで畠跡が検出された第6c層上面の合成図（第52図）と第7a層の畠跡に伴う小溝状遺構群の合成図（第53図）の2枚を作成した。

第4次調査区と第5次調査区の畠跡は基本的に同じような状況であり、広い範囲にわたる畠跡であることがわかる。第4次調査区の畠跡の所属年代は、畠の耕作土にロクロ土師器が含まれないことと前後の層の年代により、古墳時代後期以降奈良時代以前の年代を与えている。畠跡の耕作土にロクロ土師器が含まれないのは第5次調査区との成果と相違がみられるが、第5次調査区のロクロ土師器の出土点数は極めて少なく明確なことは言えない。また、第4次調査では、第7a層上面で南北方向と東西方向に規則的に検出された小溝状遺構群を第6c層の畠跡の天地返しの跡と位置付けたが、第5次調査区ではその状況に相違が認められる。それは、III区における畠跡に小溝状遺構群が残らなかった点、IV区で検出された小溝状遺構群が小溝の方向・間隔などから大きく2群に分けられ、しかも建物跡に切られる1群が存在する点である。特にIV区で検出された小溝状遺構群のあり方は、第4次調査で検出された第6c層畠跡の天地返し的な耕作の痕跡となる小溝状遺構群の他に第6c層畠跡のものとは違う小溝状遺構群が存在することを意味する。第5章7で述べた第7a層小溝状遺構群A群が第6c層畠跡に伴う天地返し的な耕作の痕跡となり、B群が第6c層畠跡やSB4建物跡より古い段階で、本来存在していたと推定される畠跡の天地返し的な耕作の痕跡と考えられる。以上のように耕作の状況など若干様相の違う部分があるものの、遺構の検出状況はほぼ同じで、これらの調査区周辺は南北に走る溝跡をはさんで広く畠跡だったことが判明した。

第5次調査区の第7a層で奈良時代と考えられたのは建物跡1軒（SB4建物跡）で、第4次調査区では検出されなかった。SB4建物跡より古い時期の小溝状遺構群、SD9～11の3条の溝跡については8世紀中葉以前で、奈良時代の遺構群の可能性もあるが、明確な時期については不明である。

以上のように、第4次調査区と第5次調査区周辺の奈良時代中頃以前には居住域を形成する



第52図 第4次・第5次調査区合成図(第6c層)



第53図 第4次・第5次調査区合成図（第7a層）



第54図 第4次・第5次調査区合成図（第7a層）

のか否か不明だが、非生産域となっており、それが奈良時代後半になると、広く畠としての生産域に変わることが判明した。第4次調査区以外の調査区をみると、第1次調査区（II区）及び第3次調査区では8世紀中葉の竪穴住居跡がそれぞれ1棟ずつ検出されている。また、第2次調査区では同じ頃の竪穴住居跡が5軒と小溝状遺構群が検出されている。この小溝状遺構群は調査区のほとんどの区域で検出され、国分寺下層式の竪穴住居跡を切っているものと竪穴住居跡に切られているものがあり、小溝状遺構群の状況は第5次調査区での状況ときわめて似ている。いずれも笊川に近い地域であるが、下ノ内浦遺跡の南部は奈良時代中頃には集落が形成されており、居住域であったことが考えられる。また、第5次調査区の西側の地域では第5次調査区の奈良時代と同じような土地利用の状況が窺われる。

**古墳時代：**第5次調査区からは明確に古墳時代とわかる遺構の検出はなかった。しかし、第4次調査区で古墳時代後期（栗斑式期）の竪穴住居跡1棟と、同時期と推定した溝跡（第4次SD5溝跡）1条がある。第5次調査区の西側で検出されたSD8溝跡は、第4次SD5溝跡と同一の溝跡と考えられるので、その年代も古墳時代後期の可能性があり、居住域もその北側に展開している可能性がある。また、第4次調査で同調査区の第7b層が古墳時代の水田土壤である可能性を指摘していたが、第5次調査区では第7b層が部分的な分布だったこともあり、検証できなかった。

第4次調査区以外の調査区における古墳時代の状況は不明なので、下ノ内浦遺跡の古墳時代の土地利用の状況は不明な点が多い。

**弥生時代：**第4次調査区で、二次堆積による弥生時代後期天王山式期の遺物包含層の存在が認められた。この遺物包含層の成因は第4次調査区の北西側の標高の高い部分より流れで堆積したものと考えられている。また、第4次調査区の西側を埋蔵文化財研究所が調査を実施しているが、ここでも調査区北側で弥生土器などの遺物が出土しており、遺物包含層を形成していることが報告されている。第5次調査区では遺物の包含が極めて稀薄なものとなっている。遺物包含層の分布は第5次調査区の北側で広がりをみせ、第5次調査区には及ばないことが判明した。

**縄文時代：**第5次調査では縄文時代の痕跡はほとんど発見されなかった。第4次調査においても、縄文時代後期の遺物をわずかに出土したのみで、第5次調査区周辺の縄文時代の状況は不明である。

## 2 周辺の遺跡との関連

当調査区の周辺は近年発掘調査が進められており、土地利用の状況が判明しつつある。下ノ内浦遺跡周辺の発掘調査の成果のうち奈良・平安時代の状況を第55図に示した。主な調査区に

についてはそのトレンチを図上にいれたが、座標値のないものについては報告書の位置図を参考に記載した。富沢遺跡・山口遺跡の調査区はその位置を●印にて示してある。以下、奈良・平安時代の概要を中心に簡単にまとめる。

**六反田遺跡**：荒川の右岸、下ノ内浦遺跡とは荒川をはさんだ南側に位置し、昭和51・52・53・56・59・60・61年に調査が実施されている。調査区は南半部に集中しており、「六反田遺跡III」（佐藤洋：1987）にそれまでの調査をまとめてある。それ以外のものを加えて状況をみると、奈良時代は竪穴住居跡、小溝状遺構群が比較的多くみられ、居住域となっている。ただし、「六反田遺跡III」の考察によると、8世紀中頃前後には小溝状遺構群だけとなり、生産域となっている区域も存在する。平安時代になってもこの地域は竪穴住居跡や掘立柱建物跡が建てられ、基本的に居住域となっている。また、昭和59年に調査された遺跡の東側の調査区では（田中：1984b）、奈良時代前葉の竪穴住居跡や8世紀前半～10世紀前半のいずれかの時期になる小溝状遺構群が検出されている。さらに平安時代のものとしては、10世紀前葉より古い水田跡と10世紀前葉以降の水田跡が検出されている。この地域の平安時代は水田が営まれ生産域となっていたことがわかる。

**伊古田遺跡**：荒川の右岸、下ノ内浦遺跡の南側の地下鉄富沢駅周辺の遺跡で、地下鉄関連の調査が昭和56～61年にかけて実施されている。ここでは、古墳～平安時代にかけての竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡2棟、土坑20数基、溝跡4条、ピットが検出されている。奈良時代と平安時代におけるこの地域は居住域として継続的に利用されていたものと考えられる。

**下ノ内浦遺跡**：荒川の右岸、下ノ内浦遺跡の南西方向の遺跡で、地下鉄関係の調査が昭和56～58年にかけて実施されている。奈良時代の竪穴住居跡が3軒、平安時代の竪穴住居跡が8軒、掘立柱建物跡が5棟、古墳～平安時代の竪穴住居跡が4軒、掘立柱建物跡が4棟あり、小溝状遺構群は古墳～平安時代のものと時期不明のものがある。ここでは、奈良時代と平安時代の土地利用は基本的に同じで、一部畠跡としての生産域とした区域はあるものの居住域として使われていたと考えられる。

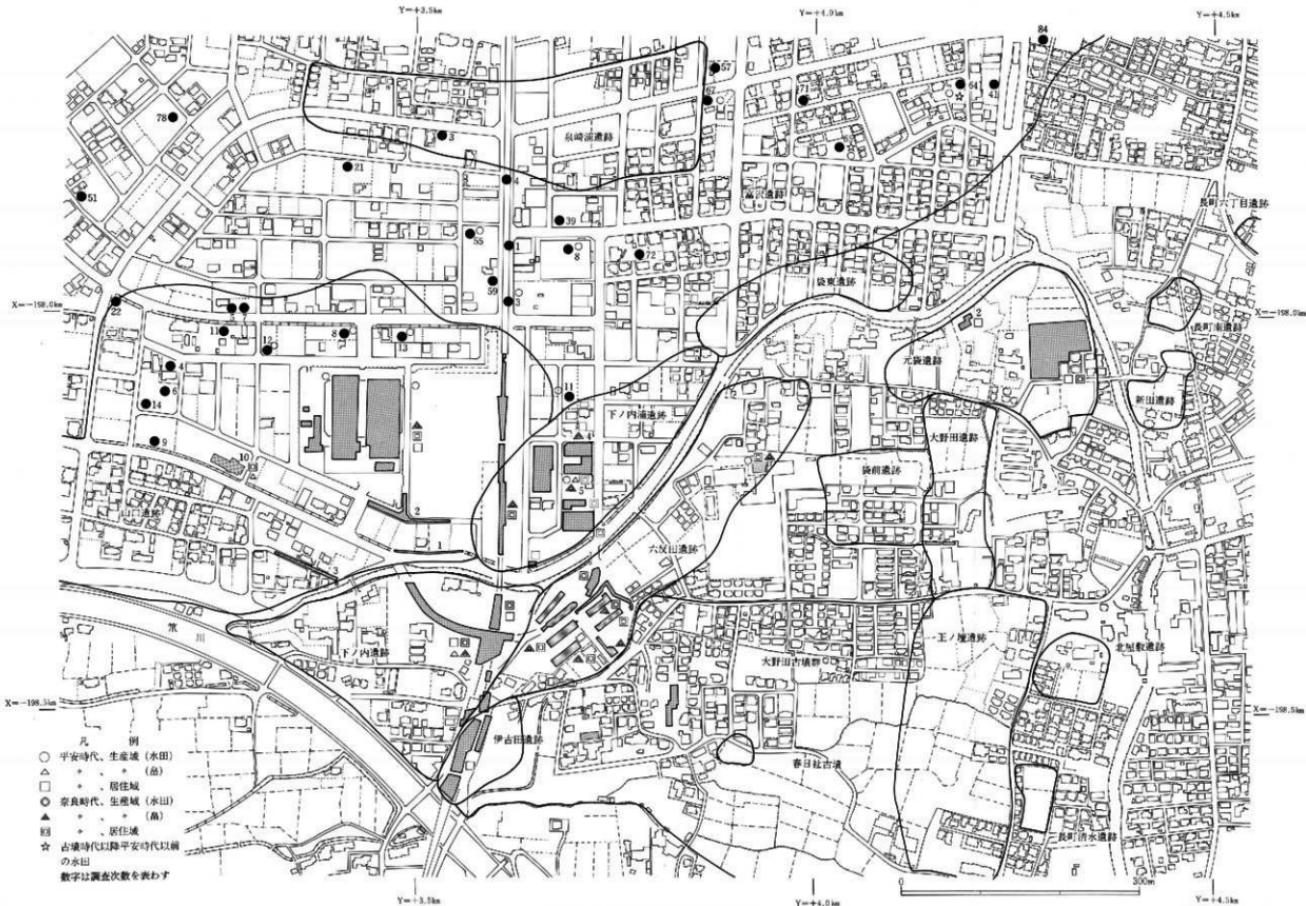
**山口遺跡**：荒川の左岸、下ノ内浦遺跡の西側に広がる遺跡で、昭和53年以降断続的に調査が実施されている。まとまった広さになった調査区に、仙台市体育館建設の事前調査の調査区がある（田中：1984a）。その調査区から奈良時代の竪穴住居跡8軒、土坑7基、溝33条、ピット、小溝状遺構群などが検出されており、その年代も国分寺下層式の終末期と位置づけられている。平安時代の遺構は、自然堤防上では竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟などが検出された。またその北側の後背湿地の区域では水田跡、溝跡11条、土坑2基、ピット多数が検出されている。水田跡は灰白色火山灰を水田面にのせており、10世紀前半のものとしている。この調査区は自然堤防と後背湿地の土地利用状況を示す良い例である。

**元袋遺跡**：笊川の右岸、下ノ内浦遺跡の東側に広がる遺跡で、昭和61年と平成5年に調査が行われた。1次調査区（渡部：1987）では8世紀前半の竪穴住居跡2軒、8世紀の竪穴住居跡1軒、10世紀前後の竪穴住居跡3軒と古代のもの（平安か）と考えられている掘立柱建物跡2棟が検出されている。第2次調査区（川名：1994）は、古墳時代後期以降の竪穴住居跡1軒、9世紀前半の竪穴住居跡1軒、そして平安時代前半と考えられている竪穴住居跡3軒が検出されている。いずれも水田または畠跡などの生産に関する遺構は検出されておらず、この地域は継続的に居住域として利用されていたと考えられる。

**富沢遺跡**：笊川の左岸、下ノ内浦遺跡の北側に広がる遺跡で、昭和57年以降継続的に調査が行われている。下ノ内浦遺跡の北側に隣接する地域では、平安時代前半（灰白色火山灰降下前）と平安時代後半（灰白色火山灰降下後）の2時期の水田跡が確認されており、富沢遺跡の平安時代は自然堤防部分を除くほぼ全域が水田跡であったことが判明している。第55回には示されなかったが、富沢遺跡の東部にあたる第35次調査では、条里型土地割が認められた奈良～平安時代の水田跡が検出されている。奈良時代の水田跡は遺跡全域では確認されていないが、古墳時代以降平安時代以前に含まれる水田跡は数ヶ所で確認されている。

以上の概要からみると、以前から指摘されているように、後背湿地である富沢遺跡では水田を中心とした生産域となり、自然堤防となる六反田遺跡・下ノ内浦遺跡・伊古田遺跡・元袋遺跡では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を中心とする居住域と畠跡を中心とする生産域の両方の性格があることが確認される。それは、山口遺跡で自然堤防と後背湿地の境界部分を調査しており、その土地利用のしかたが明確に示されていることからもわかる。今回は出土遺物などから詳細な年代の検討を行えないが、下ノ内浦遺跡第5次調査区の成果がどういう位置付けになるか、これらの土地利用の状況を整理してみたい。

第55回にも示してあるように、下ノ内浦遺跡の南方向に大野田古墳群が広く分布しており、古墳時代には広い地域が墓域として利用されていたことが判明している（結城他：1987b）。また、前述の北方向にある富沢遺跡では古墳時代も水田跡を經營しており、生産域として利用されていた。このような土地利用がなされていた後の奈良時代になると、笊川沿いの自然堤防上の広い地域で集落が形成されるようになる。前に記述した以外にも、現在調査中あるいは整理中の笊川周辺の遺跡では多くの奈良時代の竪穴住居跡が検出されており、広く集落として利用されている。以前に指摘されているとおり（中富：1991）、これらの竪穴住居跡は真北方向に近い南北軸をもつものが多いとされており、集落に対し何らかの規制が加えられている可能性がある。また、その一部においては島と考えられる小溝状遺構群が検出されており生産域として利用されていることも判明している。その北方向では、一部でしか検出されていないが、主に水田跡として利用されており生産域となっている。また奈良時代の条里型土地割りも認められ



第55図 下ノ内溝遺跡周辺の遺跡分布図

ていよう、土地に対する規制が加えられてきている。

平安時代になっても荒川沿いの自然堤防上には集落が形成されており、この地域は引き続き居住域として利用されている。しかし、水田域は拡大される傾向にあり、自然堤防上にある六反田遺跡・下ノ内浦遺跡などでも水田が経営されるようになる。また、北側の富沢遺跡において多くの調査区で水田跡が検出され、自然堤防部分を除く広い地域で水田が経営されており生産域が拡大されたことが知られる。

今回調査した下ノ内浦遺跡第5次調査区と北に隣接する第4次調査区の地域は、古墳時代には居住域だったものが、奈良時代になると集落となる時期や畠がつくられたりする時期があり、居住域と生産域が繰り返される。生産域も畠とした利用であり、水田跡としては利用されていない。このような状況は荒川周辺の自然堤防上に展開する集落と同様なもので、一連のものである可能性がある。それが平安時代になると土地利用が変化し、水田が経営されるようになる。以後一部で小溝状遺構群がみられ畠として利用された箇所があるものの、平安時代を通して水田が営まれるようになり、継続的な生産域となる。これは、第5次調査区が自然堤防上でも縁辺部にあたり、後背湿地に近い地域にあたることもあって水田の拡大が容易に自然堤防上にも及んだことを明確に示している。

以上のように、下ノ内浦遺跡第5次調査では土地利用状況の変化を示す1つの例を提示できた。また、荒川周辺の地域は調査が継続的に実施されている地域であり、土地利用状況が明確になりつつある貴重な地域である。当然のことながら、この地域も遺跡の枠にとらわれることなく遺構がどのように展開するのか検討していくことが今後特に必要となると言えよう。

## 註

伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、六反山遺跡のうち、地下鉄関連の調査成果については、「仙台市高速鉄道関係調査概報I～VI」及び「仙台市高速鉄道関係調査報告書I」に掲った。また、富沢遺跡など引用文献が明示されていないものは参考文献のところに記載した。

## 第8章 まとめ

今回の調査では縄文時代から平安時代に及ぶ遺構あるいは遺物が発見された。以下、その成果についてまとめておく。

1. 下ノ内浦遺跡は荒川の自然堤防上に立地している。
  2. 平安時代以降の遺構として第4層水田跡が発見された。
  3. 平安時代後半（灰白色火山灰降下後）の遺構が第5b①層及び第5②層の上面から検出された。第5b①層上面からは第5b①層水田跡とそれに伴うSD1a・b溝跡やSD2溝跡、SD3溝跡、土坑群（SK1～10土坑）、第5b①層小溝状遺構群、ピットがある。第5②層上面からは調査区全面に広がる第5②層水田跡と、それに伴うSD4溝跡が検出された。平安時代後半は水田や畠などの耕作域であったことが判明した。
  4. 平安時代前半（灰白色火山灰降下前）の遺構として第6a層上面で第6a層水田跡とそれに伴うSD5溝跡や掘立柱建物跡2棟（SB1・2建物跡）、第6a層小溝状遺構群、ピットが検出された。小規模な建物跡が2棟存在するものの、平安時代前半も水田や畠などの耕作域であったことが判明した。
  5. 奈良時代後半から平安時代にかけて（8世紀後葉～9世紀前葉）の遺構として、第6c層上面から第6c層畠跡とそれに伴う溝跡3条（SD6・7a・7b溝跡）が検出された。第6c層畠跡は南北に走る溝跡をはさんで東西にあり、畠跡が東西方向に検出された。また、第6c層畠跡に伴う小溝状遺構群も検出されたが、第4次調査区との状況をみると相違点も認められる。この時期は畠を中心とした耕作域であることが判明した。
  6. 奈良時代中葉頃の掘立柱建物跡（SB4建物跡）が第7a層上面から検出された。所属年代が不明な溝跡3条（SD9・10・11溝跡）、掘立柱建物跡（SB3建物跡）、第7a層小溝状遺構群、土坑群（SK11～13土坑）、ピットも同じく第7a層上面から検出された。奈良時代中葉頃は集落であった可能性も考えられる。
  7. 第4次調査の成果から古墳時代後期（栗廻式）と考えられるSD8溝跡が検出されたが、古墳時代後期の堅穴住居跡などは検出されなかったため、第4次調査で検出された堅穴住居跡がどう展開するのかという問題は解明できなかった。また、検討課題となっている古墳時代の水田跡については解明できなかった。
  8. 第4次調査で発見された弥生時代の遺物包含層は第5次調査区まで延びていないことが判明した。また、縄文時代は少量の遺物が出土したのみである。
- 以上のように今回の調査の結果、下ノ内浦遺跡における土地利用の状況の一端が解明された。

第8表 造構変遷表（第7a層～第4層）

検出層位	時 期	造 構 の 变 遷	場の性格
第7a層	古墳時代(後期)	S D 8溝跡 ↓ S D 10溝跡→S D 9溝跡・(S D 11溝跡) ↓ 小溝状造構C群→B群	居住域(註)
	奈良時代(8C中葉)	S B 4建物跡・(S B 3建物跡) ↓ 小溝状造構A群	生産域(島)
	奈良～平安時代 (8C後葉～9C前葉)	第6c層晶跡・S D 7b→S D 7a→S D 6溝跡 ↓ 第6a層水田跡	生産域(島)
			生産域(水田)
	平安時代(9C)	(小溝状造構A群)→小溝状造構B群 ↓ S B 1、S B 2建物跡	生産域(島)
第5b②層	平 安 時 代	第5b②層水田跡	生産域(水田)
		↓ S D 2溝跡・S K 1～10土坑	
	(10C前半以降)	第5b①層水田跡 ↓ S D 3溝跡	生産域(水田)
第4層	平 安 時 代 以 降	第4層水田跡	生産域(水田)

註：隣接する第4次調査では、S D 8溝跡の延長と考えられる溝跡とともに、古墳時代後期の堅穴住居跡が1棟検出されている。

\* ( )内の造構の時期は推定。

## 参考・引用文献

- 阿部博元・千葉宗久 (1980) 「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集
- 五十嵐康洋・佐藤淳 (1993) 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(5) - 富沢遺跡第78次・80~85次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第171集
- 伊東信雄 (1952) 「古代史」『宮城県史』第1巻
- 氏家和典 (1957) 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家利典 (1967) 「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 太田昭夫 (1991) 「富沢遺跡-第30次調査報告書第1分冊-鐵文～近世編」仙台市文化財調査報告書第149集
- 岡山茂弘・桑原滋郎 (1974) 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要I』宮城県多賀城跡調査研究所
- 金森安孝他 (1984) 「仙台平野の遺跡群III-昭和58年度発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第65集
- 金森安孝他 (1987) 「富沢遺跡-東北地方建設局町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第104集
- 兼田芳宏 (1988) 「宮城県仙台市下内緒遺跡」埋蔵文化財調査研究所報告書第10集
- 川名秀一 (1994) 「元袋遺跡-第2次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第188集
- 工藤哲司他 (1984) 「富沢・水田遺跡 第1冊・病院建設に伴う泉崎前地区的調査報告書」仙台市文化財調査報告書第67集
- 工藤哲司他 (1988) 「富沢遺跡-24次調査富沢中学校地区発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第113集
- 小井川和夫・高橋守克 (1977) 「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城県史』第5号
- 小井川和夫 (1981) 「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
- 後藤勝彦他 (1978) 「伊治城跡II」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊
- 斎野裕彦 (1987) 「富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集
- 斎野裕彦 (1992) 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)-富沢遺跡第70~75・77・79次、発掘調査報告書-」「下内浦遺跡-第5次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第163集
- 佐藤甲二 (1988) 「富沢遺跡-第28次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第114集
- 佐藤甲二・中富洋 (1990) 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)-富沢遺跡第50~56次・山口遺跡第11・12次-」仙台市文化財調査報告書第135集
- 佐藤甲二 (1990) 「富沢遺跡第49次」『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集
- 佐藤甲二 (1993) 「下内浦遺跡-第4次発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第173集
- 佐藤甲二 (1994) 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(7)-富沢遺跡第87次-」仙台市文化財調査報告書第184集
- 佐藤甲二 (1994) 「仙台市域の水田跡・墓跡・小溝状造構群」『第5回東日本の水山跡を考える会-資料集-』
- 佐藤 嘉他 (1983) 「下内浦遺跡」仙台市文化財調査報告書第59集
- 佐藤 洋他 (1981) 「山口遺跡」仙台市文化財調査報告書第33集
- 佐藤 洋 (1987) 「六反田遺跡III-名取川下流域の绳文時代後期・鉄令時代集落跡」仙台市文化財調査報告書

第102集

- 篠原信彦他 (1982) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第40集
- 篠原信彦他 (1983) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第56集
- 篠原信彦他 (1986) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V」仙台市文化財調査報告書第89集
- 篠原信彦・吉岡恭平 (1987) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報VI」仙台市文化財調査報告書第101集
- 主浜光朗 (1990) 「大野田古墳群一発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第138集
- 庄子貞雄・山田一郎 (1980) 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城一帯と54年度発掘調査報告』
- 白鳥良一 (1980) 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』
- 中山則和他 (1984a) 「山口遺跡II-仙台市体育館建設予定地-」仙台市文化財調査報告書第61集
- 田中則和他 (1984b) 「六反山遺跡II」仙台市文化財調査報告書第72集
- 田中則和他 (1992) 「年報13」仙台市文化財調査報告書第167集
- 東北学院大学考古学研究部 (1975) 「鳥居塚跡群二角田南地区発掘調査報告」「温故」第9号
- 土岐山式 (1980) 「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集
- 中富 洋 (1991) 「山L1遺跡 第9次・10次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第151集
- 丹羽・小野寺・阿部 (1981) 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集
- 丹羽 茂 (1983) 「宮前遺跡 朽木機械穴古墳群」宮城県文化財調査報告書第96集
- 平間亮輔 (1989) 「宮沢・泉崎浦・山口遺跡-宮沢遺跡第36~48次・泉崎浦遺跡第4次・山口遺跡第5~8次-」仙台市文化財調査報告書第128集
- 平間亮輔 (1991) 「宮沢遺跡-第35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集
- 平間亮輔 (1991) 「宮沢・泉崎浦・山口(3)-宮沢遺跡第57~68次・山口遺跡第13・14次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第152集
- 真山 恒 (1981) 「東山遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集
- 真山 恒 (1987) 「荒沢・大沢窓跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集
- 真山恒・柳沢和明 (1991) 「多賀城跡」「宮城県多賀城跡調査研究所年報」1991
- 村田晃一 (1992) 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」「東日本における古代・中世窓業の諸問題」
- 結城慎一他 (1987) 「年報8 昭和61年度-」仙台市文化財調査報告書第107集
- 結城慎一他 (1987a) 「仙台平野の遺跡群VI-昭和61年度発掘調査報告書-」仙台市文化財調査報告書第97集
- 結城慎一他 (1987b) 「大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第108集
- 吉岡恭平他 (1984) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」仙台市文化財調査報告書第69集
- 吉岡恭平他 (1985) 「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV」仙台市文化財調査報告書第82集
- 吉岡恭平他 (1989) 「宮沢遺跡・泉崎浦遺跡-仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I」仙台市文化財調査報告書第126集
- 渡部弘美 (1987) 「元袋田遺跡-奈良・平安時代集落跡調査報告-」仙台市文化財調査報告書第103集
- 渡部 紀他 (1988) 「ドノ内浦遺跡 みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第115集



写 真 図 版

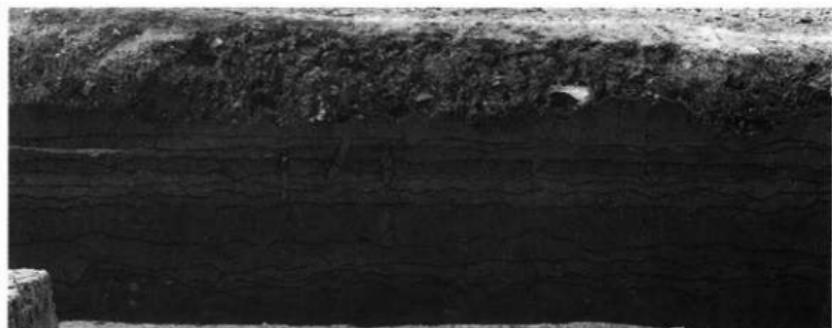


写真1 調査区南壁断面（Ⅲ区、I-1グリット、北より）

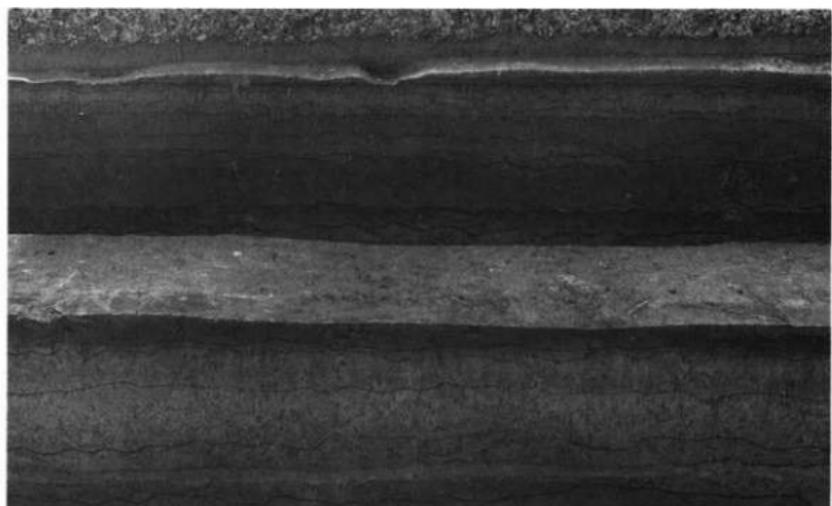


写真2 調査区南壁断面（Ⅲ区、I-3グリット、北より）

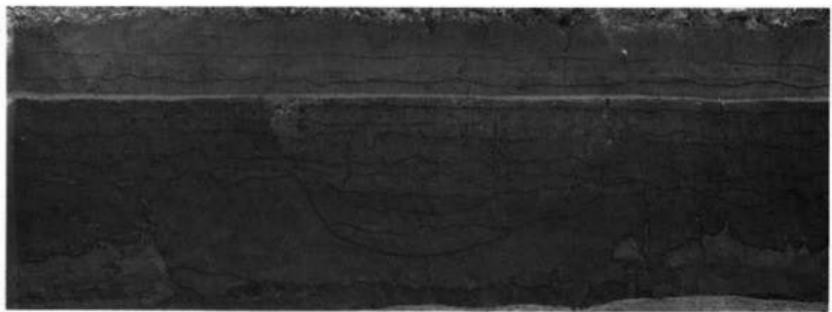


写真3 調査区南壁断面（Ⅳ区、I-8グリット、北より）

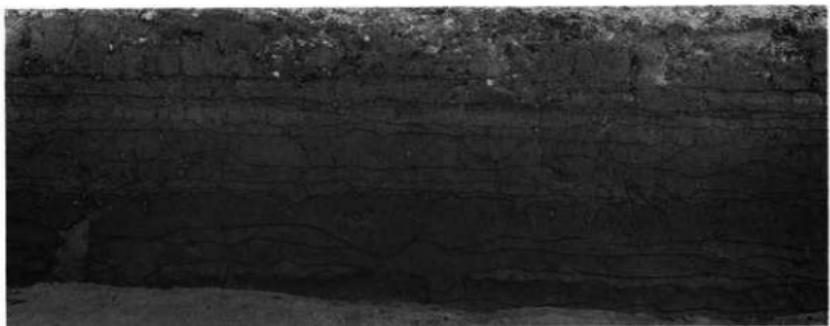


写真4 調査区東壁断面（IV区、E-8グリット、西より）



写真5 調査区東壁断面（IV区、G-8グリット、西より）

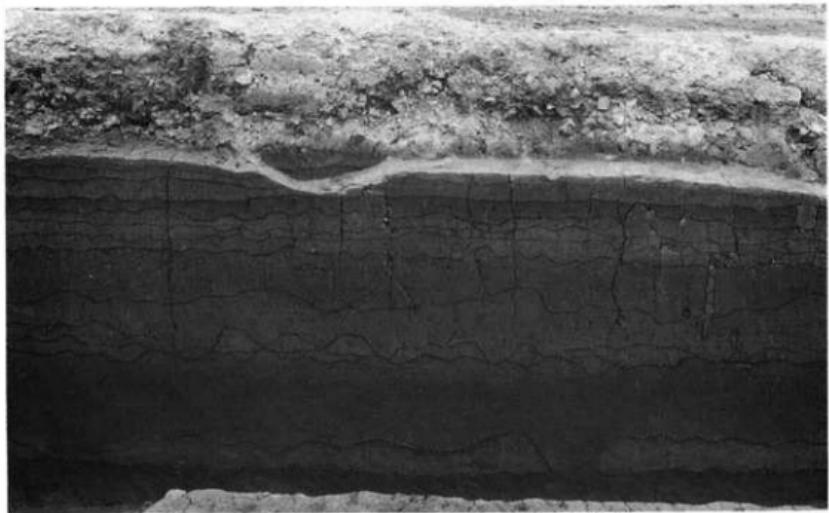


写真6 調査区西壁断面（III区、I-1グリット、東より）

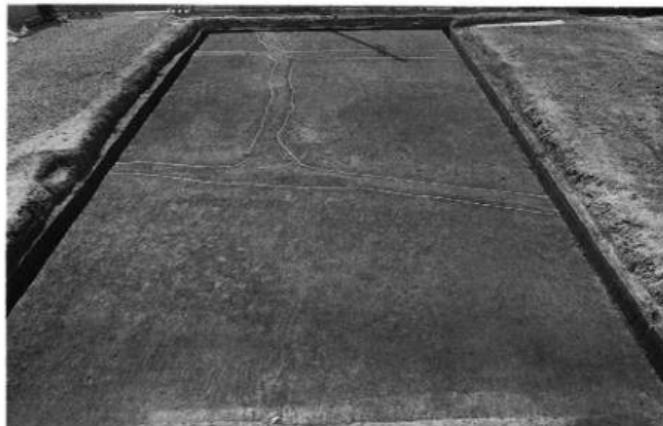


写真7  
第4層水田跡  
全景  
(Ⅲ区、東より)



写真8  
第5b①層水田跡  
全景  
(Ⅲ区、東より)



写真9  
第5b①層水田跡  
畦畔接出状況  
(Ⅲ区、西より)



写真10  
第5 b ①層上面検出  
遺構完掘全景  
(IV区、北より)



写真11  
SD 1 a・b 溝跡  
完掘全景  
(北より)



写真12  
SD 2 溝跡完掘全景  
(北より)

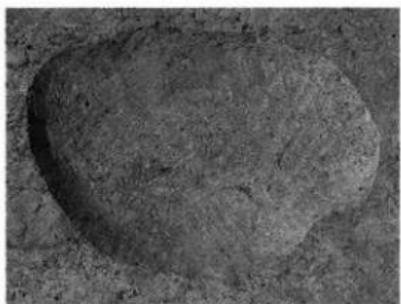


写真13 SK 1 土坑完掘全景（南より）

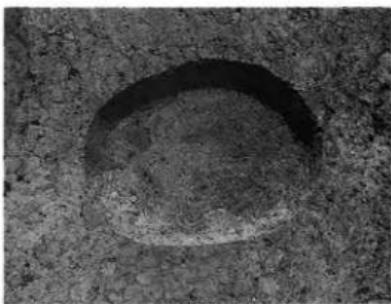


写真14 SK 2 土坑完掘全景（東より）

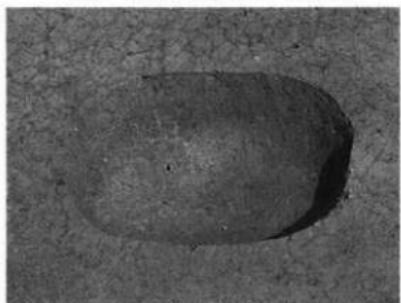


写真15 SK 3 土坑完掘全景（南より）

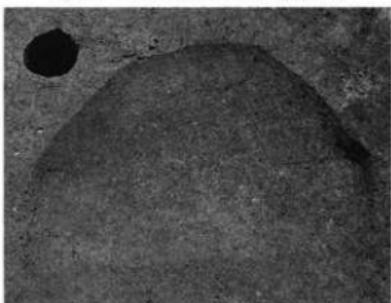


写真16 SK 4 土坑完掘全景（南より）

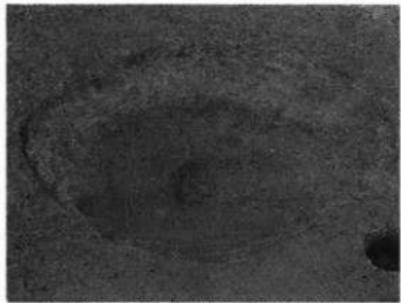


写真17 SK 5 土坑完掘全景（南より）

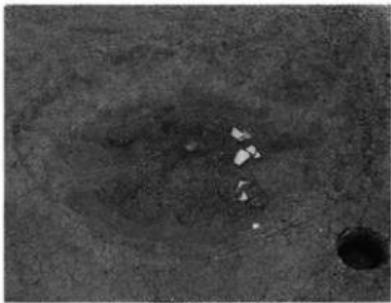


写真18 SK 5 土坑炭化物堆積状況（南より）

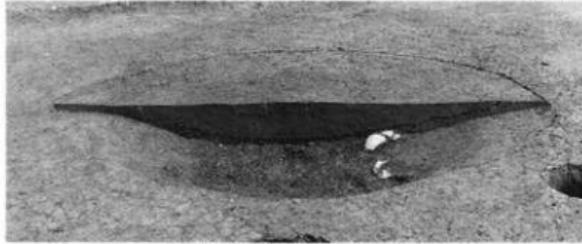


写真19 SK 5 土坑断面（南より）



写真20 SK 6 土坑完掘全景（南より）



写真21 SK 7 土坑完掘全景（南より）

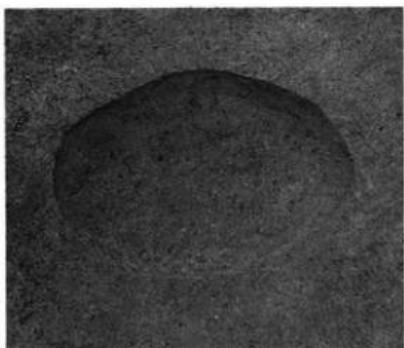


写真22 SK 8 土坑完掘全景（西より）

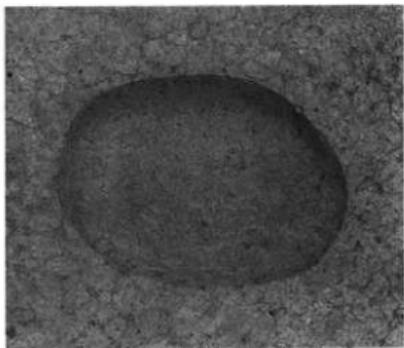


写真23 SK 9 土坑完掘全景（北より）

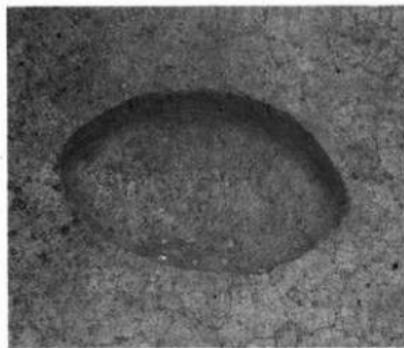


写真24 SK 10 土坑完掘全景（北より）



写真25 第5b①層小溝状遺構群  
(小溝⑧) 土器出土状況（南より）



写真26  
SD 3 溝跡完掘全景  
(北東より)

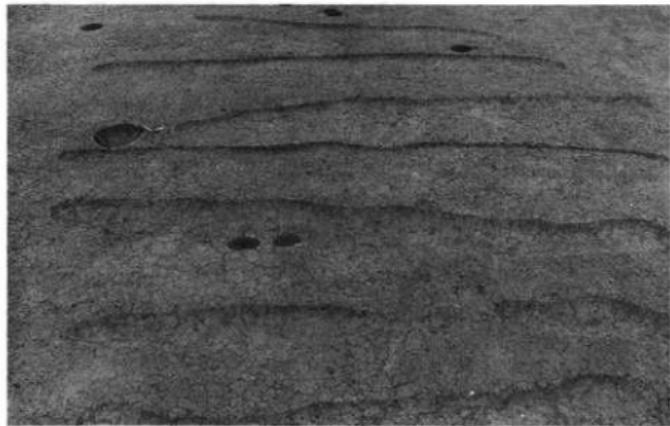


写真27  
第5b①層小溝状造構群  
完掘全景  
(南より)



写真28  
SD 4 溝跡完掘全景  
(北より)



写真29 第5b(2)層水田跡全景（Ⅲ区、東より）

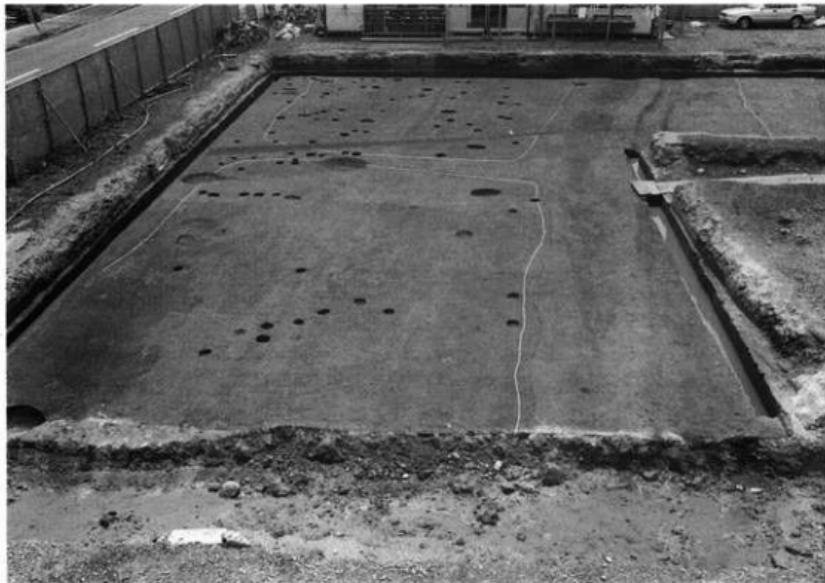


写真30 第5b(2)層水田跡全景（Ⅳ区、北より）



写真31 第6a層水田跡全景(Ⅲ区、東より)



写真32 第6a層上面検出造構完掘全景(Ⅳ区、北より)



写真33 SD 5 溝跡完掘全景（南より）



写真34 SD 1、4、5 溝跡断面（南壁、北より）

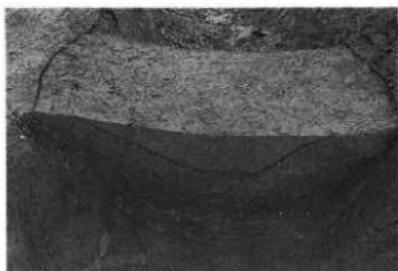


写真35 SD 5 溝跡断面（南より）



写真36 SB 1 建物跡全景（北より）

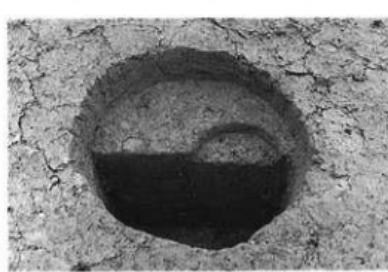


写真37 SB 1 建物跡柱穴断面  
(SB 1-P 5、東より)



写真38 SB 2 建物跡全景（北より）



写真39 SB 2 建物跡柱穴断面  
(SB 2-P 4、東より)



写真40  
第6a層小溝状造構群  
確認状況  
(A群、北より)

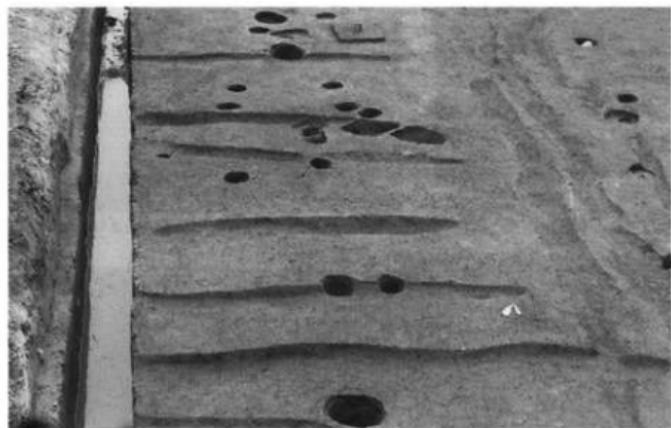


写真41  
第6a層小溝状造構群  
完掘全景  
(A群、北より)



写真42  
第6c層発跡検出状況  
(III区、東より)



写真43 第6c層畠跡全景（Ⅲ区、東より）



写真44 第6c層畠跡・SD 6溝跡全景（Ⅳ区、北より）

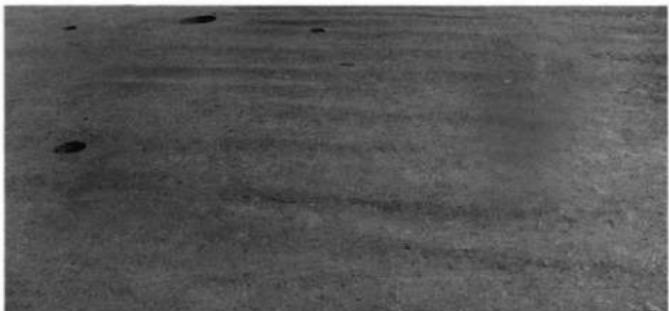


写真45  
第6c層島跡全景  
(Ⅲ区、北より)



写真46  
第6c層島跡全景  
(Ⅳ区、北より)



写真47  
第6c層島跡断面  
(西壁、H-1グリッド  
南側、東より)



写真48  
第6c層島跡断面  
(西壁、H-1グリッド北側  
東より)

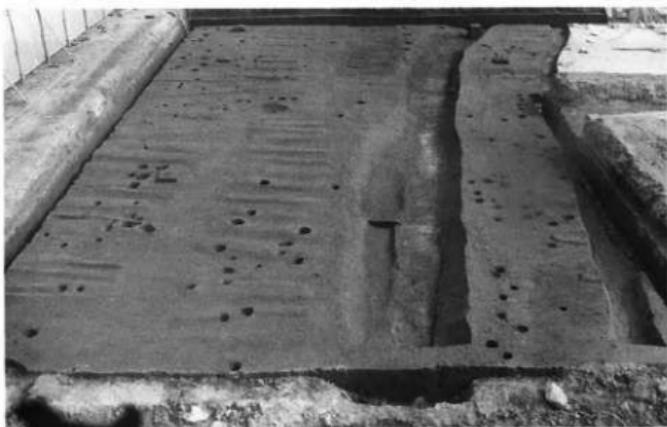


写真49  
第6c層島跡・  
SD 7溝跡全景  
(IV区、北より)



写真50  
SD 7a 溝跡断面  
(南より)



写真51 第6c層島跡土師器坏出土状況  
(南壁断面、I-7グリッド、北より)

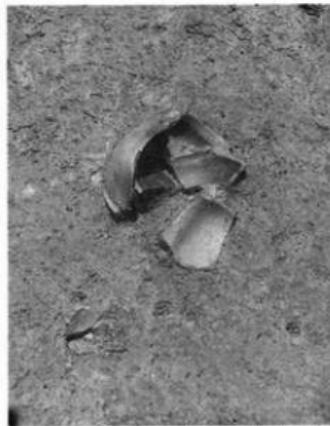


写真52 SD 6 溝跡土師器坏出土状況  
(北より)

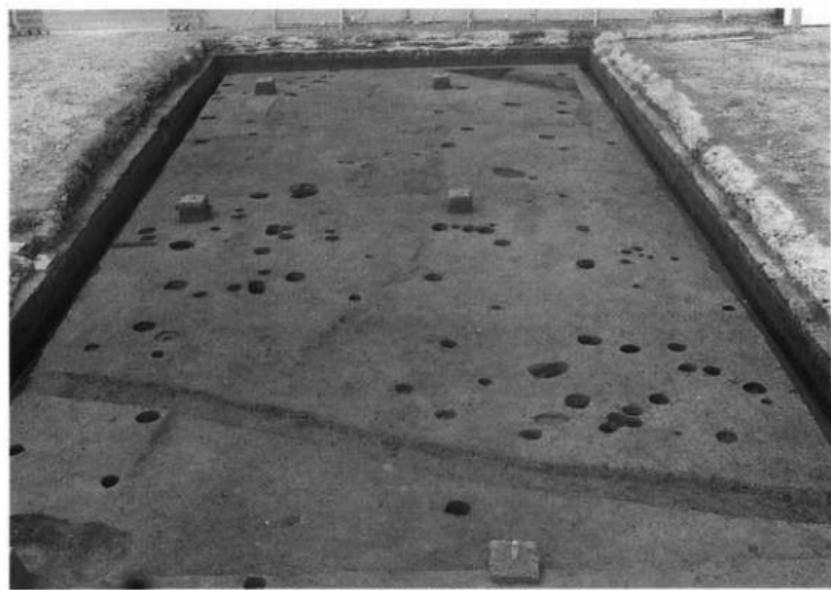


写真53 第7a層上面検出遺構完掘全景（III区、東より）



写真54 第7a層上面検出遺構完掘全景（IV区、北より）



写真55  
SB 4 建物跡全景  
(南より)



写真56  
SB 4 建物跡柱穴断面  
(SB 4 - P 4、東より)



写真57 SB 3 建物跡全景 (北東より)



写真58 SB 4 建物跡須恵器蓋出土状況  
(SB 4 - P 5、西より)



写真59  
第7a層小溝状造構群  
全景  
(IV区北半部、北より)



写真60  
第7a層小溝状造構群  
全景  
(IV区南半部、東より)



写真61  
第7a層小溝状造構群  
耕作痕断面  
(小溝⑤、南より)



写真62 第7a層小溝状遺構、耕作痕検出状況  
(小溝⑤、東より)



写真63 第7a層上面小溝状遺構群  
耕作痕検出状況 (小溝③、西より)

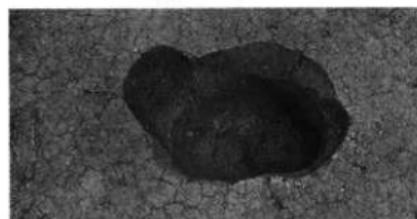


写真64 SK 11土坑完掘全景 (北西より)

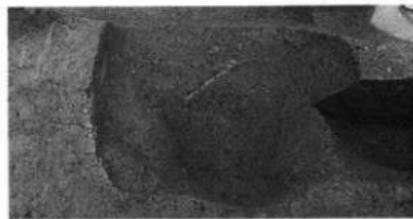


写真65 SK 12土坑完掘全景 (西より)

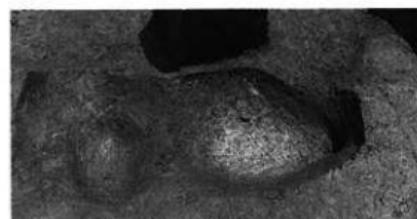


写真66 SK 13土坑完掘状況 (西より)

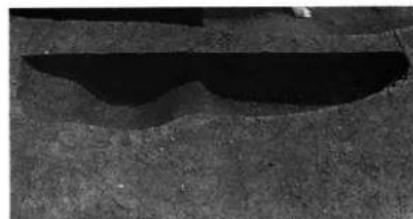


写真67 SK 12・13土坑断面 (西より)



写真68  
SD 8 溝跡完掘全景  
(北東より)



写真69  
SD 8 溝跡断面  
(南西より)

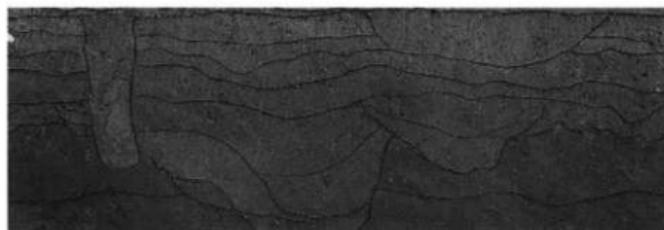


写真70  
SD 9 溝跡・小溝状  
造構断面 (西より)



写真71 SD 9 溝跡断面 (南より)



写真72  
SD 9 溝跡完掘全景  
(南より)



写真73  
SD 9 + 10溝跡  
完掘全景  
(南より)



写真74  
SD 10溝跡断面  
(南より)



写真75  
SD 11溝跡完掘全景  
(南西より)



写真76  
SD 11溝跡断面  
(南壁 I - 8  
グリット、北より)



写真77  
下層調査区断面  
(北より)



写真78  
下層調査区  
(西より)



写真79  
第7a層上面作業風景  
(IV区、北より)

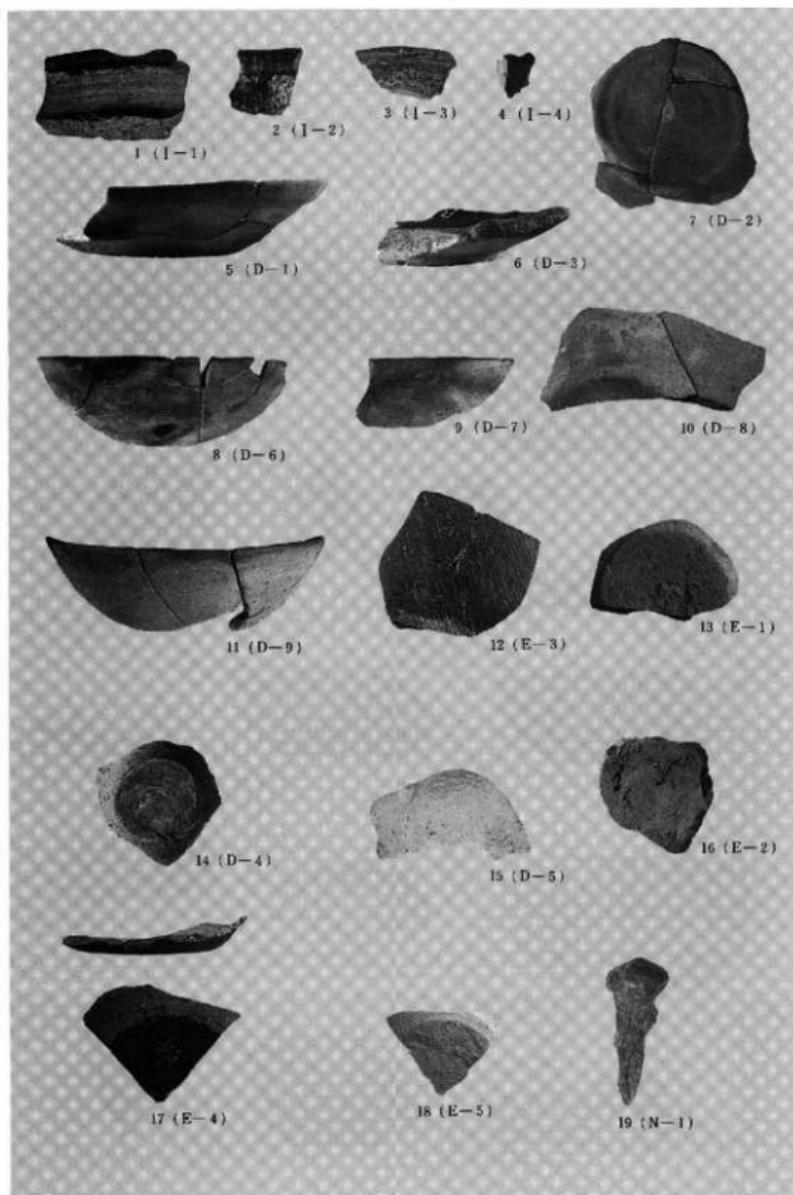


写真80 出土遺物 (1)

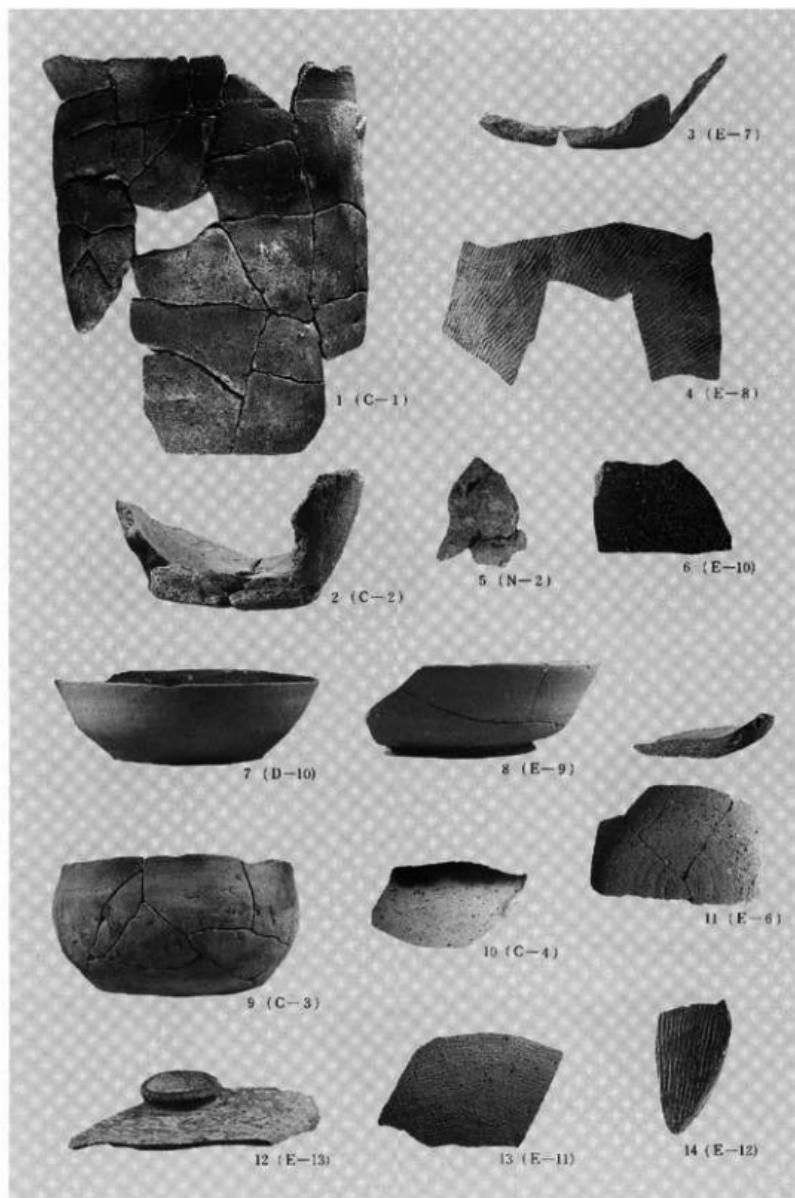


写真81 出土遺物(2)

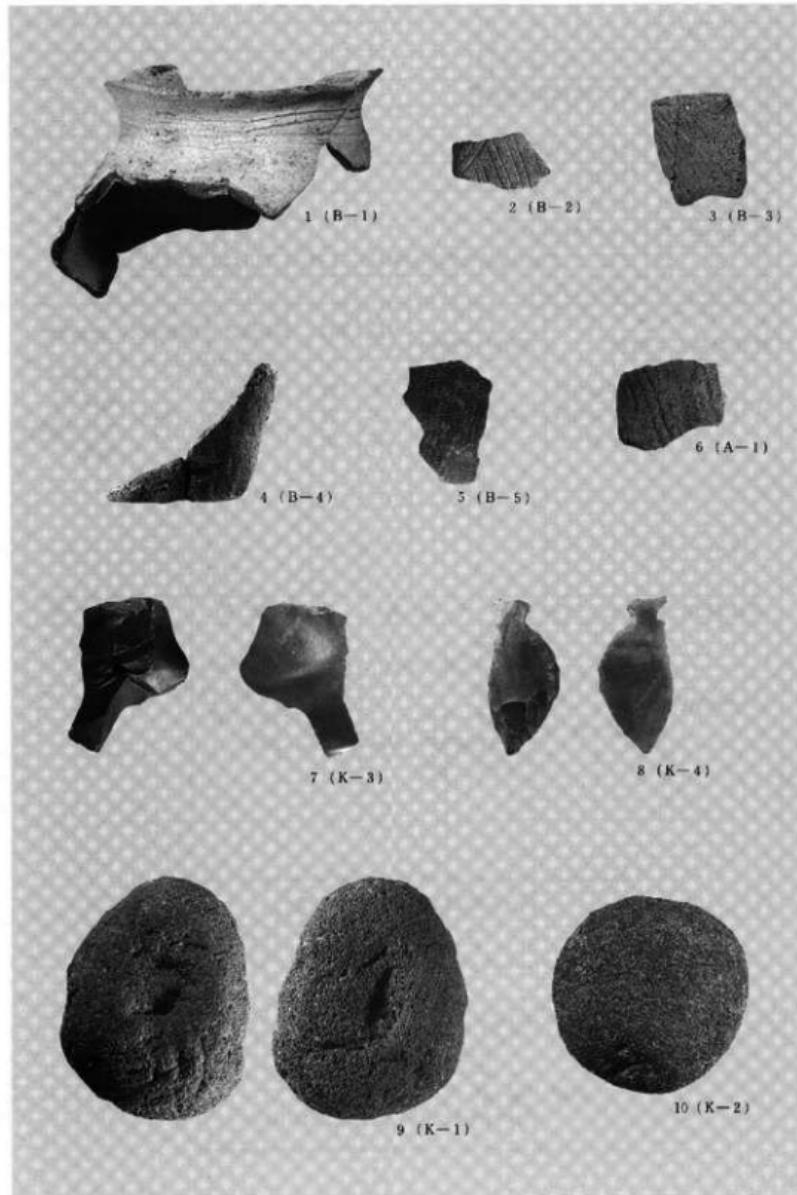


写真82 出土遺物(3)

## 報告書抄録

ふりがな	しものうちうらいせき							
書名	下ノ内浦遺跡							
副書名	第5次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第202集							
編著者名	神成浩志							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下ノ内浦遺跡	宮城県仙台市太白区長町南四丁目32-1	04100	01368	38°12'49"	140°52'27"	19940418 ~19940926	550m <sup>2</sup>	共同住宅建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下ノ内浦遺跡	水田跡 畠跡 集落跡	平安 （奈良～平安） 縄文	水田跡 (平安以降、平安) 畠跡 (奈良～平安) 掘立柱建物跡、溝跡 (平安、奈良)	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤燒土器、陶器、石器、石製品、鐵製品				

仙台市文化財調査報告書第202集

### 下ノ内浦遺跡

—第5次発掘調査報告書—

平成7年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

